

たとえば、全てに否定されようとも

Laziness

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

魔道師。それが、世界の大きな変革となった。

世界各国が、魔術の素となる【亜素】の発見により、魔道師育成を始めた。

しかし日本は、その魔道師育成に失敗した。

植民地まで堕ちた日本は、新たなチカラを手に入れた。

植民地生活が終了してから、実に45年。

傲慢な貴族。世界最大規模機関。大規模内乱。

少年・少女は、その中で何を思い、感じるのか？

全世界を巻き込んだ、少年の物語が今始まる……。

目次

設定回	1
入学く身の程知らぬ愚者よ	
Setting the name of prologue	
4	
I・第一話	8
I・第二話	12
I・第三話	15
I・第四話	20
I・第五話	22
I・第六話	25
I・第七話	28
新人戦く我、頂点を望まん	
II・第一話	32
II・第二話	34
II・第三話	38
II・第四話	42
II・第五話	47
II・第六話	51
エクラ・サン・ペルデユく史上最大の兄弟喧嘩	
III・第一話	54
III・第二話	57
III・第三話	63
III・第四話	66

V・第一話	159
T A T ユナイテッドワークス	
IV・第九話	155
IV・第八話	152
IV・第七話	147
IV・第六話	144
IV・第五話	140
IV・第四話	136
IV・第三話	133
IV・第二話	126
IV・第一話	123
特別講師く大尉、ちよつとがんばるく	
III・第十七話	116
III・第十六話	110
III・第十五話	107
III・第十四話	103
III・第十三話	97
III・第十二話	93
III・第十一話	88
III・第十話	85
III・第九話	82
III・第八話	79
III・第七話	75
III・第六話	72
III・第五話	69

VI・第八話	242
VI・第七話	237
VI・第六話	231
VI・第五話	228
VI・第四話	219
VI・第三話	205
VI・第二話	201
VI・第一話	196
眞実へ	
V・第十話	191
V・設定補足回（第九話）	187
V・特別設定回（八話）	184
V・第七話	181
V・第六話	178
V・第五話	175
V・第四話	168
V・第三話	165
V・第二話	162

設定回

天城翔

主人公。髪の色は黒色。目の色は紫。

言ってることはちよつとクールっぽいのに、心の中で考えてることはいろいろとおかしい。女の子相手に、かわいい！とか思うと、日本支部から怨念が飛んでくる。

使用武器・・ALL

得意解術・・スピード系

☆得意魔術・・武器に亜素を移動させ、攻撃力を数百倍にする。

清輝美麗

生徒会長「清輝壬」の妹。髪の色は黒。目の色は赤。髪は肩甲骨ぐらいまで。

なんか、いかにも「真面目」って言葉が似合いそう。作者の気が変わらなければ、デレない。

使用武器・・ライフル「セミオートに謎のこだわり」

得意解術・・弾道補正

清輝壬

生徒会長。髪の色は黒。目の色は赤。妹とめっちゃ似てる。

みんなで協力とかいう、作者が嫌いなタイプ。貴族であることを誇っていない。

使用武器・・刀

得意解術・・攻撃速度を速めて、抜刀の速度を上げる。

鏡月里祢

明るい子。髪の色は黒。目の色はオレンジ。髪は肩までの長さ。

天城の友達1号。どうやら天城に好意を抱いているようでもある。

使用武器・・細剣

得意解術・・回避速度

比木知美

1A担当教師。髪の色は黒。目の色は紫。髪は首が見えるぐらい短い。

口調が柔らかい先生。決闘で口調が乱れたため、キャラ作りなのかもしれない。

使用武器・・槍

得意解術・・治癒速度上昇（自他共に）

朝田康

髪の色は黒。口の右下のほくろが特徴。目の色は水色。

THE・SIMPLEという言葉が似合う生徒。

使用武器・・ダガー

得意解術・・速度解放

いつかの狂信者（兼孝昌宏）

―退学者のため情報が不足しています―

朝仁江

髪の色が黒。額がありえないくらい見える。目の色も黒。

熱血なのか冷酷なのか分からない先生。飴と鞭を使い分けているのだろう。

使用武器・・大剣

得意解術・・攻撃力上昇

有里美^{ありみ} 杏^{あん}

髪の色が黒。腰ぐらいまでの髪の長さ。目の色は黄緑

天城には真剣に恋愛感情を抱いている。WN×WR日本支部長

使用武器・・銃全て、接近されたら短剣

得意解術・・弾道補正

アルファレム・オーデイン

WN×WR元帥 外見の詳細は不明。

WN×WR

世界で選り抜かれたエリート中のエリートだけを集めた組織。

世界各国に軍を派遣している。本部はNSAにある。

どの国の直属でもない、独自の組織。階級こそ軍隊のものだが、正式な軍隊ではない。

任務によって烙印を変えるため、組織の中では身分が一切意味を持たなくなる。

日本国立高等学校レベル

Iは、全員平民。IIは、成績優秀の平民、身分の低い華族等。

IIIは、貴族と身分の高い華族。

地球最後の兵器

世界に2人の、魔術と解術を両方習得できる人材。

そのうちの一人は、天城翔。

魔術と解放術が両方習得できない理由について

「亜素」を使用したのが魔術。それを習得できなくしているのが「対素」。

解放術は、その対素を利用している。

よって、魔術と解放術は両方習得できない。

リ・エイフォニオ・アース

高速で間合いを詰めて、強打を繰り出す技。

ファンセブ・ジーアラッド

超高速で突進する技。その速度は天城は音速並だという。

☆PAP (Power Assist Program)

一度説明したが、術式制御などを補助してくれる器具。

入学く身の程知らぬ愚者よ

Setting the name of prologue

入学式とは、桜舞い散る校門をくぐり、新たな学校生活に思いを馳せるものではなかったか？

この少年はそれとは異なっていた。

「相変わらずだな、この視線は」

四月一日 日本国立高等学校レベルⅢ

2065年現在では、最高位の高校だ。

そこに入学した俺、天城翔あまぎしゅうのテンションは入学早々最悪だった。

「はあ、何故俺がこんなところに……」

答えは返ってこないと分かっているながら、彼はそんな愚痴をこぼした。

彼に向けられている視線は、好意でもなければ興味でもない。

自分たちとは、異なる生物を見るような目だ。

……少し語弊があった。興味は少しだけあるかもしれない。

「まあ、原因は家柄だろうな」

大抵、レベルⅢとなると貴族の家の者たちが入る学校だ。

ならばこの人間はどうだろう。

そう、天城翔は一般人なのである。

父親と母親は、いない。どちらも彼が物心ついたときには、この世を離れていた。

よって、家族構成は……構成なんてあったもんじやない。

1人なんだから。

「このご時勢、家柄だとかなんだとか。本当、煩いったらありやしな
い」

何故このような格差が生まれたのか？

原因はこの国、日本国の歴史にある。

2010年9月、第一次魔道大戦勃発

2005年より世界各国で、魔道師育成が開始された。

魔道師が生まれたのは【亜素】というものが原因なのだが……
詳しくは、今の説明で省かせてもらおう。

その育成で真っ先に活躍したのは、過去に欧米列強に分類された国である。やはり欧米列強は科学の力も凄いのだ。

その育成に日本は……失敗した。

それにより、一時は世界に注目された島国は徐々に活気を失っていった。

そこへ2008年、米国が日本との同盟関係を断ち切った。

用心棒も力も失った日本に、さらなる悲劇が訪れた。

世界は明治維新前のように、欧米列強と植民地という構造に戻ってしまった。

当然のごとく、日本もその標的にされた。

同盟関係を断ち切った米国

……その名を変え、NSA (Neo Strong Aggregat
ion) が、戦争を仕掛けてくる。それが先ほど記した、第一次魔道
大戦である。

当然、魔道師という名の兵器を持たない日本は惨敗した。

そしてこの世から、日本という名は消え、NSAとなった。

植民地生活は、それから2018年まで続いた。

日本の植民地生活が終了したのは、2020年のことである。

もはや魔道師育成は不可能だ。そう悲観し、全てを失った日本のも
とに、一筋の光が見えた。

そこで生まれたのが、解放術である。

解放術を編み出したのは、とある1人の男であった。

だが、今は彼のことは話に出さないでおこう。

そしてその力をものにした日本。当然このような戦争が起きた。

2020年 日本国独立戦争

日本はこの戦争に勝利し、再び活気を取り戻した。

そしてその後の日本は、金銭や食料が不足した。

故に、貧富の差が大きくなってしまった。

家柄が大きな影響力を持つようになったのはこのころからだと言える。

今では、政権を名家に委ねられているのである。

勘違いしないでほしいが、名家はそれだけではない。

大企業なども名家と認定される。

「はあ、帰りたい」

そう呟いたとき、彼に声が掛けられた。声のするほうへ振り返ると

……

「おい、その平民。ここはお前みたいな野蛮人が足を踏み入れている場所じゃねえ。帰りたいなら帰りやがれ」

いかにもモブって感じの男がいた。

……初対面でそれは酷いな。自分でもそう思うわ。

「ほら、やっぱりいるんだよ。こういうの」

彼はだれにも聞こえないような声でそう呟いた。

「そうか、あんたにはそんな校則が書かれた学生証が渡ったんだな」

俺は皮肉交じりにそう言っただがしかし……

「ふん、何が校則だ！ 貴族は貴族の在るべき場所に！」

平民はおとなしく貴族の支配下に置かれる！ この世の常識だろ」

え？ あ、そう返してくるのね。天城さん予想外。

「この世ね。あんた、世界を見たことあんの？」

ムキになる気はないが、こう返すのが妥当なんじゃないか？

これで舌打ち一発かまして帰ってくればいんだが……。

「仕方ねえ、てめえに平民と貴族の違いを見せつけてやるよ」

あれ？ まって聞こえてなかった？ ちよ、ちよっと逃げよう。

「おい、とりあえず時間を見ろ。遅れるぞ」

気づけば、入学式に遅れるぐらいの時間になっていた。

好都合じゃん。流石俺、幸運だ。どこぞの不幸な主人公とは違うな

！

「くそつ、おいお前、後で話がある」

そう言うと、彼は走り去って行った。

「朝から面倒くさい奴に絡まれたな……やばっ！俺まで遅れる！」
俺も学校を目指して走っていった。

うわー、後で話して……。絶対面倒くさい事案じゃん！

俺の15年間で培った勘がそう言ってる。

I・第一話

「これより、日本国立高等学校レベルⅢ入学式を執り行う」

俺はあの後、体育館へ入場し、無事に遅れることなく、入学式に参加した。

決して叶わぬ願いだが、心の中で「眠りませんように」と呟いた。

「学校長、挨拶」

「皆さん、おはようございます。」

さて、あなた方は今どんな気持ちでしょうか？ これからの学校生活に期待を抱いている方。貴族という優越感に浸っている方。あなた達が何を 考えようか思おうかは自由ですが、私からはこれだけ伝えておきます。自分の実力や家柄に傲慢になる者は、出ていってどうぞ。成りたいものがあるなら、自分の力で成り上がってみなさい」

まあ、あれだろ。金やコネも学園の生徒になったら、使えないっていう話だろ。知らんけど。

「続いて、生徒会長挨拶。清輝 壬」

「皆さん、ご入学おめでとうございます。生憎、辛口なのは学校長の仕事のため、私からは素直な祝辞を述べさせていただきます。我々生徒会は、皆様の有意義な学校生活を全力で補助致します。先頭ではなく、中心となれるような生徒会にしていきますので、新入生の皆様も自由で意義のある学校生活を送っていただきたい。おっと、私もそこまで時間を頂いているわけではございませんので、この辺りで失礼させていただきます。我々生徒会は、あなた方が素晴らしい学校生活を送れるよう、活発な生徒会にしていきたいと考えております。皆様、有意義な学校生活を」

……長っ！ 良い話っぽいけど長いわ!!

「続いて、新入生代表挨拶。清輝 美麗」

はあ、帰りたい(2回目)というか、生徒会長も清輝だよな。……その家は安泰だな。

「うららかな春の日差しが、私達新入生を歓迎しているように感じます。」

さて、私達新入生は学校長、生徒会長からの祝辞を頂き、大変嬉しく存じ上げております。私達もレベルⅢの生徒として恥じない学校生活を送りたいと考えております。そのためには、日々の学業などに手を抜かずに常に向上心をもって取り組みたいと考えております。仲人と高めあつて常に上を目指していけるような良きライバルとして、有意義な学校生活を送りたいと考えております。私達の入学を祝してくださる皆様に最大の感謝を込め、新入生代表挨拶とさせていただきます。ご静聴、感謝申し上げます」

会場は拍手や歓声に包まれた。きつと素晴らしい挨拶だったんだろうな。うん。……知らんけど。

「これにて日本国立高等学校レベルⅢの入学式、全行程を終了する」
え？ これだけなんすね。そういや、ここ入学式が恐ろしく短い学校として有名だったんだ。政府の肥えてるおじ様が、長居が嫌だとか何とか。

「全校生徒は直ちに、学生証に記されているクラスの教室に向かうように」

えーと、俺は1年の……A か。

IN 1A

「やっぱりこうなるのかよ。知ってたけど」

もちろん大量の視線が俺に注がれた。

そういえば、何故あつた瞬間に平民と分かったのか？ 疑問に思った人がいるだろう。

その答えは、「烙印」である。この時代の身分は、

1、超名家共の集まり 〔貴族〕

2、1の分家である 〔華族〕

3、軍事兵士 〔武族〕↑この中でも最高職等に就く者は

貴族に分類される。

4、普通の国民 〔平民〕

である。

それぞれを分類されるために使われるのが、「烙印」である。

1は無印

- 2は鳥
 - 3は剣
 - 4は花
- である。

天城には、首に花の烙印が押されている。

「はあ、ここは関わらないのが一番だな」

ちなみに、今朝喧嘩を吹っ掛けてきた奴はここにはいなかった。
やったぜ！

そんな馬鹿なことを思いながら、俺は席についた。

「うん、暇だ。……本でも読むか」

そう言っただけ俺は鞆の中から、「デート・ア・リブ」と書かれた本を取り出した。

本を読み始めてから数分たったところで担任であろう教師が教室に入ってきた。

「はーい、みんなせきについてえ」

なんというか、やわらかい先生だった。

「今日から貴方達の担任になる比木^{ひぎ}知美^{ともみ}です。よろしくうやる気出して、先生。あ、俺が言えたことでもないか。

「さて、皆待つてたでしよ。お待ちかねのじこしよかい!!」
待つてない待つてない。少なくとも俺は待つてない。

「じゃあ、出席番号順に行こうか。まず一番は……」

やばっ、俺初めの文字「あ」じゃん！

「朝田^{あさだ}康^{けい}くん！」

よかった。ありがとう、朝田

「はい、僕の名前は朝田康といいます。得意戦法は、中距離狙撃から速度解放を使っで一気に接近して、ダガーで攻撃することです。よろしくお願いします」

「はーいよろしくお願いします。では次に……天城翔くん！」

はあ、ついに来てしまった。俺は仕方なく席を立った。

「はい、自分は天城翔と申します。見ての通り平民。特筆すべき点はないと思われまますので、生活していく中でいろいろと観察していく

ださい。以上です」

俺は、最低限のことだけ話して、席に着いた。

「あら〜得意武器とかはないんですか〜?」

「そうですね、やはり片手剣が一番つかいやすいですね」

「得意な解術はなんですかあ〜?」

長いよ、知さん。

「強いて言えば、ちよつと反射神経が良くなるくらいですかね」

「は〜い、ありがとうございますあ〜」

はあ、疲れた。

このあとも、知さんによる公開処k……もとい、自己紹介がつづいた。

「はい、みなさんこれから仲良くしてくださいねえ〜」

やつと終わった。まあ俺は半分くらい聞いてなかったけど。

「では次に、校内での禁止事項をお話ししますねえ〜」

まず一つ目は……

学校内において、許可を得ない争いを禁ずる!

んでもって二つ目は〜

いかなる目的であろうと、許可を得ない解放術、武器の使用を禁ずる!

そして三つ目は〜

家の権力などで、他人を誹謗・中傷したり、差別したりしない!

この三つは最低限守らなきゃいけないことですよ〜」

先生、残念ながら今朝、校則違反者を一名発見しました。天城さん悲しい。この学校腐ってんのか? ……偏見かな?

「あら、もうこんな時間でしたかあ〜。それではみなさん、明日から一緒にがんばりましょう!」

こうして、俺の学校生活一日目は、幕を閉じた。

I・第二話

「おい、おまえー！」

「ん？」

後ろから声をかけられて振り向くと、朝の奴がいた。

「ああ、あのときの狂信者か」

「おい貴様、話があると云っただろ。何故帰ろうとしている？」

ああ、面倒くさい案件か。いやもう、帰りたい。

「わ、忘れてはなかったぞ。ただその……忘れようとしていただけで」

そう、忘れようとはした。でも、人間そう簡単に忘れられるもん

じゃないのね。知ってたけど。

「いや、別に俺が決めたことじゃないし。しかも、担任にも言われただ

ろ、家での差別は禁止だって」

「ふん、仕方ない。俺は誇り高き貴族の人間だからな。規律を破るよ

うなことはしない。だが、認められた決闘はしてよいのだろうか？」

あ、何？あんた決闘する気だったの？

「お、おう。そうだな」

「ならば愚民。俺が貴様に実力の差を見せてやろう」

えー。面倒くさい。はいはい。そーですか。

「しかもそれだけじゃ足りねえな。負けたら退学だ。退学！」

「うわー……」

「貴様！ 何だその嫌そうな顔は!!」

実際嫌ですしおすし。

「ほ、ほんとにやんの？」

「当然だ!! 今更怖気づいたか？」

狂信者は鼻で笑ってきた。

「あーそうですね。怖気づきましたー」

なんかこう言えば諦めてくれない？

「はっ！ 貴様が怖気づこうがやるのだ！ そうだな、帰って里に帰

る準備でもしておくんだな!!」

そこまで田舎モンじゃねえよ。里って何だ里って。

結局、クラスメイトと一言も話さず帰っていった。

IN Amagi's house

「ああ、つかれた。ただいまー」

当然、返事は帰ってこないわけで。

「さあて、あしたはどうするかな。

……一応、あいつに相談ぐらいはしておくか」

彼はパソコンを起動し、デスクトップにある「WN×WR」を開いた。

それを開くと、まずは八重にもかけられたロックを解除しなければならぬ。

だが俺は、これは何度も開いたことがあるので難なく突破した。

そして、最終ロックで……

「えーっと、今日の暗証番号は・・・[052633824590861172kkd18.jp]か」

そう、これに限っては、毎日暗証番号が変わるのだ。

それを入力し、俺は「WN×WR」にサインインした。

「まずは、秘匿回線を選択っと。んでもって、通信先をM001に設定。

暗証コードを入力で……接続!!」

……

「やあ、君から来るのは珍しいね」

「お久しぶりです、1か月前の定期総会以来でしょうか」

「ああ、そうだね。今日が入学式だったかな。ごめんね、君にこんな面倒くさい仕事を押しつけてしまって」

「いえ、普通の学校生活を送れるのを楽しみにしているのも事実です」

ちよつと面倒くさいところはあるけれども。

「そうか……そう言ってくれると助かるよ。ところで、何か用事があつたんじゃないのかね」

「ええ、実は入学式当日に面倒くさいことになりました。平民の烙印のせいで、決闘を申し込まれました」

「それは困ったことになったな。負けたときのペナルティなどはある

「のか？」

「はい、退学です」

「……尚更面倒くさいことになったな。じゃあ、勝つしかないわけだ」
「ええ、さしあたってはどれほどまで出していいものかとお尋ねした
くありませんして。」

「うむ……退学がかかっているとなれば、勝たねばならないが……」

よし、武器は学園側から借りろ。そして、3秒以内で決着をつけろ」
「悟られないために早く終わらせると。了解しました」

「ああ、では引き続き任務を続行してくれ」

え、そんな超人的なことしたら逆に怪しまれない？

「はい。それではこれで失礼いたします、元帥」

「ああ、ではまた。地球最後の兵器」

その言葉を最後に俺は通信を切断した。

「地球最後の兵器……か」

I・第三話

俺が学校に行くと、奴が校門前で待ち構えていた。

「おい、決闘の時間が決まったぞ。」

今日の4時に第一訓練室だ。逃げるんじゃないやねえぞ、愚民」

「ああ、なんていうか、朝から大変だな。そういや、お前の名前ってなんなんだ？」

「兼孝昌宏だ。かねあつ まさひろ決闘相手だからな、貴様の名も聞いておこう」

「そうか、おれは天城翔だ」

「理解した。愚民この学院に来たことを後悔すると良い」

そういつて、奴は学院内に行った。

「教えたんだから、そう呼べばいいのに」

おれも、そんなことを言いながら学院へ向かった。

「えーっとー限目は……「術学」か」

おれは、本を読みながら授業が始まるのを待った。

「は〜い、授業をはじめますよ〜」

つて、あんたかよ!!

「やはり初めての授業ですから、基礎から確認しましょうね〜」

基礎……ねえ。

「では、魔道師と解放術師のちがいについてです！

物理的に言つて、魔術と解術を両方習得するのは……無理です！」

ああ、普通はそんなんだっけか。

「魔術と解術は、本質が異なっているわけです。人間という一つのタ
ンクには、同じものしか入れられないのです。では、強制的に習得さ
せるとどうなるか……清輝さん！」

「はい、負荷に耐えられなくなった人体が、内部から破裂します。

例えるならば、そうですね、水風船のような感じですよ」

「はい、ひゃくてんで〜す。

は〜い、では次に解放術師の強さは何で決まるか？ です！

えーっとでは、天城君!!」

……は〜

「はい、えつと脳と強化箇所との連携。あとは、制御能力とかだったと思います」

「はくい、はちじゅってん！」

はあ、そうすか。

「どちらかと言えば、一番深く関わってくるのは術式自体の強度ですね。……と、そういえば天城くん。今日決闘するんですよね？」

「ええ、まあ俺がやりたかったわけではないですが」

「対人戦だと判断能力とかが大切ですよ。がんばってくださいねえ」

そう言ったところで、授業終了の鐘が鳴った。

「あら、終わりましたねえ。では、これまで！」

ああ、おわったあ。

そしてこれからも授業は続いた。

んでもって、昼休み。

「ああ、さっさと食っちゃおうか」

そう話したところで、横から声が掛けられた。

「あの、一緒にご飯食べでもよろしいでしょうか？」

「あ？ おれの安息のtimeを脅かすのは、誰だ？」

「ひっ！ す、すみません！わたし鏡月^{かがみつき}里^{さとね}祢^ねっ^きていいいます！」

「そうか、で、何？」

「いえ、平民さんとお話するのが初めてなので……」

少しでもお話できたならなあと思ひまして。」

「ああ、うん、別にいいんじゃない？」

「ありがとうございます!!」

はあ、飯ぐらいゆっくり食わせてくれよ。

「では、決闘についてです。噂では、退学がかかっていると何かか……」

「ああ、まったくもってその通りだ」

「ごめんなさい!!」

「……は？」

あれ、この子なんかしたっけ？

「いえ、貴族の方は平民って聞くだけで毛嫌いする方が多いのです。きつとその退学っていうのも貴族の人が言ったことだと思おうので……」

「いやでも、お前が謝ることじゃないだろ」

「私自身、貴族の方に悪いイメージしか持っていただけなかつたのは少し悲しかったので……実は貴族でも良い人は沢山いるんですよ？」

「そういうことか。でも、君みたいな子もいるんだったら、貴族もいいものに見えてきちゃうね」

「あ、ありがとうございます！」

貴族には、こんな純粋な子もいたんだな……

「そして、今日の決闘ですが……単刀直入にききます。……勝てますか？」

「分からん、としか言えないな」

「そうなんですか……でも、私は必ず勝つって信じてますから!! がんばってください、天城さん!!」

そういうと、その子は自分の席に帰っていった。

「なんていうか、天使みたいな子だったな」

んじゃ。あの女の子の期待に応えるためにも。気合入れますかね。

4：00 第一訓練室

「ここか」

奴は、俺より先に来ていた。時間に律儀なのね。

「おう、ようやく来たか……って、貴様なんだその武器は？」

「見てわかるだろ、学校の備品だ」

あら、ちよつとセンスがなかったかな？

「なに、貴様自分の武器はどうした？」

「別に、お前には関係のないことだ」

「まあ、いいか。では退学をかけて、決闘を始めようではないか」

「ではくこれより天城翔vs兼孝昌宏の決闘を始める！」

……退学って冗談ですよね？」

「さてどうでしょう？」

「ええっ！ 本当に退学だったら先生困るんですけどく？（汗）」

「いいから始めましょう」

「はあ、では、両者位置についてPAP(Power Assist Program)を必要とあらば起動せよ!」

「PAP起動!」

「……」

「なに、貴様PAPを使わないのか?」

PAPとは、読んで字のごとく術式制御などをアシストしてくれる
機器だ。

よつて、天城は……

「そんなもの、あつても邪魔なだけだ」

「ふざけるな! 平民ごときにそんなこと、できるわけなからう!」

ああ、煩い煩い。傲慢貴族乙。

「いいから、さっさと始めろよ」

「……準備は出来ましたね。それでは両者……始め!!」

「PAP! 速度解放MAX! 一気に決めてやる!!」

『ファンセブ・ジーアラッド』

その瞬間、天城の姿が消えた。

「くそ！ 高速移d——」

その瞬間、兼孝の意識はブラックアウトした。

「しよ、勝者 天城翔！」

「……2秒82か。危なかったな」

彼は勝利に対して、微塵も喜びを見せることはなかった。

I・第四話

天城翔と兼孝昌宏の決闘は、わずか2秒82で終了した。

「えっ、嘘……。こんなに早く終わるなんて」

やはり彼の試合は、皆が驚くようなものであった。

「まっ、まっってください！ なんですか、さっきのは！」

「……速度解放と剣術の居合いを融合させた技です」

「あれがただの速度解放？ あなたの術式強度ってどうなってるの？」

彼女は畏怖のこもった声音で聞いてきた。

「別に、生まれつきなんじゃないんですか？」

「嘘!! あんなの、日本国防軍対魔道師専門部隊の上級兵士並みの術式強度よ！」

「そうなんですか。あと、口調が乱れています。あとキャラも」

「ふざけないで！ 私は今、真面目な話をしてるの!!」

はあ、とうとう面倒くさくなってきた。

これ以上知られるのは不味いかな。仕方ないか。

「おい、これ以上踏み込むな」

声帯解放術だ。

あまり使いたくはなかったが、精神に直接干渉した。

「ひっ、ごめんなさい」

すみません、先生。こうするしかないのです。

「それではこれで失礼します。あっ、忘れてた」

おれは、一枚の紙を懐から取り出した。

「先生、これを奴に渡してくれませんか？ もちろん、中身は見ないでくれると助かります」

「はい、わかりました」

紙を受け取ると彼女はそそくさと帰っていった。

「はあ、帰ったらまたあいつに報告かな」

俺はため息をついた。多忙である。

IN AMAGI'S HOUSE

「で、しつかり3秒以内でやったと。流石だな」

「ええ。その後、担任に追及されたので声帯解放術を使いました。

申し訳ございません、元帥」

「あらら、あれはなかなか後に響くんだけどな。

あ、もちろん事後処理は君ね♪」

えー。まじすか。ええやん、そのくらいやってくれても。

「じゃあ、お疲れ様。これからもがんばってね」

「はい、それでは」

通信が切断された。

「明日は朝から大変だろうな」

なにしろ、平民が貴族を3秒で倒してしまったのだ。

まあ、きつとあいつなら約束は守るだろ。

「でもなあ、やっぱり今回もか……。全然、本気出して戦えないなあ」

「そうだ、今週末はあそこに行ってみるか」

「WN×WR」の日本支部である。

「たしか、あそこにはあいつがいたよな」

久しぶりの全力の戦いに期待する天城であった。

あ、でも全力は無理か。殺しちゃうし。

「じゃあ、4日後の土曜日あたりにするかな」

よし、あと3日ちよつとテンション上げるぞ!!

まあ、授業態度を変えろとは言っていないけど。

割と俺の授業態度って、男子高校生としては普通じゃない? (偏見)

I・第五話

そして翌日、やはり天城は注目されていた。

「ねえ、あの人よ!」「あいつが、兼孝を3秒で倒した奴か」「へえー、すげえな」「平民や平民。まじかよ」

いろいろな評価が飛び交っていた。

「朝から元気だな、こいつら」

INIA

「あの、おめでとうございます!」

「ああ、鏡月だったかな?　ありがとうございます」

ああ、あのときの平和な女の子か。

「でも、3秒って凄いですよね。先生方も何が何だかわからないそうです。どんな術式だったんですか?」

「悪いが、それは教えられないんだ」

「そうなんですか……なら仕方ないですっ!　では、お疲れ様でした!」

「ああ、すまん。ありがとう」

そういつて、彼女は戻っていった。

やっぱり、あの子は純粋な子だ。

「なんか、朝から癒された」

1限目は「歴史」だ。

「俺が歴史を担当する朝仁あさひと江だこう」

なんだか、冷静そうな先生だった。

「ではまず、魔道師の歴史について振り返ろう。」

まず、魔道師が生まれたのは魔法のもととなる「亜素」の発見が原因だ。

だが、みなが魔道師になれるわけではない。何故だ、朝田」

「はい。亜素というのは、先天的なものであるからです。そうですね……世間一般的に言えば、才能というものです。あるものを伸ばすことはできますが、ない袖を振ることはできないのです」

「うむ、そうだ。ではなぜ日本は魔道師が生まれなかったのだ?　天

城」

「はい、それは日本人特有の「対素」という遺伝子が原因です。よって日本国は海外から有能な人材を集めました。失敗に終わりました」「うむ、完璧だ。これ以上は生物関連の授業になってしまうな。では次に、解放術の誕生についてだ。鏡月」

「はっ、はい！ えと、解放術は、植民地時代にアルファレム・オーディンにより完成させられました。植民地時代に何故日本に味方したのかは、知られていません」

「ああ、その通りだ。きつと私達にとっての英雄は彼なんだろうな」
英雄ねえ。良かったですね、元帥。

そこで、授業の終わりを告げるチャイムが鳴った。

「おお、もう終わりか。ではまた」

めぐりめぐってlunch time

「あの、今日も一緒にご飯食べていいですか？」

「ああ、いいよ」

「ありがとうございます！」

俺の彼女に対する警戒心は0になっていた。

「そういえば、天城さん地球最後の兵器デバイスって知ってます？」

「地球最後の兵器？ 噂ぐらいは」

「ええ、都市伝説なんですけどね。魔術と解術のどちらも使えるとか」

「どちらも？ はは、無理に決まってるだろ」

「ですよ、やっぱり都市伝説は都市伝説ですよ」

「まあ、実際にいるなら会ってみたいものだ。きつと戦ったらボロ負けするんだろうな。魔術と解放術を併用されちゃな」

俺がそう言うのと、なぜか鏡月は苦笑いし、視線をそらしてしまった。

……俺なんか変なこと言っただけか？

「ほ、ほら。もう昼食時間終わるぞ」

「あつ、もうこんな時間ですか！ 今日も楽しかったです！」

「おう、俺もだ。じゃあな」

「はいっ!!」

やっぱりいつも元気だな。癒される。

そして普段通り授業を受けて、一日を終えた。

IN AMAGI'S HOUSE

「わあ、天城様!! 今日はいかがされました?」

「はは、様はやめてくれ、杏」

「いえ、そういうわけにはいきません。天城様はWN×WRの最高兵士様なんですから」

俺が今話しているのは、WN×WR日本支部長【有里美 杏】だ。

「まあいいや。でさ、土曜日にそっちに行くからその日いてくれない?」

「まさかデートとか!」

「いや、ちよつと久しぶりに戦いたくなってるね」

残念。そのご期待には沿えそうにないな、杏。

「もう、久しぶりに女の子に電話をかけて決闘ですか?」

「はは、じゃあ決闘が終わったら一緒にどこかに出かけようか」

「ほっ、本当ですか? すっごく楽しみです!」

「じゃあ、よろしくね」

「はいっ!」

そういつて通信を切った。

「よかった、楽しみにしてくれて」

あと2日、がんばるか。

今日若干授業態度良かった気がする……。

I・第六話

4月6日 WN×WR日本支部

「ようこそおいでくださいました！ 天城様！」

「やあ、杏久しぶり」

「このちっちゃい猫みたいなのが、現日本支部長様だ。」

「はい、お久しぶりです！ 今日はどうしても楽しみです！」

「ああ、俺も君と全力で戦えるのを楽しみにしていたよ」

「では、さっそく移動しましょう！」

訓練室にて

「じゃあ、始めるけど気絶以上はだめだよ」

「はい！ 心得ております。では、いきましよう！」

いや寧ろ、心得なきやいけないのは俺な気がする。

「ああー！」

3……………2……………1……………START！

「弾道補正のため、義眼解放！」

速度を30パーセント減少させ、動体視力を130パーセントまで

増加！」

杏の持つ二丁拳銃から、正確に銃弾が発射される。

【義眼】それが彼女の持つ、最大の武器である。

「流石だな！」

反射神経をmaxまで解放！ 攻撃耐性を60パーセントまで減

少！」

天城は発射される銃弾一つ一つを、避けていく。

「攻撃態勢へ移行！ 体内45パーセントの亜素を片手剣へ移行！」

天城の剣が赤く光り輝いた！

「これは！ 即座に防御態勢へ移行！」

すべての能力を50パーセント引き下げ！ そして攻撃耐性を強

化！」

「では行くぞ、杏！」

天城が急激に加速した。一気に間合いを詰めて……

「リ・エイフォオニオ・アース」

その一撃はみねうちであり、杏の意識をいつきに刈り取った。

「勝負あり……か」

杏と天城の勝負は決した。

「よし、運んであげるか」

彼は、杏を抱えて医務室まで歩いていった。

10分後……

「ふああ、んあおはようございます。天城様あ」

「ああ、おはよう杏。よく眠れたかな？」

「はい、とつても！」

「そうか、それは良かった。」

ところで杏、約束してたけどどこに行こうか？」

「あつ、そうでした！ では、一緒にお昼ご飯を食べに行きましょう
！」

「ああ、もうそんな時間か。いいよ」

「はい！ では早速行きましょう！」

「そういえば、街中では様付けはしないでね。怪しまれるから」

「はい！ では……天城君？」

「うん、いいね。あと敬語もやめていいよ」

「えつ、でもそれは……。いえ、わかり……わかった天城君！」

「うん、いい子だ。」

「じゃあ、いこう！ 天城くん！」

「ああ！」

そしてデパートである。

「じゃあ、どこにしようか？」

「うーん、じゃあイタリアンとかどうだろう？」

「ああ、じゃあそうしようか」

IN ITALIAN RESTAURANT

「じゃあ私は……オムライスで！」

「じゃあ、俺は無難にパスタとかかな」

俺たちはそれぞれの料理を頼んだ。そして15分後……

「ふわあく、すごいです！」

「ああ、うまそうだな」

「はあくおいしいです！幸せです！」

「ああ、確かにうまいな」

「私、天城君のも食べてみたいです！」

うん、後で気付いたけど此処で断らなかつたのが俺の敗因だよな。

「ああ、別にいいよ」

「では、あくん」

「ふえ！ ま、まじかよ。人の目が多いぞ」

「もう！ 気にしなくていいですよ！ はい、あくん」

俺が気にするんだよ!! 察して、杏さん!!

「うっ、あつ、あくん」

「はい！ おいしいです！」

「はあ、めっちゃ疲れた」

杏は、とても幸せそうである。

I・第七話

「そういえば、天城君学校はどう？」

「どうって言われてもな……。決闘しか記憶に残ってねえや。」

「そうだなあ、やっぱり平民の烙印はきついかもしれない」

「そういえば、そのせいで決闘を申し込まれたんだよね」

「ああ、軽くあしらってやったがな」

「ファンセブ？」

「ああ、元帥が3秒以内と仰っていたからな」

「そうなんだ……。そういえば、友達はできた？」

「友達ねえ、1人ぐらいいはいるかな」

カラン、カラン……

杏が持っていたフォークを落とした。

「えっ……」

「おい、えってなんだ」

「あつ、ごめん。天城君に友達ってちよつと驚いちゃって」

「まあ、確かにそうかもな。1週間で友達ができるなんて思ってもなかったからな」

「天城君が心を許した方は、女の子？」

「……ああ、そうだが？」

「ほお、そうなの。あの天城君が1週間で心を許す、と……」

急に声のトーンが下がった気がする。

「あの……怒ってる？」

「ううん、興味があったただだよ。友達ができでよかったね、天城君」

「ここは話を切り上げたほうがいいな。」

「ああ、うん。じゃあ混んできたし、でようか」

「うん」

俺たちは店を出ていろいろと回った。

途中から杏は優しい子に戻ってくれました。

「天城君、今日は楽しかったよ！」

「ああ、それは良かった」

「じゃあ、また一緒に出かけようね」

「ああ、楽しみにしてるよ」

そう言うと、彼女は家の中に入っていった。

家まで送ったことに関しては、誰も何も聞くな。

IN AMAGI'S HOUSE

「今日は、杏とデートをしてきました」

いやもう、自分でデートとか言っちゃったし。

「ああ、日本支部長ちゃんか。楽しかったかい？」

「はい、とても」

「2人は付き合っちゃったりするのかな？」

「……それはないでしょう。自分に課せられているのは地球最後の兵器デバイスの繁殖のみですので」

「……って言っても、もう1人まだ見つかってないんだけど」

「いずれ終わると分かっているのに交際するのは、相手に悪いので」

「そういうものかね。まあ、そこは君の自由だけどね」

「では、今日はこれで」

「ああ、じゃあね」

電話が切れる。

「自由な交際ねえ」

んでもって月曜日

「そういえば天城さん、将来の夢ってありますか？」

「いや、特にないけど。君は？」

「はい、あのWN×WRに入りたいです！」

「ほお、なんでだ？」

「なんでって、天城さん知らないんですか？」

「この学校に入学してくる人なんて皆目指してますよ」

「……えっ？ まじかよ」

(超マニアックな職場選んだんだな……)

「まっ、まあ頑張れ」

「でも憧れますよねえ。」

階級の高い兵隊さんの名前全部伏せられてるんですよ！ いかにも秘密結社！」

「おっ、おお。そうか」

（まあ、そのお陰でばれずに済んでるんだがな）

「あつ、いけない。喋りすぎちゃった。では！」

そう言つて彼女は走つていった。何度見た光景であろうか。

「将来の夢ねえ。俺はこうじゃなかったら何になつてたんだろうかな？」

10年前

少年に親はいなかった。その時の少年はこう呼ばれていた。

地球最後の兵器

当然、少年はその意味を理解できるわけがなかった。

5年前

少年は1本の剣を授かった。

刀身は銀色に輝き、どこまでも美しい剣であった。

「己身滅時 剣天切裂 主神力与」

それが剣の名前である。

少年には剣に対する不気味さだけが残った。

3年前

少年は死んだ、確かに死んだ。

だが死ぬ瞬間こう聞こえた。

「己身滅時 剣天切裂 主神力与」

昔聞いたことのある名前が無意識の空間に響いた。

少年は立っていた、確かに立っていた。

1年前

少年、否ここまで来ると青年であろうか。

青年は自分の存在を完全に理解した。

自分には全てを壊す力があると……

自分には全てを殺す力があると……

自分には全てを救う力があると……

自分は……

「死ねない」

「……ぎ・ん、あ・ぎ・ん」

「天城君!!」

「はっ、はい!!」

「もう、授業中に寝ちゃだめですよ」

「すみません」

すごく懐かしい夢を見ていた気がする……

新人戦く我、頂点を望まんく

Ⅱ・第一話

5月1日 日本国立高等学校レベルⅢ

「そろそろ、新人戦のころですねえく」

この学校の新人戦とは、1年生が解放術師としての実力をはかるため、トーナメント制で、決闘をしていく大会のことである。

「A組は毎年、上位を独占してますからねえ。今年もがんばろう！」
「先生」

「はあ〜い、質問ですかあ〜？」

「はい。この大会の結果は今後どのように関わってきますか？」

「はい、負けた場合のペナルティは無いですよ。」

優勝した人は、毎年生徒会にスカウトされますねえく」

「そうですね、分かりました」

「はい、他に質問はありませんかあ〜？」

では、後日細かなルールが書かれた紙が渡りますからねえく」

そして今日も一日が終わって、皆が帰る支度を始める。

「新人戦かあ。私、そんなに自信ないなあ」

「女子に聞くことじゃないかもしれないが、戦いは得意か？」

「自分で言うのもなんだけど、意外と強いほうだよ」

「へえ、そうなのか。この学校で強い奴って誰なんだ？」

「うーんとね、やっぱり清輝家の2人は強いかな。会長は出ないけど」

「ふーん、そうなのか」

「私、一回天城さんの戦う姿見てみたいなあ〜」

「そうか？ きつと見ても面白くないぞ」

（だって3秒くらいで終わるし）

「そうなんですか。でも、新人戦は楽しみにしてますよ！」

ふう、俺も帰るか。

IN AMAGI'S HOUSE

「ふうーん、新人戦ねえ」

「どうやら、優勝すると生徒会メンバーに入れられるそうです」

「うーん、あんまり目立ちすぎるのは良くないなあ」

「分かった、優勝はしよう。」

「だが、なるべく試合は早く終わらせるように」

「今回は、清輝家もおります」

「ああ、法務省公安調査庁を任されてる貴族だっけ？」

「ええ、少々時間がかかるかと」

「問題ない、だが気をつけろよ。決して魔術を悟られるな」

「心得ております」

「それならば良い、ではしっかりな」

「しつかりって言われても、どうしつかりすればいいのか分からんのですが……。」

「了解いたしました」

通話終了

「あぁー、面倒くさいー!!」

そして翌日

「はぁーい、これが新人戦のルールブックですよぉ」

それには、勝敗の決定方法等が書かれていた。

ちなみに勝敗の決定方法は……

- 1、相手の意識が奪われる
- 2、審判が続行不能と判断する
- 3、相手が降参する

☆相手に気絶以上の重傷を負わせた場合、失格となる。

「ちなみに勝負の開始は5月8日からですよぉ。」

対戦カードは、廊下に張り出してあるはずなので、確認しておいてくださいねえ」

ちなみに俺も対戦カードを確認した。

1 回戦 天城翔 vs 朝田康

Ⅱ・第二話

5月8日 新人戦初日

「はあ、今日から始まるのか」

憂鬱だ。皆、もつと平和に生きていこうぜ？ 天城さん戦いは良くないと思うよ？ うん。

「君が僕の対戦相手？」

「お前は確か……朝田だっけか？」

朝田。俺はお前に救われた。

ちなみに、朝田は大企業【朝日】の分家である。

「うん、そうだよ。今日はよろしくね」

「ああ、お互い正々堂々とやろうぜ」

「ああ!!」

新人戦1回戦 天城翔vs朝田康

「では、これより新人戦第一回戦を開始する」

どつと、歓声が沸き起こる。

「こいつらずいぶんと暇なんだな」

「まあ、一回戦だし仕方ないよ」

たかが1年生の試合にそんなに集まるもんかね？

「では両者、前に出て。PAPを必要とあらば起動せよ」

「PAP起動!」

「……………」

「えっ、使わないの？」

なにこれデジャヴ。

「まあ、いいだろ」

「では両者準備が整ったようなので、コールを開始する」

3……………2……………1……………start!

「射撃威力を120%まで向上。」

攻撃速度を80%まで低下。ショットガン射撃開始!」

朝田のショットガンが発射される。

「…………杏に比べたら、とまって見えるな」

片手剣を構える。

「速度解放max、攻撃威力max。ほかステータスを20%まで低下」

天城が駆け出した。

「片手剣解放技・迅掌剣」

天城が、近距離まで近づき飛んできたショットガンの弾を切り裂いた。

そして、その威力を殺さずに朝田へと切りかかる。

「くっ、負けるか！」

朝田がダガーで対抗する。

「無駄だよ」

天城はダガーを弾き飛ばし、朝田を切った。否、叩いた。

「うっ、——」

朝田の意識がブラックアウトする。

「勝者、天城翔」

うおーーーーー すごーーーーー

などなど、会場は歓声に包まれた。

「ふう、つかれて……はいないな」

そう呟いて、天城は会場を後にした。

その試合を影で見守るのが2人。

「ふうん、あの子なかなか凄いな」

「ええ、ですが戦いを早く終わらせようとしていましたね」

「ああ、彼の攻撃は特攻じみていた」

ショットガンの弾をもつと正確に避けた方が、安全に戦えたはずだ。

「何か知られたくないことでもあるのでしょうか？」

「さあね？ それは僕たちが考えて分かることじゃないよ」

「彼女は勝てますでしょうか？」

「僕としては応援してあげたいね。一応、身内だし」

「一応……ですか」

「あいつ一度も僕のこと兄としてみてくれないし。」

まあ、僕もそんなにかまってあげなかったからね」

「そうでしたか」

「うん。じゃあ、もう行こうか」

「はい」

そうして2人は去っていった。

IN AMAGI、S HOUSE

「で、今日もちゃんとやったと」

元帥。だからその「ちゃんと」とか「しっかり」とかそういうのがよく分からないんですって〜!!

「はい。そして決勝までは魔術なしでいこうと思います」

うん、天城さん余裕。超余裕。魔術もPAPもなしでいけるわ。

「了解。決勝はどうなりそう?」

「恐らく、清輝の妹でしょう」

「そうか・少々時間がかかりそうだな」

「負けることはありませんが、大変です」

「ああ、魔術は悟られるなよ」

「心得ております」

「このやり取りも数え切れないぐらいしたな」

「ええ、任務成功においては大切なことですので」

「うん。」

「日本国立高等学校最高位機密情報アクセス権限の取得」

「日本国立高等学校解放術の発展情報の取得」

君は、順調にやってくれているよ」

(まあ、建前なんだけど。本当のことは……教えられないな)

「何故、自分が選ばれたのかは不明ですが」

「だって君、学校行ったことないでしょ?」

「……はい」

天城は生まれたところから……かは不明だが、WN×WRで育てられた。

当然、普通の学校にいったことはなく講師から個別に授業を受けていた。

「だから君に学校にいかせたかったっていうのもあるんだよ」

「そういうことにはしておきます」

「じゃあ、がんばって」

「了解いたしました」

新人戦2回戦（天城にとつて）

天城翔かみつか vs 神塚まこと誠

Ⅱ・第三話

新人戦2回戦 天城翔vs神塚誠

「今日は俺が試合の番か」

新人戦は参加人数が多く、試合数も多いため毎日試合があるわけではない。

「……お前か」

「ん、お前が神塚か？」

「……そうだ」

体は大きいが、無口な男だった。

「まあなんだ、がんばろうぜ」

「……了解」

機械か！貴様は

「それでは、これより天城翔vs神塚誠の試合を開始する！」

1回戦と比べてもまったく劣っていない歓声であった。

「それでは両者前に出て、PAPを必要とあらば起動せよ」

「……起動」

「……」

あ、PAPはしっかり使うのね。

「それでは、コールを開始する！」

3……………2……………1……………START!

「速度解放max。攻撃力150%攻撃耐性を0%まで引き下げ」

一切防御しない、特攻である。悪く言えば脳筋。

「攻撃耐性120%攻撃力140%、速度40%まで低下」

天城が一気に接近する。

「……馬鹿め」

神塚が大剣を構える。

「攻撃力フルバースト」

フルバーストとは、一つのステータスを限界まで強化し他ステータスを、大幅に弱体化させることである。1回戦で天城も使用した。

「大剣解放技・剛乱」

神塚の大剣が一気に振り下ろされる。

「そこなくては！」

だが、天城接近するのを止めない。

「……なに？」

「攻撃速度フルバースト」

「片手剣解放技・革剩剣」

「おおっ！」

大剣と片手剣がぶつかる。

——その瞬間大剣がはじきとんだ。

「な……に……」

「これは革剩剣。剣速をmaxまで解放して相手の剣をはじく技だ」

「驚愕！」

「まあ、剣速が遅いと自分の剣が折れるんだけどな」

一瞬、彼は悔いの残るような、だが何かを認めたような顔になり

……

「……降参」

試合終了のブザーが鳴った。

「ふう、今回も無事終わったか」

その試合を見る影が2つ

「いやあ、今回も凄かったね」

「ええ、相も変わらず特攻じみていますが」

「彼はきつと来るな、決勝まで」

「同感です」

「ふふ、実に楽しみだな」

「そろそろ戻りましょう」

「そろしようか」

——消えた。

「んで、次の試合は誰かな？」

3 回戦（天城にとって）

天城翔 vs 美芳養 舞子

ちなみに『美芳養』は衣服に関する企業を束ねている大企業で、ここが経営している洋服店は『美芳養メーカー』として、日本中の老若男女に親しまれている。

ここからは3回戦ではなく、説明し忘れていた貴族について説明します

内閣府

宮内庁・・・宮河家（みやかわ）

警察庁・・・弧普家（こふ）

金融庁・・・坂様家（さかさま）

消費者庁・・・鬼羅家（きら）

復興庁

全て・・・刃里家（ばさと）

総務省

消防庁・・・魏邪家（ぎじや）

法務省

検察庁・・・清美家（せいび）

公安調査庁・・・清輝家（せいき）

外務省

全て・・・鎖望家（さぼう）

財務省

国税庁・・・宇柔家（うじゆう）

文部科学省

文化庁・・・百濟家（くだら）

スポーツ庁・・・高句麗家（こうくり）

厚生労働省

全て・・・朝仁家（あさひと）

農林水産省

林野庁・・・緑楼家（りよくろう）

水産庁・・・緑頼家（りよくより）

経済産業省

資源エネルギー庁・・・李埴家（すもぞね）

特許庁・・・・・・・・・・楡木家（たまのき）

中小企業庁・・・・・・・・・・鬼首家（おにこうべ）

国土交通省

観光庁・・・・・・・・・・兼孝家（かねあつ）

気象庁・・・・・・・・・・麻孝家（めあつ）

海上保安庁・・・・・・・・・・仁孝家（じんあつ）

環境省

全て・・・・・・・・・・鏡月家（かがみつき）

防衛・攻撃省

防衛庁・・・・・・・・・・比木家（ひき）

攻撃庁・・・・・・・・・・有里美家（ありみ）

植民地管理庁・・・・・・・・・・誹零家（ひれい）

※観光庁は、外国からの観光がなくなっただけのためほぼ無職。

大体、こんな感じですよ。質問等がありましたら、感想欄へどうぞ。

Ⅱ・第四話

三回戦 天城翔 vs 美芳養舞子

「あなたが今日の対戦相手ね」

「ああ、君は舞子さんだな」

「ええ、そうよ」

なんだろう。衣服メーカーとだけあって、この方もなかなかの美人さん。おっと、なんか日本支部のほうから怨念が飛んできてるわ。

「それなりにがんばろうぜ」

「そうするわ。ところで君、すごい噂になってるよ」

「……どんな噂だ？」

「えーつと、対戦相手を高速で狩る平民。とかかな」

「そうか。まあ、あながち間違っではないいな」

「でも私は、そう簡単にはいかないわよ」

「そうかい」

「ええ、あなたの快進撃はここまでよ」

「まあお手柔らかに頼む」

そして試合

「それではこれより、天城翔 vs 美芳養舞子の試合を開始する」

……心なしか観客が増えている気がする。

「では両者前に出て！ P A Pを必要とあらば起動せよ！」

「……………」

「……………」

さすがにここまでくるとP A Pを使う雑魚はいないか。

・ 雑魚とか言っちゃった。すまん、今までの皆。

「それでは、コールを開始する！」

3……………2……………1……………START！

「あなたの戦法は読めているわ！」

速度解放を150%、攻撃耐性を50%まで減少！」

舞子が駆け出した。いつもの天城の戦法である。

「……………」

だが天城は何もしない。武器すらも構えない。

「なにっ！ ふざけてるわ！ 分かった、一気に決めてあげるわ！」

一気に接近する。すると、天城が構えた。

「顕現せよ、大虐殺の刀^{カクネージ}」

天城の腰に一本の刀が現れる。

「ふーん今度は刀？ 面白いじゃない！」

そして、舞子がレイピアを構える。

「攻撃速度フルバースト」

一気に天城の懐へ飛び込み……

「細剣解放技・華瞬」

高速の一撃を繰り出した。

「天照抜刀術・幻」

天城よりも舞子のほうがはやい！

もらった！

「はっっ！」

だがしかし、舞子の攻撃は空振りだった。

「なんで!!」

その瞬間、うしろで殺気が生じた。

「まさか……」

気づいたときにはもう遅かった。

「勝者・天城翔！」

「いやあく驚いた」

「まさか刀まで使ってみせるとは」

「しかもあれは、たぶん僕にもできない」

「天照ですか……初耳です」

「あれは体重移動によるものなのかな？」

「攻撃がされた後と、移動したタイミングのずれは僅か0.15秒でした」

「攻撃がされる直前に幻影を残すぐらいの高速移動をすると……」

「まさに神業ですね」

「いやあ、ますます興味が出てきたよ」

「そろそろお時間です」

「ああ、わかった」

四回戦（天城にとって）

天城翔 vs 鏡月里柀

「うわあ、まじかよ」

「あ、あのがんばりましょう！」

うん、かわいい……ちよちよ怨念が！ 怨念が凄い！！

「そうだな」

「天城さんとはお友達ですが、手加減はしませんよ！」

「ああ、わかった」

「これより、天城翔 vs 鏡月里柀の試合を開始する！」

一気に歓声が巻き起こる。余談だが鏡月は校内でも屈指の美女らしい。

「……だからこんなに観客がいるんだな」

「何か言いました？」

「いいや、何も」

「では両者、前に出て。PAPを必要とあらば起動せよ」

「……………」

「……………」

「それではコールを開始する！」

3……………2……………1……………START！

……………ん？ これは！

「くそっ、どこだ！」

天城は誰にも聞こえないよう言った。

天城に使用されたのは、感知術昌。

これは、亜素の移動を感知し、魔術が使われているかどうかを確認するための魔術を簡略化したものだ。

「まずい！ かけている魔術を強制的に解除！」

天城には剣のことなど、あらかじめ術式展開されている。

その全てを強制終了した。

「危なかった、感知は……よかった、されてないな」

だが安心している暇はない。

「ぼさっとしていてはだめですよ！」

いつのまにか接近していた鏡月の細剣の攻撃が繰り出される！

「くっ！」

天城は大きく後退した。

「チャンス！」

体勢を大きく崩した天城へ……

「攻撃力フルバースト」

「細剣解放技・顎瞬」

鏡月の重くそして鋭い一撃が天城を襲う。

「片手剣防御技・護惨剣」

それをなんとか剣で防御した。

鏡月が体勢を崩す。

「片手剣解放技・諸行無常の乱剣」

防御から神速で高威力の剣撃を叩き込む。

「きゃあっ！」

「勝者・天城翔！」

「はあはあ、なんだったんだ」

天城翔、久しぶりの苦戦。

「ははは！ おもしろかったな」

「悪質です」

「いやあ、たかが感知術昌なのにあの反応ねえ」

「やはり、何か隠していますね」

「うん、観察を続けようか」

本人達は気付かないのだ。

彼は既に気付いているということに。

「とても思ってるんだろうなー、観測者は。だが……」

彼は、競技場上部に視線を送る。

「見つけたぞ、ストーリーカー」

そして天城は、残り僅かになった試合を処理していった。

遂に……！

決勝戦 天城翔 vs 清輝美麗

Ⅱ・第五話

決勝戦 天城翔vs清輝美麗……の一日前。

「元帥、何かに監視されています」

「監視……何をされた？」

「感知術昌を使用されました」

「なに！ 魔術は感知されたか？」

「いいえ、全てを強制終了したため、感知されずに済みました」

「相手はわかったのか？」

「ええ、どうやら2名です。そしてどちらも生徒会の人間です」

「そう判断した理由は？」

「まず相手が試合中に干渉したというところから、大体は絞られます。」

そして使用したものが術昌というところですよ」

「そんな高価なものを入手できる人間といえば……」

「比木氏と朝仁氏ですね。ですがその2人はありません。」

他にもいろいろいるけど、試合中の干渉なんてできんのは生徒会だけだ。まあ、何で使ったかは分からんけど。

「ああそうだな、そうなると生徒は……」

「ええ、清輝でしょう」

「それが属しているのが生徒会というわけか」

「そのような理由から消去法で断定しました」

「でもよかったじゃないか」

「ええ、これで優勝しても生徒会に入らずに済みます」

「生徒会の者は、こちらが気づいたと知っているのか？」

「いいえ、知りません」

「ふふ、なんだか気分がいいな」

「同感です」

「よい方向に進んでいるようで、何よりだ」

良い方向なんかなく？

「何かあり次第、報告いたします」

「ああ、ではな」

「はい」

そして、決勝大会当日――

「貴方が私の対戦相手ね」

「ああ、そうだ」

「お互い、良い勝負をしましょう」

「ああ」

「これより、新人戦決勝戦 天城翔 vs 清輝美麗 の試合を開始する
！」

会場が、今大会最高の歓声に包まれた。

「それでは両者、前に出て！」

もはやPAPの確認すらしていない。

「ゴールを開始する！ 両者とも、最高の力を尽くすように！」

3……………2……………1……………START！

「射撃術解放フルバースト」

清輝のセミオートライフルから銃弾が発射される。

「うお！ まじかセミオートだろ！ まるで連射じゃねえか」

そう、単発式のセミオートライフルをまさか連射させているのだ。

「これが私の十八番よ」

銃弾が 飛んでくるなら 切ればいい

あまぎ

そんな感じの俳句？が浮かんできた。

「攻撃速度フルバースト」

片手剣解放技・英雄譚創造の極剣」

片手剣解放技の中では、最高位の技である。

「ふうん、すごい」

「やっぱこれあれだよなあ。」

ソードウ・アーツウ・オーラインのキート（女体化）」

一つ一つ銃弾を処理していく。

「そろそろ攻めるわ！」

そうすると、彼女は武器を銃剣に変えた。

「ハイ！」

「ステータスをデフォに。

移動速度を120%、攻撃耐性を80%」

「清輝流体術・静謐歩行」
せいひつほこう

瞬間、彼女の姿が消えた。

「パーフエクト・グラスプ」

——特定

天城は腰に入れていた短剣を抜き、清輝のいる場所へと投げた。

魔術を使ったのは、幸い誰にもばれていないようだ。まあ、ばれても聴覚をMAXにして音で感知しましたよとか言えばいんだけど。

「くっ！」

姿を現す。

「何故!!」

「ふん！ 見つからないとでも思ったか！」

天城は一気に接近。

「一旦後退しなければ！」

「声帯解放術max「停止せよ」

「ひっ！」

「いくぞ、ストーカー妹」

「攻撃力フルバースト

片手剣解放技・炎邪剣」

「こっ、攻撃耐性フルバースト

防御技・輪廻采配」

「無駄だね」

天城は、相手の盾を切り裂いた。

「きゃあっ！」

どぎっ

起き上がっては——こない。

「勝者・天城翔！」

……そして新人戦優勝 天城翔!!」

一気に歓声に包まれた。

「おわったか……」

そうして、新人戦は幕を閉じた……

Ⅱ・第六話

新人戦終了翌日

「多分勧誘しに来るだろうな」

そのような事を考えながら、天城は校舎に向かっていた。

「やあ、天城翔君」

やっぱりきやがったな。

「おはようございます、どうされましたか？」

「実は君に頼みがあるんだ」

「生徒会長様が、一介の平民に何の用でしょう？」

まあ、答えは分かっているんだが。一応聞いておくのが筋だろう。

「新人戦で優勝した君に、生徒会に入ってほしいんだ」

その瞬間、クラスの輩が騒いだ。

「すげー生徒会だってよ」

「へえーあの平民いったいどうなっただよ」

「あれは私のはずだったのに！」↑美麗

「で、どうかな？」

「丁重にお断りさせて頂きます」

クラス全員が口を開いて、停止した。

「うっ、うくん理由を聞いてもいいかな？」

「本音は、面倒くさいからですが……」

試合中の選手に干渉するような常識破りの組織になんか、入りたく

ないんですよ」

彼は心底驚いたような顔をしていた。

「……!!」

「気付いてないとも思いましたか？ 試合中の感知術昌ですよ。貴

方でしょう？」

「何のことだか分からないな？」

「しかもあの場には2人いましたよね？」

「なぜそこまで！ ……いや、たしかに僕は副会長と一緒に観戦して

いたね」

「俺の何を知りましたかっただんですか？」

「だかr……いや、もう演技は止めましょうか」

「では認めると？」

「ああ。僕は副会長の清美^{せいび} 魅宇^{みう}と一緒に観戦していた」

(清美……検察庁だったかな)

「何のために使ったんだ？」

彼は少し開き直ったような顔をした。

「君、地球^{デイザスター}最後の兵器^{兵器}って知ってるよね？」

「噂ぐらいは」

「いやあ、その人はどうやら魔術と解術を両方習得できるそうだからね。」

ちよつとした実験のつもりだったんだよ」

「まさか、そのためだけにとは……」

「でもこれじゃあ、良いお返事はもらえなさそうだね」

「ええ、申し訳ありませんが」

「じゃあ、我が妹に頼もうかな」

「そうしてください」

「じゃあねー」

俺は一礼して、席に戻った。

そうすると、鏡月ちゃんが向かってきた。

「おお、どうしたんだ？」

「どうしたじゃないですよ！

なんで、生徒会に入るの断ったんですか!!」

「えっ、だって面倒くさいし……」

「それだけの理由ですか！

1年生の生徒会入りは、とつても名誉なことなんですよ!」

「ふうーん」

「天城さん、興味ないんですか？」

「ああ。名誉を求め続けるとか、貴族まがいのことはしたくない」

すまん鏡月。本当に面倒くさいだけなんだ!

「あつ、すみません。勝手な価値観を押し付けてしまい……」

「いや、もう自分の席に戻りな」

「……はい」

そんないいものなのかね、生徒会ってのは。

「分かったことは、法務省が仕切ってることだな」

でも教員にはもつと高位の貴族がいる……と。

「まあ、そうじゃないと罰を下せないしな」

いろいろとこの学校の裏が分かってきたな。

さて、これは任務に使える情報だなつと。

エクラ・サン・ペルデュく史上最大の兄弟喧嘩く Ⅲ・第一話

新人戦の熱も冷めた5月26日

「やあ、天城君元気かい？」

「ええ、元帥からかけてこられるとは。珍しいです。」

「すこし・・・いや重大かな？」

困ったことが起きてしまつてね。本部まで来てくれないかな？」

「急を要する程のことなのですか？」

本部つて・・・あの本部!?まじか・・・。

「ああ、学校を休んできてくれたまえ。」

「・・・了解しました。」

「UTC May 29 15:00:00までに。」

「Yes, Marshal」

なんでこの組織、常に世界協定時使うんだろう？

5月27日

俺は家庭の用事といい、学校を休んでいた。そして現在は空港にいる。

「あつ！天城様!!」

「おお、杏。呼び出されたのか？」

「はい、至急本部まで来いと。」

「わざわざ学校を休ませるまでの用事・・・。」

「通信で済ませないということは、秘匿事項ですね。」

「・・・戦争？」

「その可能性が高いです。」

「噂の一つも回ってこないとは・・・」

「内乱でしょうか？」

「分からないな。」

しかも呼び出したということとは、俺たちにも何か任があるということ

とか。」

「他にも、ヨーロッパ諸国にも招集がかかっているそうですよ。」

「ふむ……。」

答えは出ないが・・時間だな、杏。」

「はい、いきましよう。」

そうして俺たちは飛行機へと向かった。

5月27日 22:00

「ふう、ようやくつきました。」

「ここに来るのも久しぶりだな。」

「定期総会以来ですね。」

「ん、あれは・・。」

天城の視線の先には、金髪の女性が走ってきていた。

「お久しぶりです、Mr. 天城、日本支部長 有里美。」

「お久しぶりです、ランズ・アプロディーテ。」

「お久しぶりです、NSA本部副長。」

「今回の来日、大変喜ばしく存じ上げます。」

NSA籍にしては、流暢な日本語である。

「緊急の呼び出しってことは、大事なんだろうな。」

彼女は恐らく問い詰めても絶対に答えてはくれないだろう。

「それに関しましては、元帥からお聞きください。」

「そうかい。」

「それでは迎えの車を用意しております。こちらへ。」

「了解しました。」

そして車内

「俺たちは戦争という仮説を立てた。」

「根拠は。」

彼女は、怪訝そうな顔をした。

「まずは、通信で伝えなかったということです。」

「それはえてして、任を託されるからな。」

「続けてください。」

「あとは、一般人に一切噂が流れていないということです。」

「戦争が起きたとなれば、情報が回ってくるのは早いです。」

「恐らく、国レベルで情報規制しているのでしよう。」

「だがそうだとした場合でも・・・なんでそんなことしたんだ？」

「・・・」

「どうかな？」

「私から詳しくは話せませんが、貴方方の予想は大体的中していません。」

「やはりそうか・・・」

「俺たちにも規制される情報だと・・・？」

「・・・いったい何が起きてるってんだ？」

Ⅲ・第二話

5月27日 22:30

「つききました。どうぞこちらへ。」

俺たちは、NSAでも5本の指に入る（ランス説）ホテルへ案内された。

「こつ、これは・・・」

「驚きました。さすがNSA・・・」

恐ろしい高さのホテルだった。・・・この宿泊代経費で落ちる本部もヤバイ。流石世界最強組織だぜ。

「では、こちらへ。」

回転ドア。今の日本ではあまり見られなくなったな。

「では、これがお部屋の鍵でございます。」

「おれは1912室か、どんだけ部屋あるんだよ。」

「私は1913室です。隣ですね、天城様！」

「ちなみにお部屋は35階でございます。」

「了解した。」

「では、いきましようか。天城様！」

「ちなみに本部までは1時間ほどかかります。」

「じゃあ、10時くらいにここに集合でいいかな？」

「了解しました。では、失礼いたします。」

そうして、ランスは帰っていった。

「じゃあ、行くか。」

「はい！」

IN AMAGI、S ROOM

（大体的中しています・・・ねえ。これは少々厄介かもしれないな。）

「そうだ、あいつもこつちに来てんのかな？」

秘匿回線・Genesis Kingdom

ちなみに、Genesis Kingdomは元イギリスのことである。

「お久しぶりです、地球最後の兵器。」

「ああ、久しぶりだなザーフ・スノードロップ」

「今回の召集の件ですね。」

「話が早いな、おまえも呼ばれたか？」

「はい、緊急事態と言われ。」

「俺たちは、この事態を戦争と仮定した。」

「ふむ・・賛成でございます。」

「だが、日本には噂すら流れていない。」

「こちらも同様です。」

「そうか・・情報規制が完璧すぎる。」

「やはり、聞いてみないと分かりませんね。」

「では、明日会えることを楽しみにしている。」

そうして、俺は通信を切った。

5月28日 10:00

「そういえば、一応集合って明日だよな。」

「それが、本日全員の到着を確認いたしましたので、予定を変更するそうです。」

「ほお、皆さんお早いですね。」

「それでは、参りましょう。」

「そういえば、他にどの国が呼ばれたのか聞かせてくれるか？」

「了解しました。」

・日本

・Genesis Kingdom (イギリス)

・Arabia Coalition (サウジアラビア＋ス

タン)

・India Empire (インド)

・Australia (オーストラリア)

の5国が承諾してくれました。」

「やはり、相当な事態なんだな。」

「詳しくは元帥より聞いてください。」

「戦争だとしても、なぜここまで情報を規制したのでしょうか？」

「まあ、もうこれ以上考えても仕方がないだろう。」
「そうですね。」

5月28日 11:00

「到着いたしました。」
「なんかもう、本当久しぶりだ。」
「でも、私そこまでここに愛着ないんですよね。」
「俺は、人生の半分以上をここで過ごしたけどな。」
「とりあえず、ここで話していないで、中へ入りましょう。」
「そうだな。」

WE GOT IN

「相も変わらず、広いな。」
「ん、あれは・・・？」

こちらに近づいてきていたのは、水色の髪の160cmくらいの男性だった。

「昨日振りです、天城殿。」
「ああ、昨日ぶりザーフ。」
「お久しぶりです、Genesis Kingdom支部長。」
「お久しぶりです、ザーフ・スノードロップ殿」
「予定が早まったそうですね。」
「その通りです、皆様到着が大変お早かった故。」
「そうですね。詳しい時間はご存知でしょうか？」
「本日の午後3時に、元帥室でございます。」
「了解しました、それでは。」
「ああ、またあとでな。」

5月28日 15:00

「・・・皆そろっているな。」
「「「「「YES, Marshal」」」」」
「どうやら、何名かは予想がついているらしいが呼び出した理由を話そう。」

・・・若干の緊張

「ロシア帝国が崩壊する。」

・・・!!

「英名「Russian Empire」で、大規模内乱が始まった。」

「ロシア帝国の内乱、しかも崩壊・・・」

「ロシア帝国の帝王の跡継ぎが、内乱の原因だ。」

「2人が候補に上がった。その2人が自身の肯定派を集めて戦争を開いた。」

「応仁の乱みたいな感じだな。」

「しかも両者が同等の支持を受けているため、ロシア帝国を二分する戦いとなった。」

「質問があります。」

「許可する。」

「何故、あれほどまでの情報規制をしたのですか？」

「ロシア帝国は今や世界のトップだ。」

「よって、他国との関わりも深い。次期帝王は他国にとっても重要案件なんだ。」

「よって、他国が介入してくる可能性が高いと？」

「そうだ、ただでさえ強い魔道師が集まっているんだ。そこに上位国家が介入すれば、こんどこそ本当に崩壊してしまうからな。」

「ちなみに情報規制をしたのは、どこですか？」

「NSA, アフリカ方面の中立国家などだ。」

「了解しました。」

「アフリカも発展したよな。南北問題なんて最近は全然聞かない。」

「質問許可を頂きたく存じ上げます。」

「許可する。」

「私たちに何か任があると思われませぬ。」

「なぜそう思う？」

「通信で済ませなかったこと・・・としか理由はございませぬ。」

「弱いな。だが、その通りだ。」

「君たちには、即時終戦を要求したい。」

「手段を伺いたく存じ上げます。」

「これに関しては、話し合いでは済ませられない。」

「では、一方を潰すという認識でよろしいでしょうか？」

「そうだ。だが、普通に戦争をしまつては、われわれが行っても何も変わらない。」

「手段が一切見えてきません。」

「ここからは可笑しい話だが、味方も敵も鎮圧するということだ。両軍も損耗が大きすぎれば即時終戦することだろう。」

「味方も、敵も・・・」

「そしてできれば、死人は少なくしてもらいたい。名誉革命だ。死人多発してしまえば、普通に戦争を放置させておいたのと同じ状態だ。我々は最低限の死人で済ませるために赴くのである。」

元帥が俺に視線を移す。

「天城君、君の国の決闘のルールは何だったかな？」

「相手に気絶以上の重傷を負わせた場合、失格となる。というのがございます。」

「そう、死人を出さない方法としては気絶させなければならない。」

「それは戦争では、なかなか辛いのでは？」

「そう、そこで面白い武器を発明した。」

「そうして、元帥が見せたのはどこからどう見ても普通の武器だった。」

「これはな、亜素をこめると相手の意識を刈り取る武器だ。」

「そんなものがあるなら、もっと早くに欲しかった。」

「って、その武器杏は使えないじゃん!!」

「他に質問がある者は？」

.....

「では、戦術等は後日報告する。退出を許可する！」

「「「「YES, Marshal」」」」」

「そうして、全員退出した。」

「これは・・・大変なことになりましたね。」

「ああ・きついな。」

そうして、彼等は戦場へ赴く・
・
・
・

Ⅲ・第三話

5月29日 08:00

「それでは、戦術について報告する。まず、東部制圧は

・Genesis Kingdom支部長 (ザーフ・

スノードロップ)

・India Empire支部長 (チャブン・マ

ハラージュトラ)

・Neo Strong Aggregation本部副長

(ランズ・アプロディーテ)

次に西部制圧は、

・Arabia Coalition支部長 (ア

ズイーズ・ラフマーン・サワード)

・Australia支部長 (ジョシユア・

モールドフィツジ)

・日本支部長 (有里美 杏)

・天城翔

「

「「「「YES, Marshal」」」」

「それでは、Russian Empireには、WN×WR用ヘリで飛ぶ。

UTC May29 12:00:00 までに第一ポートまでに

集合。」

そうして、全員は散っていった。

「俺もいろいろと準備しないとな。」

俺も部屋に戻っていった。

5月29日 12:00:00 第一ポート

「では、全員集合したな。私は戦場に赴くことはできない。健闘を祈る。」

そうして俺たちを乗せたへりは、ロシア帝国へ向かった。

「天城様、やはりいらつしやるのでしょうか？」

「分からないな。いたら、なかなかきついな。」

俺は解散後、元帥にとある話を聞かされていた。

「天城君、実は一つ面白い情報が手に入った。」

「おもしろい・・・ですか？」

「ああ、それはなもう一人の地球最後の兵器のことだ。」

「・・・!!ついに現れましたか。」

「確信ではないがな。ロシア帝国で出会うかもしれない。」

「敵対してしまったら、かなり辛いことになるかと存じ上げます。」

「ちなみに、戦闘中に遭遇した場合は敵対しているようであれば、あの刀を使つても倒せ。絶対に殺すなよ。」

「了解しました。」

回想終了

「もう一人は、どんな武器を使ってくるんでしょう？」

「それについては大体調べがついているらしいぞ・・・どうやったかは知らないが。」

マジでWN×WRの情報収集能力は恐ろしいわ。

「天城様の武器は、「己身滅時 剣天切裂 主神力与」ですよね。」

「ああ、そうだ。あれは使い終わったあとがきついかな。」

「話題を戻しますが、結局どんな武器を使ってくるのですか？」

「ああ、どうやら「本」らしい。」

「・・・本ですか？」

「どうやらその本を使うと、一切の代償を支払わずに魔術を使えるらしい。」

「・・・チートですね。」

そしてその・・・やはりもう一人の方は・・・天城様の婚♀

「余計なことを考えるな、杏!」

僅かに怒りを孕んだ声で、警告した。

「すつ、すみません!大事な戦争の前なのに・・・」

「余計なことを考えていると、その場の判断を鈍らせるぞ。」
「申し訳ありませんでした・・・。」
そのまま、無言の時間が過ぎていった。

「己身滅時 剣天切裂 主神力与」

・効果

剣の使用、解放術で解放できるステータス全てをmaxにすることが出来る。

感覚器官も操れるようになる。

・継続可能時間

およそ1時間程度。身体疲労が大きい。

・特徴

遠距離も近距離でも攻撃できる剣。

何よりの特徴は、この剣と繋がっている限り、死なないということ。

Ⅲ・第四話

May 30 01:00:00 (25:00:00)

天城視点

俺たち西部制圧隊は、距離的なこともあり、東部制圧隊より早く到着した。

「ここは中立地帯か。他はほとんど抗争が起きてるか。」

「天城様、ただいま元帥に到着の報告を致しました。」

「了解。活動開始時間は？」

「東部制圧隊が到着予定の、10:00:00からです。」

「次期帝王の御二方は、何処へ？」

「それは、自分が説明いたしましょう！天城殿!!」

「アズীবズか、頼む。」

杏が、少しばかり不満そうな顔をしていた。

「おつ任せあれ！東部はダスアロニクス州

西部はダスアロニクス州に本部を置いております。」

「ふむ、やはり最西、最東にしているな。」

次だ、現在残っている中立地帯はどれぐらいだ？」

「それならね、もう調べがついてるぜ、デイザ殿。」

ジョシユアには、「デイザスター」からデイザを取って、デイザ殿と呼ばれている。

「どうやら、帝国にある20の州の内、3つだけだそうだ。」

「やはりそこまで数が少ないか。」

「天城様、ヘリでいっぱい寝ちゃったので、ぜんぜん眠れないんですが、どうしましょう」

「ふむ、では戦略会議を行う。」

「Yes, leader」

「これが、地図だ。」

こつから、上記の地図の説明

- 1、モス・デイケイ州
- 2、ベス・デイケイ州
- 3、デス・アロニクス州
- 4、カーボ・デイケイ州
- 5、メツサ・デイケイ州
- 6、バース・アロニクス州
- 7、ケム・オーディナリー州
- 8、マフィス・デイケイ州
- 9、デラ・デイケイ州
- 10、グア・オーディナリー州
- 11、メリアース・デイケイ州
- 12、バリオ・デイケイ州
- 13、ギス・アロニクス州
- 14、モンファス・オーディナリー州
- 15、グラ・オーディナリー州
- 16、ザス・アロニクス州
- 17、ドヴァーム・オーディナリー州
- 18、マジエア・オーディナリー州
- 19、ダス・アロニクス州
- 20、ミム・デイケイ州

・上位州に与えられるのが、「アロニクス」
中位州に与えられるのが、「オーディナリー」
下位州に与えられるのが、「デイケイ」

・上位、中位、下位は「財力・領地面積・国庫貢献度・優秀魔道師
量」

の観点によって定められている。

・上位国家には、高位の権限が与えられる。

「今、俺たちがいるのがこのモス・ディケイ州だ。」

「では、始めはバス↓カーボ↓メツサと制圧するのが妥当でしょう。」

「ディザ殿よお、走って何時間かかる？」

「ふむ、そのルートならば全力を出せば、5時間かからないな。」

「はっは!! 相変わらず規格外だねえ。」

「だが、全力つてのは「あの剣」を使ったらの話だぞ。」

「では、天城様、転移術昌を2, 4, 5に二つずつ置いてきてくれませんか?」

「了解、だが届くか?」

「いえいえ、大丈夫ですぜ。天城殿!」

「分かった、ならばそうしよう。その間に3人がかりでバースを制圧してくれ。」

「Yes, leader」

「それでは、解散!!」

そうして、明日にそなえる

Ⅲ・第五話

May 30 10:00:00

ランズ視点

東部制圧隊は、10:00:00にロシア帝国に到着した。

「現在、私たちがいるのがミム・デイケイ州です。」

「着陸地点が悪いですね。横の州に元凶が居られます。」

「・・・モンファス、行くしか、ない・・・」

「モンファス、グラ、ドヴァーム、マジエアを制圧するのが妥当でしょう。」

「ザス、ギスが心配ですね」

「・・・そこ、対立。」

「その2州の衝突に周辺州も加勢しているため、

被害減少のため周辺州を潰しましょう」

「本日12:00:00より東部・西部の両軍進軍開始です。」

「では、全員それに備えて用意を。」

どうやら、元の時間より2時間ほど遅れての開始となつたらしい。

May 30 12:00:00

天城視点

「それでは、定刻となつたため進軍開始する！」

「Yes, leader!」

「指令本部局へのコールは、「Call・CHS」だ。」

「返答はReCallですか？」

「その通りだ。」

「コードネームは、どのように？」

「本名で結構。元より秘匿回線だ。」

「了解しましたあー!!」

「質問は？」

．．．．．
「では、始め!!」

「速度解放max、攻撃・防御を代償とせよ!」

「我が身に流れし、王の血。いま我に流星の如き疾速をもたらせ!」

「原初の神・大地を司りしガイア・我、其の大地を今駆け抜けん」

3人が一気に加速する。これならば到着まで時間はかからないだろう。

「こいつを抜くのも久方振りだな。」

1つ、深呼吸をする。

「顕現せよ、「己身滅時 剣天切裂 主神力与」」

天城の元に一本の剣が顕現する。そして彼はそれを心臓へ刺した

「ぐっ、己の身が滅する時、剣は天を切り裂き、主に神の力を与える!」

そうすると、剣は輝き傷も癒えていく。

「．．速度、フルバースト」

そうして天城は駆け出す。3人な比べ物にならない位の速さで。

閑話休題

東部制圧隊 同刻

「それでは、進軍を開始します!」

「Yes, leader!」

「コードネーム等は、先刻報告した通りです。質問は?」

．．．．．

「それでは、進軍を開始する!」

「貴方の死を望みます・疾走」

「．．望むぞ「傲慢」、私に速さを．．」

「誇り高き美を持つ神よ、我に速さを与えよ」

そうして、三人は駆け出した。

本日の設定

特有魔術

↓個人が生まれながらに有している魔術である。

東部制圧隊

・ザーフ

特有魔術 「貴方の死を望みます」

・チャブン

特有魔術 「望むぞ、大罪」

・ランズ

特有魔術 「誇り高き美を持つ神よ」

西部制圧隊

・アズイーズ

特有魔術 「我が身に流れし、王の血」

・ジョシユア

特有魔術 「原初の神」

・天城

特有魔術 「己の身が滅する時、剣は天を切り裂き、主に神の力を与える」

Ⅲ・第六話

天城視点

「Call・CHS、こちら天城。13:00:00をもってベス・デイ
ケイ州へ進行完了。」

「Yes. 進行継続」

「了解、転移術昌設置場所のWCSの展開要請」

「了解、59° 56' 0" N, 30° 20' 0" E (59.
933333, 30.333333)」

「了解、1箇所のみか?」

「Yes, 転移の際に座標を正確に入力すれば可能です。」

「驚愕だ。では、そのように。」

「健闘を祈る」

「始めようかPAP, WCSを目前に表示。指定

「59° 56' 0" N, 30° 20' 0" E」。

そうすると、俺の前に地図が表示された。視界の右上だ。

「こっから約・・・というか結構近いな。」

「・・・いくぞ・・・」

そして、天城は一気に見えなくなった。

杏、アズイーズ、ジョシユア視点

「報告、アズイーズ」

「へい、了解しましたっ!」

「Call・CHS、14:00:00、西部制圧隊第2部隊ベス・デイ
ケイ州へ進行完了。」

「了解、進行継続」

「バースの進軍状況を教えてくれねえか。」

「了解、バースの進行状況は?」

「ガスとギスへ進軍。バース鎮圧、増援の停止を要求。」
「了解。」

「どうだった？」

「やっぱ、ガスとギスの交戦地へ送ってるつすねえ。」

「集外交戦地ですね。」

「それを供給から止めればいいという考え方だな。」

「そのとおりつすね。」

「では、参りましょう。」

「あつ、詳細な座標を聞き忘れたす。」

「おいっ(えっ！)」

「Call・CHS、詳細な座標を要求。」

「了解、61° 40' 0" N, 50° 49' 0" E (61.

666667, 50. 816667)」

「了解」

「聞きましたか？」

「ええ、おつ任せください!!」

「大丈夫かねえ？」

「PAP, WCSを目前に表示。指定 [61° 40' 0" N,

50° 49' 0" E]」

目前に、地図が表示される。

「よし、いっきましよう!!」

本日の設定コーナー

WCS

↓World Coordinate System

これは、リアルにあるもので座標を表すときに用いられる。

転移術昌

↓1000kmほどの距離を、詳細な座標を入力することによって

転移することができる。

便利アイテムだが、子機を作るのに莫大な金額がかかるので、量産は不可能。

しかも、1度転移すると子機が壊れてしまうので、コスパは最悪。ちなみに、本体はバスケットボールくらいのサイズで

子機が、トランシーバーぐらいの大きさです。

Ⅲ・第七話

天城視点

「よし、ここだな。」

俺は、転移術昌の本体をセットする。

「Call・CHS、こちら天城。指定位置に本体をセット完了。」

「こちらCHS。了解した。次の位置へ向かってくれ。」

「了解、転移術昌設置場所のWCSの展開要請」

「了解、57。 11' 0" N, 39。 25' 0" E (57.

1833333, 39. 416667)」

「了解しました。」

「PAP, WCSを目前に表示。指定

「57。 11' 0" N, 39。 25' 0" E」

「これは、なかなかの距離だな・・・。」

「ふうー・・・はっ!!」

俺は、一気に加速した。

だが、感じたのだ。俺を見ていた一つの視線を。

杏視点

杏達3人は、バース・アロニクス州へ到達した。

「Call・CHS、こちら杏。14:45:00、西部制圧隊第二部

隊バース・アロニクス州へ到達。」

「Yes, 進行継続」

「感知されない安全ルートの提示を要求。」

「了解、地図データを転送します。」

「感謝します。」

「・・・安全ルートが判明いたしました。」
「じゃあ私達は、あんたについていくぜ。」
「頼みましたぜ！杏殿！」
「では、出発いたしましたしょう。」

ランズ視点

「・・・やはり、水の上を走るのは疲れました・・・。」
「島を経由してきたとはいえ、疲れるものですね・・・。」
「・・・もう・・・だめ・・・で・・・す。」
船を使うわけにもいかないため、3人は水の上を走ってきたのだ。
「報告致しましょう。」
「・・・わたし・・・やる。Call・CHS、こちら東部制圧隊。16：00：00をもって
モンファス・オーディナリーに到達。」
「Yes, 進行継続。十分に警戒して戦闘を行ってください」
「了解しました。・・・はあ・・・つか・れ・・・た。」
「お疲れ様でした、では向かいましょう。」

天城視点

「Call・CHS、こちら天城。指定位置に本体をセット完了。」
「了解、進行を継続せよ。」
「了解しました。次の到着は少し遅くなるかもしれません。」
「理由の説明を要求。」
「・・・戦闘が起こるかもしれません。」
「戦闘ですか。」
「先刻より、視線を感じるのです。しかも自分についてきています。」
「・・・十分に警戒せよ。」
「了解しました。」

俺は通信を切る。そして・・・

「おい、きつきから何なんだ？」

そう呼びかけると、1人の女性が出てきた。

「始めましてだね・・

「兄さん」。

「——っ!？」

出てきた銀髪の女性は、そんなことを言った。

「あら、まだ知りませんでしたか？」

「・・俺に家族はいないはずだが？」

「兄様は知らないのですね。地球最後の兵器の繁殖のすべてを。」

「そういえば、誰も教えてはくれなかったな。だが、1つだけ聞いたな。もう一人の地球最後の兵器と結婚しなければならないと・・。」

「・・そうでしたか。ですが、いずれ知ることになりますよ。」

「ところで、俺をつけていた理由は何だ？」

「力量を確かめておきたかったのですよ。もう1人の地球最後の兵器の。」

「なんだ、決闘でもするのか？」

「いいえ、また今度にするわ。そして近いうちにもう一度会うことになるわ。」

「そうか。警戒しておく。」

「ふふ、じゃあね兄様。」

そうして、彼女は姿を消した。

「・・・兄さんだと?」

俺には、疑問だけが残った・・・。

Ⅲ・第八話

天城視点

「Call・CHS、こちら天城。戦闘は回避した。次の目的地の座標を要求。」

「了解、51。 46' 0" N, 55。 6' 0" E (51. 766667, 55. 1)」

「了解した。」

「PAP, WCSを目前に表示。指定

「51。 46' 0" N, 55。 6' 0" E」

「次の位置は・・まあまあの距離だな。」

俺は、1つ深呼吸をする。

「ふうー、はっ!!」

(兄様か・・)

疑問は残るが、俺は駆け出した。それを影で見る銀髪の少女。

「次はそこなのね。付いて行くわよ、兄様。」

銀髪の少女の、姿が消えた。

杏視点

「Call・CHS、こちら杏。 15:10:00、西部制圧隊第二部隊ベース・アロニクス州中枢へ到達」

「了解、安全に配慮して戦闘を開始せよ。」

「了解しました。」

「それでは、戦闘を開始します。」

「へい！了解しました!!」

「やつとかい、待ちくたびれたぜ？」

「ではアズイズ、タゲをとってください。」

「了k・・またですか。ですが、まっかせなさい!!」

「しくじるんじゃないよ、アズイズ。」

「我が身に流れし、王の血。いま我に飛竜の如し、跳躍力を与えよ！」
その直後、アズイーズは大きく跳躍した。

「スパークル・スパークル・ザ・ライト・インバイト・トゥー・スリーブ」

アズイーズが光り輝いた。その光は、空を覆う。

その後、一般人は全員気絶していた。

「これで、大体の無力化は終わりましたぜ！」

「相変わらず、凄いなんだねえ」

「魔道師には効かないから、使い勝手は悪いっすよ。」

「それでは、いきますよ！殲滅します!!」

「おお!!」

ランズ視点

「それでは、戦闘開始です。ザーフ様、タゲをお願いします。」

「了解しました。」

「バーン・バーン・バーン・ファイア・トゥー・インバイト・トゥー・スリーブ」

空中で、火の玉が爆散し、火の粉が人へと降りかかった。

・・・がしかし、燃えることなく意識を手放していった。

「これで、一般人の無力化は終了しました。」

「・・・軍人・・・殲滅。」

「そうですね、では突撃です!!」

天城視点

「Call・CHS、こちら天城。最後の1つを置いた。」

「了解、ベース・アロニクス州へ向かえ。第二部隊がいるところの地図データを送っておく」

「感謝する。」

(やはり、付いてきているな。)

「おい、まだ付いてきているのか？ばればれだぞ。」

「言ったでしょう、実力を測ると。」

「まあ確かに、まだ戦闘はしてないしな。」

「本格的な戦闘があるまでは、尾行させてもらうわ。」

「そうかい、邪魔はするなよ。」

「・・・ふふ、それはどうかしらね？」

「・・・勘弁してくれよ。」

「じゃあね。」

そうして、銀髪の少女は消えていった。

(本当に、邪魔はしてくれるなよ・・・)

Ⅲ・第九話

天城視点

「Call・CHS、こちら天城。戦闘地帯へ到着した。戦闘許可を。」
「了解、安全に配慮して戦闘を開始せよ。」
「了解した。」

そうして、俺は剣を握る。

「・・・聞こえるか、杏?」

「・・・はい!天城様!!」

「今着いた。そちらの現在位置の地図データを転送せよ。」

「了解しました!」

その直後、杏から地図データが送られてきた。

「仕事が速いな。・・・約6km程か。」

俺は加速して、杏たちのいる場所へと向かった。

杏視点

「天城様に地図データを転送しました!1分ほどで来ると思われま
す。」

「それなら安心だねえ。」

「いいところを見せるっすよ!!」

「はい!では行きましよう!!」

杏達のやる気が上がったようである。天城のお陰と言うべきであ
ろうか。

「ん?どうされましたか、CHS?」

「・・・・・・・・」

「なん・・・だと・・・。」

「なつかしいっすねえくそのネタ。」

「・・・わかり・・・ました・・・。」

「どうしたんだい?杏?」

「・・・もう一人の地球最後の兵器が発見されたそうです。」

「本当かい・・・!?!」

「や、やばいつすね。」

「天城様に接触を凶っているそうです。」

「・・・大丈夫つすかね?」

「どうやら、戦闘の意思は無いそうです。」

「警戒が必要つてことだねえ。」

「今はとりあえず、前の仕事に集中しましょう。」

「そうだねえ、デイザ殿に褒めて貰いたいんだよねえ、杏は。」

「なっ／＼／と、とりあえず集中してください!」

「はいよ。・・・おっと敵兵のお出ましだねえ。」

「まだ残つてたつすか。行くつす!!」

「おお!!」

3人は剣を取る。そうして、敵兵に向かっていった。

鮮血まみれの酷い戦場。

—にはならなかった。

「いやあくやっぱりこの武器すごいつすね。」

「作つた人を尊敬します。」

「臭くない戦場つてのは、初めてだねえ。」

3人は、大量の魔道師達を蹂躪していった。血を一滴も流させず

ランスズ視点

「ふっ!!」

「はっ!!」

「・・・!!」

3人もまた、兵士達を蹂躪していた。

「流石にやり応えがありませんね。」

「当然でしょう、まあ3人に蹂躪される強化兵士というのも滑稽なものです。」

「ロシア・・・大変・・・だね。」

「WN×WRが本気を出せば、ロシアを潰せるでしょうね。」

「おお、怖い怖い。」

「・・・こわ・・・い。」

「では、行きましようか!」

「おお! (うん)」

天城視点

「・・・着いてくるのはいいが、仲間には手は出すなよ。」

「さて、どうかしら?」

「・・・とくに、杏には絶対に手を出すな。」

「考えておくわ。」

「もし手を出したら、妹かもしれないが・・・殺るぞ?」

最大の殺気をこめて、そう言った。

「・・・!!え、ええ分かったわ・・・。」

少しは、怖がらせることができただろうか?

「じゃあ、いくか!」

(杏・・・ね、少し見てみようかしら。)

「オンニイシミアントウ・オンニイシミアントウ・ギブ・ネオ・ノウ
レツジ」

その直後、本が現れる。本の中から本が出るとは、奇妙な光景である。

「有里美 杏 15歳

WN×WR日本支部長 使用武器は、二丁拳銃。」

その他、その本にはいろいろなことが記載されてあった。(体重的な
ど)

「へえ〜体重は」

ソノサキハ、キキトレナカッタんだヨ。

「兄様と一番親しい女ね。興味があるわ。」

そうやって、銀髪の女性は消えていった。

Ⅲ・第十話

天城視点 17:00:00

「あれは・・・いた!!」

天城は、1人の見慣れた少女を発見した。

「・・・天城様!お久しぶりです!!」

相手も、天城を見つけたようである。

「杏、怪我は無かったか?」

「はい、大丈夫です!天城様も、大事無いようですねによりです!」

「お久しぶりです!天城殿!」

「久しぶりだねえ、デザ殿。」

「3人とも、順調に進行しているようで何よりだ。」

「えへへっ／＼」

「
よ かつ た ねえ
」

「何か言いましたか?ジョシユアさん?」

「いいや、なんにも。」

「さあ3人、残りを殲滅するぞ!」

「!!おお!!」

天城は、少し後ろに下がった。

「・・・来ているな?」

「そうよ、楽しみにしているわよ。兄様」

「期待しているような戦いはできないと思うぞ?殺し合いじゃないかならな。」

「・・・それでもいいわ。」

「そうかい、手は出すんじゃないぞ。」

「はいはい、わかっていますわ。」

そうして、銀髪の少女は消えて・・・

「ちよつと待て。」

いこうとした所で、天城に止められた。

「なにかしら？ 兄様？」

「名前を聞いていなかった。教えてくれ。」

「そうね、忘れていたわ。天城あまぎ 紫苑しおんよ。」

「分かった、引き止めてすまなかったな。」

「じゃあね、兄様。」

今度こそ、紫苑は消えていった。

「天城様！ どうされたのですか？」

「いや、大丈夫だ。気にしないでくれ。」

「そうですか……。では、いきますよ！」

「おう!!」

(紫苑か……。気になることが多いな。とりあえず今は、集中だ!!)

ランズ視点

「Call・CHS、こちらランズ。 17:30:00をもってマジエ
ア・オーディナリー州へ到達。」

「了解、同様に戦闘を継続。」

「了解。」

「御二人方、もうひと頑張りです。」

「了解しました。」

「……つか……れた。」

「この州で終わりですから、元気を出してください。」

「わかっ……た……。」

「では、行きましょう!!」

少女移動中 (1人少年)

「着きましたね。中枢です。」

「……わたし……いく。」

「望むぞ色欲群集の意識を刈り取れ」

その瞬間、放たれた光が群集の意識を刈り取った。

「では、魔道師を狩りましょう。」

「おお」

その直後、三人の周りに大量のアンデッドが現れた。

「な、なんですか!?!」

「・・・召喚・・・術式?」

「こんな高度な術式を展開できるとは!?!」

(ふふふふ・・・)

「くっ・・・!!やるしかありません、行きますよ!!」

「おお!!」

「貴方の死を望みます・闘争」

「・・・望むぞ「強欲」、力に貪欲になれ」

「誇り高き美を持つ神よ、我に力を与えよ」

三人は、無数のアンデッドに向かっていった。

「顕現せよ、「スノードロップ」」

「顕現せよ、「大罪人の刀」」

「顕現せよ、「狂美の斧」」

三人はそれぞれ、レイピア・刀・斧を顕現させた。

これは、正真正銘の殺し合いである。

否、アンデッドのため「殺す」というのは適切ではない。

その頃主犯は・・・

「このぐらいなら良いでしょう?・兄様?」

本当に邪魔しかしてこない妹であった。

Ⅲ・第十一話

天城視点 17:35:00

「よし、大体は制圧完了したな。」

「もう少しで、バースを獲れそうですね。」

「さっすが！WN×WRの戦力は恐ろしいっすねえ。」

「さっさと残りもやっつけてしまおうねえ」

「ここで、通信が入った。」

「・・こちら天城、どうされましたか？」

「東部制圧隊からの通信です。東部制圧隊が、大量のアンデッドに襲撃を受けています。」

「なに!？」

「何者かの召喚術式による物だと考えられます。十分に警戒せよ。」
「了解しました。」

「・・どうされましたか？天城様？」

「東部制圧隊が、襲撃を受けたそうだ。」

「!?!」

「大量のアンデッドで、召喚術式による物だそうだ。」

「そこまで高度な召喚術式ですか・・。」

「・・WN×WRの中級兵士級じゃないとできないねえ。」

(もしかしなくても、あいつだろうな。)

「天城様、どうかされましたか？」

「いいや、なんでもないぞ。」

「あっちは大丈夫だねえ、きつと。」

「今は集中っす!!」

「!!おお!!」

天城は、後退する。

「俺の戦闘だけでは物足りなかったか？妹よ。」

「さて、何のことかしらね？」

「あんな高度な召喚術式ねえ。優秀な妹を持ってうれしいよ。」

俺は、皮肉交じりに言っただけだ。

「そう、良かったじゃない。」

少し無愛想な返答であった。

「できれば、もう何もして欲しくないな。」

「さて、それはどうかしらね?」

返答は以前と同じであった。

「そうして、俺は戻っていった。しかし・・・」

「・・・どうしたんだ?」

「天城様、なにか隠していませんか?」

「隠し事は嫌っすね!」

「信用されなくなっちゃうぜ、デイズ殿」

「・・・隠しておくつもりは無かったんだがな。」

俺は、一息ついて・・・

「もう一人の地球最後の兵器。ずっと付いて来てるんだぜ?」

「!!?」

「どのあたりからですか?天城様?」

「俺がカーボにいたところからだな。」

「そんな早くからっすか!」

「気付かなかったねえ。優秀な魔道師さんだ。」

「何を仕掛けてくるかは知らないが、十分に警戒してくれ。」

「はい、分かりました。」

「妹を警戒とは。複雑な家庭なんだねえ。」

「・・・」

俺は、何も言うことができなかった。

「・・・ま、まあ行こうか。」

「・・・お、おおー!」

ランス視点

「キリが・・・ありませんね!!」

「アンデッドですからね。」

「つか・・・れた・・・」

「もう痺れをきらしました!! 一気にやります!!」

(「これ、やばいやつや」)

「コラプス・コラプス・コラプス・グラウンド・アラウンド・ミー」
ランズは、口調が変わった。そして、同じ詠唱を三度繰り返す。

(「ああ、オワタ」)

「崩壊しなさい!!」

そのとたん、周辺の地面が一気に崩落した。

「やはりですか!!」

「やつ・・・ぱり・・・!!」

呆れた顔をする、2人

「すみません、やってしまいました。」

「貴方の死を望みます・跳躍」

「望むぞ「憤怒」、我に跳躍力を」

「誇り高き美を持つ神よ、我に翼を与えよ」

3人は大きく飛び立った。

「これ、どう報告しましょうか?」

「・・・もう知りません。」

「・・・知らない!」

「そ、そんな!!」

・・・結果は酷かったが、無事に鎮圧できたのであった。

ずっとやろうと思ってたコーナー!

このキャラは「くのアニメのくに似てます」というやつです!

では、早速行きましょう!!

天城翔

CV ↓松岡禎丞

キャラ↓「アルケミストの終焉創造術」の主人公。その人を黒髪にしたかんじ。

有里美 杏

CV ↓茅原実里

キャラ↓「ギルティクラウン」のツグミ。目の色は、黄緑。

ランス・アプロディーテ

CV ↓伊藤静

キャラ↓「デート・ア・ライブ」のエレン・ミラ・メイザース。

ザーフ・スノードロップ

CV ↓花江夏樹

キャラ↓「東京喰種」の白カネキ。だが、髪の色は青色

ジョシユア・モールドフィツジ

CV ↓喜多村英梨

キャラ↓「お兄ちゃんだけど愛さえあれば関係ないよねっ」の二階堂嵐。眼帯は無く、目の色は赤色で統一されている。

アズリーズ・ラフマーン・サワード

CV ↓興津和幸

キャラ↓「魔弾の王と戦姫」のルーリック。

チャブン・マハラシユトラ

CV ↓井口裕香

キャラ↓「最弱無敗の神装機竜」のアイリ

天城 紫苑

CV ↓釘宮理恵

キャラ↓「魔法戦争」の四条 桃花。それよりもうちよい大きい。

(どいとは言わない)

他のキャラは、まだいざれやつていきます。

Ⅲ・第十二話

「天城様！東部制圧隊から連絡が入りました！」

「何！3人は無事か？」

「・・・はい、無事なんですけど・・・。」

「なんですけど？」

「ランズ様が、崩壊術式を展開したそうです。」

「二・・・二」

「それによつて、マジエアに多大な被害ができました。」

「二知つてた二」

「毎度の事ながら、性格が変わると取り返しのつかないことをしますね。」

「まあ、元帥の仕事が増えるだけだから、いいかな・・・。」

「あれ、でも確かその国の支部長が、担当の国に報告書を出すはずでしたよ。」

「ロシアの東部は、あの女の子つすねえ。」

「随分と損な役回りだねえ。」

「すまん、俺の妹？のせいで。」

「妹ですか・・・。まさか地球最後の兵器の繁殖方法が近親相姦だったなんて・・・。」

「はつきり言うなよ、泣いちやうぞ。」

「ディザ殿も、お縄かねえ。」

「おいこら、そこちよつと待て。」

「ふふ、冗談だよ。」

「こんなに話題になるなんて、私も人気者ね。」

「厄介者の間違いだろ、我が妹よ。」

「二え!?二」

「あら、私は何もした覚えは無いわよ。」

「ところで、どうして姿を現したんだ？」

「いえ、あまりにも順調すぎて面白くな…労ってあげようと思ったからよ。」

「おい、今不穏な言葉が聞こえたぞ」

「何かするつもりですか！」

「だとしたら、放つてはおけないねえ。」

「天城様の妹でも、容赦はしませんよ！（そう簡単に天城様を持っていかれたくは無いで す！）」

「…兄さん、心配してくれる人がいて良かったわね。」

「で、ちなみに何かするつもりなのか？」

「ええ、何もしないのにわざわざ出てきませんかよ？」

「！！！！」

「顕現せよ、「王室剣・一番」」

「顕現せよ、「原初神タルタロス・冥府」」

「行きます！」

アズリースは、大剣。ジョシユアは、槍。杏は二丁拳銃を装備した。

「兄さんの仲間は、強い人ばかりなのね。」

「まあ、これでもWN×WRの支部長勢だしな。」

「でも、一応私も地球最後の兵器なのよ。」

そう言うと紫苑は、手を前に突き出した。

「我が道を照らし照らせよ。冥の香は命を裂いた。僅かな灯を与え与えよ。」

一冊の本が現れた。だがその本は鎖に縛られている。

紫苑は、指先を少し切り血を流した。その後、その血を本に垂らした。

「応えよ、冥の香に、我が生血を捧げん。」

その瞬間、鎖が飛び散った。

「頁四拾八、「召喚術式」」

紫苑がページを裂き、投げると、目の前に魔方陣が現れた。

「解放」

その言葉が発せられた瞬間、大量のアンデットが出現した。

「二・・!?!」

「これが、3人を苦しめた召喚術式か！」

「あら、ばれっちゃったわね。」

紫苑は、悪戯っぽい笑みを浮かべて、そう言った。

「己の身が滅する時、剣は天を切り裂き、主に神の力を与える」

剣を心臓に刺し、力を解放する。

「流石、すばらしい特有魔術ね。」

「片手剣解放技・諸行無常の乱剣」

俺は、高速でアンデッドを駆逐していく。

「仕方ない、魔術の方も解放するか。」

俺は、刀へ亜素を注入していく。

「ナーグファ・オーブリアンション」

解放術と魔術の混合技である。

「どうやら少し張り合いが無かったようね。では、私が直々に相手をするわ。」

「そうか、怪我はさせないで置いてやるよ。」

「頁七拾五「風弾術式」」

天城に、空気の銃弾が襲い掛かった。

「はっ!!」

俺は、それを魔術を使わずに消した。否、吹き飛ばした。

「頁七拾式「放炎術式」、頁七拾四「剣撃術式」、頁七拾参「銃撃術式・壱番」

天城に、炎、無数の剣、銃弾が襲い掛かった。

「くっ!」

弾いてはいるが、やはり数発は受けてしまう。

「天城様!」

「天城殿!」

「ディザ殿!」

「あら、今加勢されちゃ困るのよ。頁七拾「拘束術式・最高位」

3人は、何かに縛り付けられたように動かなくなった。

「重力か?」

「あら、喋れるなんて余裕なのね。その通りよ。」

「最高位は、重力操作による拘束なのか。」

「まあ、それを知ってどうするのかは知らないけど?」

「アタミゼイシヤン・アタミゼイシヤン・タイ・アート」

「ふふ、そう来ると思ったわ。」

「なに!？」

拘束術式を霧散させる魔術を展開した。しかし、術式が崩壊したのだ。

「そう簡単に突破されるつもりは無いわ。」

「まじかよ、優秀だな我が妹よ。」

「そろそろ決着をつけましょう、兄さん。」

「・・・分かった。」

「頁壱千五百八拾七「剣撃術式・超越位」

瞬間、ビル30階にも相当する大きさの剣が現れた。

「……………」

俺はその剣の前に何することもなく、斬られていった。

「ふふ、終わりね兄さん。」

この少女は知る由も無かったのだ。

本当に劣勢に在るのは、自分だと。

Ⅲ・第十三話

「終わりね、兄さん。」

「天城様!!」

「天城殿!!」

「デザ殿!!」

天城は、強大な剣に切り裂かれた。

「もう少し強くないと・・・相応しくないわ、兄さん。」

「貴様ツ!!よくも、天城様を!!」

「はあ、もう少し止まってくれないかしら。」

だが杏は、拘束から逃れた。

「!?ふふ、貴方面白いわ。もしかしたら・・・。」

「貴様!絶対コロシテヤル、いや、ケシテヤル。」

「ふうん、貴方にできるかしら?」

「I will kill you no matter how
much you resist.

【抗おうと、狩ろう。】

Even if the world is going to
end,
the storm of massacre will
not stop.

【世界が終わろうとも、虐殺の嵐は止まらない。】

Death is the reach of mankind.

【死は我が手の届くところに有。】

Your heart is already in my hands.

【貴方の心臓は、既に私の手に。】

Let's get started, it's the beginning of the end.

【さあ、終わりの始まりだ。】

杏が豹変し、誰も見たことの無い詠唱を唱える。

「これは!?やはり、この人が!!」

「It was released, this time now!!!」

【今、放たれた!!!】

「くっ!!頁五百式重「防御術式・最高位」」

杏が作り出した光の槍。数はおよそ500を超えるだろうか。それが紫苑に襲い掛かった。

「くっ!!」

紫苑が苦悶の声を上げる。

「You hurt my precious things.」

【宝物に触れし者、例外なく死す。】

続いて、黄金に輝く剣を創り出した。エクスカリバーだろうか？

「頁七拾四「剣撃術式」！」

紫苑も同じく、剣を創り出して応戦する。

「You are an arrogant sinner.」

【傲慢な罪人よ。】

襲っていた無数の剣が爆散した。

「くはっ!!やってくれたわね、けどもう終わりよ!!」

紫苑が詠唱を始める。

「頁七千九百参拾式「崩壊術式・超越位」」

瞬間、地面も建造物も崩壊し、全てが杏に襲い掛かった。

「...!!!」

「はあ、はあ、流石に、これには、耐えられないでしょー!」

言葉の通り、杏は地面へ倒れこんだ。

「頁壹百参拾五「全快術式」」

紫苑は、徐々に回復して最後には傷一つ無くなった。

「さあ、止めを刺してしまおうかしら。兄さんには悪いけどね。」

紫苑は落ちていた剣を拾い、杏に投擲した。

「ふう、これでもう抵抗してくる子はいないわね。」

杏は、剣に貫かれて息を引き取る。

・・・筈だった。

「・・・あら、まだ抵抗してくる子がいた・・・わ・・・?」

そう言つて振り向くと、目にしたのはありえない光景だった。

「な・・・なんで・・・!?!」

そう、そこに立っていたのは・・・

「遅れたな、杏。」

天城翔であった。

「なんで・・・なんで生きてるのよ!?!」

「・・・見誤ったな、俺の特有魔術を。」

「見誤った・・・ですって!？」

「そうだ、地球最後の兵器の特有魔術が運動神経良くなるだけだと思っただか？」

「まさか、他に何かあるの？」

「ああ、この剣最大の特徴だ。それはな・・・」

紫苑は息を呑んだ。

「死ねない。ということなんだ。」

「・・・は!？」

「この剣を解放していると、どんな攻撃を受けても死なない。」

「なによ、そんな能力チートじゃない!!」

「魔術を無制限に使用できるお前にだけは言われたくないな。」

「私だって、流石に致命傷を受ければ死ぬわよ!!」

「まあそれはいい。だが、随分手荒な真似をしてくれたようだな。」

「元はといえば、あちらから仕掛けてきたんだから、私に罪は無いわよ?」

「まあ、そうだな。」

「でも、まだ生きてたんだったら、試すしかないわ。」

「なんだ、やるのか？」

「ええ、何のために来たと思ってるの？」

「分かった、ならば全力で相手をしよう。」

「さっきのは、全力じゃなかったってこと？」

「まあな。というか、全力を今だ誰にも見せたことが無い。」

「そう、分かったわ。では、行きましょう!!」

紫苑は本を展開する。そして天城は、剣を地面へ突き刺した。

『永劫地獄の創造者よ、大地を崇め奉らん。』

その瞬間、世界が崩れていった。

「なに!?!これは!!」

「これが、この武器の最強技だ。」

「なっ!本が・・・消えてる!!」

『たとえば、全てに否定されようとも、我は其の道を信ぜん。』

たとえ、全てに否定されようとも、我は其の世界を望まん。
たとえ、全てに否定されようとも、我は其の先の希望を望もう。

創造しようじゃないか、

たとえ、全てに否定されようとも!!

』

気付けば、無の空間が広がっていた。

天城は、銀の鎧に身を包んでいた。それはまるで・

「天使・。」

紫苑は悟った。勝てない・と。

「兄・さん・降参・です!!」

『逃げるな、自分で始めたのなら、最後まで戦って見せろ』

「ひっ!!」

紫苑は、恐怖でもはや何も考えられなくなっていた。

『永劫地獄への扉』

天城の後ろに、巨大な門が現れた。

『誘おう、終わらない地獄へと・』

紫苑は其の扉へ吸い込まれていき、意識が途絶えた。

(兄さん、流石です。私の婚Y・。)

世界が元に戻った。そこには、3人が倒れていた。

「天城殿、杏殿!!」

「ディザ殿、杏!!」

一番先に目を覚ましたのは、天城であった。

「・・ああ、おわった、のか・。」

「ああ！無事終わらせてくれたんだね！デイザ殿!!」

「流石っす！天城殿!!」

「なんだか、目的が、変わってるな・・・。」

「はは、まさかこんなことになるなんてね。」

「戦争の方も進めないとな・・・。」

「今日ほう休んだほうがいいっす！天城殿。」

「ああ、そうさせてもらおう。この2人も運んでくれないか？」

「・・・妹様もですか？」

「ああ、頼む。」

俺達は、医務室へと連れて行かれた。

こうして、地球最後の兵器たちの戦争は終わったのであった。

・・・ロシア戦争どうした？

Ⅲ・第十四話

天城視点 23:00:00

「ん……。ふああ……」

知らない天井だ。……もちろんそんなわけは無い。恐らく此処は医務室だろう。

「ああ、結構寝た気がするな……」

立てかけられていた時計は5時を指していた。

「5時か……。UTCは11時くらいか？」

（はあ、かなりの時間無駄にしたな……）

俺が横を向くと、2人の少女が横になっていた。

「はあ、良かった無事だったんだな……」

「んんっ……」

そう思っていると、隣の少女が目を覚ました。

「ふああ……。あ、天城様、おはようございます……」

「ああ、おはよう、杏。」

「天城様！無事で……良かったです！」

杏が、俺の胸に飛び込んできた。ああ……至福だ……

……聞かなかったことにしてくれ。

「……天城様、どうかされました？」

「い、いやなんでもないぞ！」

「そうだ、なんでもないぞ。」

「ところで、どうやって拘束から逃れてたんだ？」

「うくん、それがその辺の記憶が無いんですよね。」

「まあ、俺も実際に見たわけじゃないから分からんが……」

「まあ、この人が全部知ってるんでしょうね……」

そう言つて杏は、紫苑を指差す。

「出来れば、今此処で頭部に穴を開けてやりたい気分ですが……」

「ま、まあ一旦落ち着こうな！」

「ええ、聞きたいこともありますし……」

（最近ちよつと怖いよ、杏さん！）

「ところで天城様、どうやってコイツを倒したんですか？」

「ああ、全力を出した。」

「・・・はい？」

「まあ、生まれて此の方出したことの無い、全力を出したんだよ。」

「どうか天城様、全力出したこと無かったんですね・・・。」

「ああ、出して耐えられる相手がいなかったからな。」

「ええ〜！天城様、私に本気出してくれてなかったんですか!？」

「ああ、女の子に怪我させるわけにはいかないからな。」

「一応、コイツも女ですよ？」

「まあ、そこは気にしたら負けだ。」

（こんな会話がまた出来るなんて・・・。本当に無事でよかった。）

「んんっ・・・。」

「・・・チート魔法使いがお目覚めのようだぞ。」

「・・・漸くですか。」

（杏さん！視線に殺気込めないで!!）

「んんっ・・・。ふああ・・・。」

「ようやく起きたな、紫苑。」

「ええ、死んでなくて良かったわ。」

「いえ、私としてはそのまま死んでくれても・・・。」

「杏！一旦落ち着こうか!!」

「・・・すみません、天城様。」

「あら、嫌われたみたいね。」

「ああ、そりや自分が殺されかけたんだから怒るだろ。」

「・・・そっちじゃないと思うけど・・・。」

「ん？何か言ったか？」

「いえ、特に何も。ところで、これから私はどうなるのかしら？」

「まず、お前が何なのか教えて貰わないとな。」

「話した通りよ。地球最後の兵器の1人よ。」

「そっちじゃない。妹の事だ。」

「それは・・・今は話せないわね。」

「はあ!?! 貴様、天城様にあんな事をしておきながら!!」

「まあ落ち着け、杏。」

「す、すみません。」

「分かった、じゃあそれは話さなくてもいい。」

「じゃあ、これは話すわね。有里美さん、貴方についてよ。」

「私ですか?」

(機嫌悪いよ、杏さん。)

「ええ、貴方は唯の解放術師じゃないわ。」

「・・・!?」

「貴方は、容認体ブリードと呼ばれる人よ。」

「ブリード?」

「そう、2人は見てないかもしれないけど、私を死亡寸前まで追い詰めたのは、容認体の力よ」

「死亡寸前まで、地球最後の兵器を追い詰めたのか・・・。」

「・・・そこで殺してしまえば良かったです・・・。」

「杏、君はちよつと黙ってよう。」

「ジョシユアとアズィーズなら見たかもな。」

それに応えるように、ドアが開いた。

「天城殿! 杏殿!!」

「デイザ殿! 杏!!」

「やあ、久しぶりだな。」

「ご心配おかけしました。」

「はあ、無事でよかったです・・・。」

「生きて帰ってきてくれてよかったですよ・・・。」

「そう簡単には死なないぜ?」

「ところで2人とも、質問いいですか?」

「はい、どうぞつす!」

「おお、いいよ。」

「2人とも、杏が紫苑を追い詰めたところは見てたか?」

「・・・はい、見てたつす。」

「・・・ああ、確かに覚えてるよ。」

「・・・じゃあ本当なんだな・・・。」

「ええ、見た事も無い術式を展開してたつす。」

「見た事も無い術式？」

「そう、それが容認体の力よ。」

「ブリード？」

「大丈夫だ、後で説明する。」

「それで、何なんですか？ブリードっていうのは。」

「今は詳しくは言えないわ。でも、地球最後の兵器に匹敵する力を持った戦士とだけ言っておきましょう。」

「分かった。だがいつかは全てを話して貰うぞ。」

「私にとつては心底どうでもいいですが、貴方これからどうするんですか？」

「そうね、貴方達……。いえ、兄さんと一緒にいるわ。」

「な!?!コイツ、殺しに来た拳句、天城様の隣まで奪おうとするなんて!!」

「いや、でも聞きたい事もあるしな……。杏、許してやってくれないか?」

「・・・わ、分かりました。仕方なくく、許してあげましょう。」

「ありがとうな、杏。物分りが良い子は好きだぞ。」

俺は、杏の頭を撫でてやった。

「ふえ!?!ふふ・・・えへへ。」

満足してくれたようで何よりだ。

「兄さん、リア充オーラ全開は止めてくれないかしら。」

「はい、すみません。」

「という訳で、少しの間世話になるわね、支部長の皆さん？」

厄介者が、西部制圧隊に加わったのであった……。

Ⅲ・第十五話

WN×WR NSA本部 17:50:00 (UTC)

「元帥様！西部制圧隊からアラートが発令されました！」

「アラートだと？ランズの崩壊術式に続き、今度は何なんだ？」

「もう一人の地球最後の兵器と、完全な戦闘状態に陥ったそうです．．．」

「ふむ．．．現れるとは思っていたが、まさか仕掛けてくるとは思わなかったな．．．」

「天城様なら鎮圧して下さるでしょうか？」

「．．．相手の実力が分からんから何とも言えんな．．．CHS、東部制圧隊に通知しておけ。」

「はっ！了解いたしました！」

(ふむ、貴様なら余裕だろう？天城．．．)

東部制圧隊 同刻

「CHSから通知がありました。」

「．．．珍しい．．．」

「ほう、内容は何ですか？」

「どうやら、西部制圧隊がもう一人の地球最後の兵器と完全な戦闘状態に陥ったそうです。」

「もう一人の地球最後の兵器!?!」

「．．．驚、愕．．．!!」

「ちなみに、戦況についての報告はありましたか？」

「いいえ、戦闘状態に陥ったとしか聞いていません。」

「心．．．配．．．」

「いえ、きつと天城様なら勝ってくれるでしょう．．．」

「ええ、私達は私達の仕事をしましょう。」

「行．．．こう．．．!!」

「ええ、行きましょう！」

「はい！きつさと制圧してしましましょう!!」

東部制圧隊 23:15:00

「妹よ、腹は減ってないか？」

「いえ、特に。普通に何も食べなくても1週間は持つわよ？」

「・・・怪物かよ。」

「いろいろ大変なのよ、傭兵生活っていうのは。」

「傭兵!？」

「ええ、傭兵よ。」

「何で・・・何でWN×WRに入らなかったんだ？」

「まあ、出来れば私も兄さんと一緒に居たかったわ。でも、そういうわけにもいかなかったのよ。」

「・・・事情があるんだな？」

「そんなに深いことじゃないわ。唯の私の気持ちの問題よ・・・。」

「ブリードとの関係は？」

「特に無いわ。強いて言うなら、地球最後の兵器の繁殖方法についてね。」

「地球最後の兵器は、もう一人の地球最後の兵器と結婚する・・・。」

「それが全貌じゃないわ。」

「しかもお前は妹・・・。そこにブリードだと・・・？」

「紐を解けば、至極簡単な話よ。」

「だが、まだそれを知ることが出来ないのか・・・。」

「御免なさいね。それは私の我儘なの・・・。」

「まあ、話したくなったら話してくれば良いさ。」

「ごめんなさい・・・。」

「よし！じゃあこの話は終わりだ！ご飯にしよう！」

「え？」

「ご飯だよ、ご飯。ほら、いくぞ！」

「え？その、兄さん料理できるの？」

「まあ、一応今まで1人暮らしだったからな。家事全般は完璧にこなせるぞ。」

「へえ……。家事が出来る男性は女性に好まれるらしいわよ。」
「はいはい、貴重な情報ありがとうな。」
俺達は、談笑しながら食堂へと向かっていった。

Ⅲ・第十六話

「さて、ロシア戦争も解決させなきゃな・・・。」

俺は、紫苑と食事をしていた。

「あ、そのことなんだけど・・・。」

「ん？どうした？」

「実は、もう恐らく戦争は終わるわ。」

「・・・は？何故？」

俺が尋ねたところで、3人の少女十少年が入ってきた。

「天城様、お食事中でしたか！・・・何故貴方まで天城様の手料理を食べてるんですかね〜？」

「天城殿、お邪魔になってしまいましたか？」

「悪いねえ、兄弟の食事を邪魔して。」

「まあ落ち着け、杏。それと3人とも、聞いてもらいたいことがあるんだ。」

「二聞いてもらいたいこと・・・？」

「ああ、紫苑からだ。」

「え？ああ、戦争のことね。」

「終わりって言ってたな、何故だ？」

「二終わり!？」

「ああ、さつき紫苑が【ロシアの戦争は終わりだ】って言ったんだよ。」

「何故ですか!？」

「それは、さつき兄さんに言った私が傭兵だつていうことに関わつてくるわね。」

「二傭兵!？」

「もう後で言うから・・・続けてくれ、紫苑。」

「ええ、私はこの戦争に東部方面と手を結んで傭兵として参加したわ。ちなみに東部方面っていうのは、フォース・アリベルト信者共の領域よ。」

「・・・続けてくれ。」

「私がフォース・アリベルト側に付く際に、ある条件を提示したのよ。」

「それは一体・・・？」

「私が兄さんに負けた場合、戦争は終了する。ということよ。」

「フォース・アリベルトはWN×WRの介入を知っていたのか？」

「いいえ、知らなかったわ。だから私が提供した。WN×WRが介入してくると知って、多大な被害が出ることを予測したのよ。だから、私が勝てば確実に戦争には勝利する。でも、もし私が負けた場合、決着が付くまで犠牲は出続けるのよ。フォース・アリベルトはそれを防ぎたかったのよ。どうしても国民への被害が大きくなるのは避けなかったようね。」

「自らの主張を捨ててまで、国民のことを守りたかったのか・・・。」

「ええ、素晴らしい心の持ち主よ。でも、決して国民は救われない。負けた瞬間、その主張は無かったことになるんだもの。そして、ファイズ・アリベルトの独裁が始まる・・・。」

「ファイズ・アリベルト・・・兄の名前か・・・。」

「ええ、独裁を望んでいるわ。」

「確かに、それじゃあ国民は救われないな。」

「ええ、残念ながらね・・・。」

「・・・分かった。だが戦争は終わりなんだな・・・。」

「ええ、終わりよ。既に敗退の報告は飛ばしたから、明日の朝には終わるでしょうね・・・。」

「明日の朝まで、戦争は続くんだな・・・。」

「え、ええ、そうよ？」

（・・・俺が叶えてやる、奴の願いを・・・。）

「よし、では明日の朝には帰る。元帥に報告するんだ。」

「はい、了解しました！」

そうして、俺達は自分の部屋に戻っていった。

そこでなんと、元帥から通信が入ってきたのだ。

「げ、元帥!?ど、どうされました?」

「おや、なんだか慌てているね?いや、面白い情報が手に入ってるね。」

はい、録でもない事確定いたしました。

「情報とは・・・?」

「実はね、戦争終結のときが来たようだ。」

「な!?!それは!!」

俺は、ついつい興奮してしまった。

「いや、実はね。前皇帝を殺した犯人が特定できたんだ。」

「・・・なんですと?」

俺は耳を疑った。それが本当なら、今すぐにも戦争を終結させることが出来るからだ。

「実はね、前皇帝を殺したのは「ファイズ・アリベルト」だ。」

「なんですと!?!」

「証拠も見つかった。WN×WRの調査団が見つけたそうだ。ロシア帝国のプログラムをハッキングして、ファイズ氏が隠蔽した前皇帝暗殺計画の概要を発見したんだ。」

おお、優秀さが半端ないな。

「ということとは?」

「ああ、戦争終結の方法をお前に提示する。先刻、降伏の宣言がフォース氏により提示された。タイムリミットは8:00。それまでにファイズ・アリベルトを暗殺せよ。」

「Yes, Marshal!!」

「頼んだよ。大丈夫。証拠隠滅はWN×WRが全力を尽くそう。」

「了解いたしました!!」

そうして、通信が切れた。

さて行こうか。終焉のときだ。

「ふっはっは!!勝ったぞ、勝ったぞ!!」

「流石です、ファイズ様!」

「愚弟よ!やはり皇帝は神の立場に居なければならんのだ!」

「その通りでございます!」

「【戦争がUTC8:00までに決着が付かなかった場合、我々は戦争を放棄する】」

「まさに臆病者の発言でありますな!!」

「東部の方も兵を退かせているそうだな!完全勝利ではないか!!」

「ですがどうやら、何処かの兵団もこの内乱に介入していたようです。しかもその者たちの影響は大きすぎると...。」

「ふむ、所在はつかめているのか?」

「いいえ、掴めておりません。」

「まあ良い。どうせ尻尾を巻いて逃げていっただろう!」

「ええ、その通りでございますな!」

「ふっはっはは!!」

『ふふふ...。』

「ん?おい貴様、何か話したか?」

「いいえ、何も申しておりません...。」

「ではどこから...?」

『実に滑稽であるな、ファイズ・アリベルト』

「な!?だ、誰だ!!」

「こ、これは!?!」

『ふむ、この程度の魔術も解析できないか...』

「貴様!何者だ!!」

『貴様の味方ではない。それだけは教えてやる。』

「ファイズ様!今すぐお隠れになられてください!」

『そうはさせんぞ?』

「うぐ...ぐはあ!!」

その直後、部下が血を吐いて倒れた。

「な!?!何だ今のは!!」

『さあ?何でしょうか?』

「ファイズ様!」「ご無事ですか!」「今の音は!？」

5人ほどの魔道師が入ってきた。

『ふむ・・邪魔。』

「なっ!がはっ!!」

「何!?!ぐっ!!」

「くっはっ!!」

「お、お前ら・・ど、どうしたんだ?」

「ファイズさ・・ま・・逃げて・・。」

「ひっ!!な、何なんだ、貴様は!!」

「・・そろそろ時間だ。安心しろ、一瞬だ。』

「お、俺が何をしたって言うんだ・・!？」

『前皇帝、殺したの・・お前だな?』

「な・・どこでそれを!・・い、いや何のことだ!？」

『大丈夫だ、誰も聞いていない。全てを話せ。』

「は、話したら、見逃してくれるのか!？」

『・・・・』

「ひっ!そ、その通りだ!俺は前皇帝を殺した!」

『・・何故だ?あいつは相当国民に愛されていたぞ。史上最大だな、きつと。』

「気に入らねんだよ!あの糞親父のやり方が!!何が民主主義だ!何が国民の中心だ!」

『・・・・』

「皇帝つてのは、もつと誇り高きモンだろうが!!国民は奴隷!国を発展させるための道具でしかねんだよ!!」

『・・そうか。』

「おい、話したぞ!きつさと消えやがれ!!」

『・・いい話を聞かせてもらった。礼を言おう。』

「ふうく・・良かった」

『お礼に、何の痛みも無く殺してやる。』

「な!?!何で・・何で殺されなきゃいけないんだよ!!」

『答えを言おう。我儘だ。』

「は!?!わが・・まま・・だと?」

『時間だ、H e l l w i l l b l e s s y o u . さようなら』

この世から、1つの命が散ったのであった。

ファイズ・アリベルトを殺したものの正体は、未来永劫、明かされることは無かった。

余談だが、後日、ファイズ・アリベルトの父親殺害が、上記の話とともに、公になったのであった。

こうして、長く、そして大規模な兄弟喧嘩は収束したのであった。

「エクラ・サン・ペルデュ」 UTC May 31 08:00:

00

終戦

Ⅲ・第十七話

6月1日 W N×W R NSA本部

「皆、ロシアの大規模内乱の鎮圧、ご苦労だった。」

5月31日、W N×W Rによって大規模内乱は終焉を迎えた。

「結果は、ファイズ・アリベルトの死亡であった。」

「質問よろしいでしょうか？元帥。」

「許可する。」

「ファイズ・アリベルト殺害は、元帥のご意向だったのででしょうか？」

「ああ、その通りだ。大人数で攻めるわけにもいかないからな。天城1人に行かせた。」

「・・・返答いただき、誠に感謝致します。」

そう言つて、杏は下がっていった。

(申し訳ございません、元帥)

「他に質問がある者は居ないか？」

「よろしいですか？元帥。」

「許可する。」

「もう一人の地球最後の兵器については、どうなさるおつもりですか？」

「それは・・・楽しみにしておけ。とだけ言っておく。」

「楽しみに・・・ですか？了解いたしました。」

俺も下がっていった。僅かな疑問を抱きながら・・・。

「他に質問がある者は居ないな？それでは、各自自分の職に戻つてくれ。」

「「「「YES, Marshal」」」」

・・・やっと、普通の日々が戻ってくるのか・・・。

数日後・・・

6月3日 Genesis Kingdom

「はあ、ようやく終わりましたね・・・。」

「お疲れ様でした、ザーフ様。」

「ああ、ただいま。」

ニユースには、ファイズ・アリベルトの死亡と、次期皇帝の決定についてが大きく取り上げられていた。

「見つかっていないようですね・・・。」

恐らく、ファイズ・アリベルトを殺した者のことを指しているのだろう。

「見つかりませんよ。未来永劫・・・ね。」

ザーフは、小さな声でそう呟いた。

「え？今なんと？」

「いいえ、何でもありません。」

また、日常が戻ってきたのであった。

6月3日 India Empire

「お帰りなさいませ、チャブン様。」

「・・・うん。」

「えっと、大変でしたか・・・？」

「・・・つか・・・れた。」

「え、あ、はい。ゆっくり休んでください。」

「・・・うん。」

「・・・地球最後の兵器に会えて、うれしかったですか？」

この地球最後の兵器というのは、天城のことを指している。

「・・・うん！」

「はは、相変わらずですね・・・。」

この後、チャブンは天城のことについて、長々と語るのであった・・・。

6月3日 Neo Strong Aggregation

「おつかれ、ランズ。」

「はい、ありがとうございます、元帥。」

「君達は本当に良い働きをしてくれた。」
「あの、元帥のご意向というのは本当なんですか？」
「・・・さあ、どうだろうね？」
「え？ということは・・・。」
「ランズ、その先は駄目・・・だよ？」
「っ！ふあ・・・はひっ／＼!!」
「・・・此方も、日常が帰ってきたようだ。」

6月3日 Arabia Coalition

「さあ、今日から仕事再開つすよ！」
「え!?!サウード様！今日の朝戻られたばかりですよ！」
「結構溜まったすねえ、さあ、いつきましよう!!」
「え!?!少しお休みになられては・・・。」
「ほら！早くやるつすよ!!」
「・・・ワーカーホリック・・・。」
「ん？何か言ったすか？」
「・・・いいえ、何でもありません。」
此方も、いつもの日常が帰ってきた・・・。

6月3日 Australia

「ジョシユア様、いつになったら戻ってくるんですか!!」
「おつ、ただいま。」
「ジョシユア様、帰国早々どこ行ってたんですか！」
「ん？いろんな人にお土産を届けに行ってたねえ」
「え？ジョシユア様、戦争に行ってたんですよね？」
「ほら！マトリョーシカだよ」
「へ!?!あ、ありがとうございます・・・。っつてそうじゃなくて！」
「あ、これから連中と酒の約束してたんだよねえ。」
「は!?!ちよ、ちよつとく!!」

「んじゃ、後はよろしくねえ」
アズীবズとは、対照的なのであった。

6月3日 日本

「ふああ……。ん、朝か。」

また、いつもどおりの日常が帰ってきたのか……。

「はあ……。学校か……。」

何故だろう、体が重い。ダルイ。ツライ。

「はあ、【アルナミンA+】どこにやったかな？」

さあ、学校に行こうか……。

(結局、楽しみにしてる。ってなんだったんだ?)

俺は、そんなことを考えながら、教室に入っていく。

……。教室を静寂が支配した。

「お、おはよう?」

「天城さん!!」

1人の少女が駆け寄ってきた。

「おう、おはよう。鏡月」

「天城さん……。どこに行ってたんですか……?」

「まあ、なんというか、野暮用でな。」

「……5……。」

「5?」

「天城さんの通知表に書かれるであろう、欠席日数の数です。」

「うぐ……。いやその、野暮用でな……?」

「良かった……。天城さん、肩身が狭くて居辛くなって、不登校になったかと思いました。」

「いや、その程度で不登校になるんだったら、そもそも此処に入ろうと

思っていないわ。」

「あ・・・そうですね。でも、ちゃんとまた来てくれて、嬉しかったです・・・。」

「ああ、心配掛けたな。これからは毎日来ると思うぞ・・・多分。」

「はい！ちゃんと毎日、私に『おはよう』って言ってくれませんか？」

「あ、ああ、分かった」

教室は、気付けばまた騒がしくなっていた。

「ところで天城さん。転校生が来るそうですね？」

「ほう、そうなのか。」

「どうやら2人で、どちらも女の子らしいです。」

「ほう、そうなのか。」

「もう！天城さん、ちゃんと聞いてますか？」

「いや、大して興味ないし・・・。」

「あ、そうですね。でも、かわいい子がいいですね。」

「そうだなー。」

「ま、まあ楽しみにしましょうか・・・。」

（楽しみにしておけ・・・）

元帥に言われた言葉が、頭をよぎった。

（まさか・・・な。）

「は〜い、皆さん、席に戻ってくださいい〜。」

懐かしいな、この声を聞くのは。

「今日は〜転校生を紹介しますー！」

その直後、2人の少女が教室に入ってきた。

・・・まじかよ。

「紹介しますー！では、2人とも自己紹介をお願いしますー！」

「私は、天城 紫苑。よろしく。」

平民の烙印を押された厄介者と・・・

「私は、有里美 杏です！よろしくお願いしますー！」

随分と見慣れた、美少女と呼ぶに相応しい、日本支部長が立っていた。

教室がざわついた。

「ねえ、2人とも可愛くない？」「まさか平民：。」「しかも今、天城つて」

可愛さに騒ぐもの。烙印に騒ぐ者。様々である。

「ちなみに私は、天城 翔の妹よ。」

「ちなみに私は、天城さm・・・天城君の永遠の妻で・・・。」

「ちよつと待てい!!」

「え・・・？何かおかしな所が？」

「はあ、とりあえず後は何も言うな、杏。」

「はい、分かりました！」

「というわけだ。皆、仲良くしてやってくれ。」

俺は、自分の席へ戻っていった。

「楽しみに・・・ってこういうことだったのか！」

「どうしたの？兄さん。」

「どうされました？天城様？」

「杏、日本支部長はどうなった？」

「はい、一時的にクビになりました。ブリードと地球最後の兵器は一緒に居た方が良かったのかなんだとか・・・。」

「そ、そうか。紫苑、何故此処に？」

「元帥にお願いしたからね。」

「・・・Why?」

「それはもう・・・兄さんと一緒に居たかったからよ?」

そう言つて、紫苑は俺の腕に抱きついてきた。

「なっ／＼お、おい!」

「ふふ・・・」

「貴様・・・天城様にナニヲシテイル!!」

「あ、杏さん落ち着いて・・・」

「あら、今度こそは剣で貫いてあげようかしら?」

「ああ、ヤレルモノナラ、ヤツテミナ!!」

「ふ、二人とも、落ち着いて・・・」

「ふふ、冗談ですよ、天城様」

「ふふ、冗談ですよ、兄さん」

「は、はあ・・・【アルナミンA+】はどこだ!」

「に、兄さん何処へ?」

「あ、天城様、何処へ?」

騒がしい日常が帰つてきたのであつた・・・。

「はあ、全く、嬉しい限りだよ」

俺は、誰にも聞かれること無く、そう呟いた・・・。

特別講師く大尉、ちよつとがんばるく

IV・第一話

「えくつと、今日は実戦解放術についての授業をします!」

(実戦ねえ・・・。)

「まず、解放術の基礎についての復習をします。解放術は、脳に多大な情報を与えている箇所から、強化箇所にも力の移行をすると、膨大な力が得られます。その例を、有里美さん。」

「はい、五感ですね。逆に、影響が少ないのが運動能力そのものの移行です。情報の提供源を一つ潰すのと、運動能力を僅かに減少させるのには、大きな差があります。ですが、得られる力の量と、身体への影響の大きさは比例しています。視覚や聴覚を失くしてしまうと、戦闘に大きな支障が出ます。そのため、実戦を視野に入れるのならば、相手の特性を理解した上で、自分に必要な力、相手に対応できない力を計算することが大切です。」

「はい、見事な説明でした。では、フルバーストとは何でしょう?紫苑さん。」

「フルバーストね・・・。超過だったかしら?能力の完全移行。術式強度の完全化。」

「み、短い説明でしたね・・・。まあ、その通りです。では、今の説明にあった、術式強度とは何でしょう?天城くん?」

「術式強度ねえ・・・。たしか、移行値だった筈。どれ程膨大な力を移行したか。」

「兄弟似てますね・・・。何故どちらも短いんですか・・・?」

「必要なことは言った。それだけだ。」

「・・・そうですか、しかもその通りですから、性質が悪いですね。」

「先生、口調変わりましたね。」

「まあ、授業中ですし・・・。って、そうじゃなくて!」

「いいから授業続けて頂戴?時間無くなっちゃうわよ?」

「はあ、分かりました。続けます・・・。」

大変だな、先生。

「では、座学はこれまでにして……。実戦に移りたいと思います！ペアを作ってください。」

（あつ、これは不味い。非常に不味い！）

「さ、天城様！行きましょう。」

「あら、何勝手に話を進めているのかしら？兄さん、私と一緒に行きましょう？」

「ほら来たよ。ほんと、ペアってきついよな。」

「さあ、天城様！」

「さあ、兄さん！」

（打開策は・・・これだ！）

「んじゃ、2人でペアな。」

「は!?!兄さん、何でこんな女と！」

「その通りです！天城様！」

「いやあ、俺は素直な女の子は好きだなあー（汗）」

「さ、おとなしくやりましょう、クビになった支部長。」

「そうしましょう、自称妹。」

「よし、おk、じゃあ俺はしれっと休んで……。」

「あ、あの、天城さん……。」

「ん？ああ、鏡月。どうした？」

「あの、実は組んでくれる人がいなくて……。一緒にお願ひできますか？」

視線が痛い、後ろからの。

「えっと、体調がわる」

「だめ……ですか？」

グフオア!!だ……駄目だろ、これは……。

「あ、うん。いいぞ……。」

「あ、ありがとうございます！」

一応、後ろを確認……。

（兄さん、ギルティ。）

（天城様、後でお話）

．．何も見なかった。何も居なかった。

「天城さん！行きましたよう！」

「お、おう．．そうだな．．。」

俺、今日死ぬのかな．．。

こうして、実技は無事には終わらなかった。

そして、昼

「杏、日本支部長は誰に代わったんだ？」

「元・ロシア東部支部長です」

「ああ、あのロリっ子か。」

「お陰で、ランズ様の一件を背負わなくて良くなったそうです。」

「ほう、それはそれは。」

「会いに行ってみますか？」

「まあ、そうするかな．．。」

「了解しました！では、今週末にでも行きましょう！」

そういえば、ロシア東部は誰になったんだろうな．．？

IV・第二話

「皆さくん、実は明日、国防軍のほうから特別講師さんが来て下さるそうです！」

突然の先生の発言に、クラス中がざわついた。

「・・・国防軍か。」

「レベルⅢに来るっていうことは・・・。」

「もしかしなくても、対専でしようね。」

対専というのは、対魔道師専門部隊の略称である。

「その通りですよお、紫苑さん！なんと、対専の大尉さんが来てくれるらしいです！」

「ま、まじか・・・」「大尉・・・ってどこだっけ？」「流石つす、レベルⅢ・・・。」

「ああ、対専か。」

「兄さん、対専との関係は？」

「・・・あるっちゃある。」

「地球最後の兵器として？それとも、WN×WR大将として？」

「後者だ。3年前位に中華民国が核兵器相当術式を日本にぶつけて来たろう？その時に対専で動いたんだよ。」

「・・・その時、私中華民国だったわ。」

「・・・うん。」

「魔道師25人近くで打ったわね。」

「・・・うん。」

「大規模術式・「パーマネント・デイサピアランス」。凄い威力だったわね。」

「・・・何が言いたい？」

「流石の私も、あれを打ったときは疲れたわ。何で10人しか用意しなかったのかしら？」

「・・・。」

「・・・。」

「あれ打ったのお前か!!」

「ええ、傭兵だもの。言われた事はやるわ。」

「あれ、結局日本ではA M M使って迎撃したんだぞ!？」
「・・・よく魔術を物理的に殺そうと思ったわね・・・。」
「全く、貴方は余計なことしかしませんね・・・。」
「はあ、でも今更過去のことを掘り返しても仕方ないだろ・・・。」
「そうよ、兄さんの言う通りよ。いい加減にしなさい、クビ支部長。」
「え!?!何で私が怒られて・・・ってその名前で呼ぶの止めてください!」
「はあ、ちよつと黙ってなさい。ところで、A M M使ったのに、対専の出番あつたのかしら?」
「ああ、A M Mで威力は消したんだけど、爆発っていう第二波があるんだよ。」
「まあ、そうね。」
「それを、対素の対外放技・アブソリュートシールドの強化版。ワイドリチュアルで防いだんだ。」
「あ、ちなみに私も参加しました!」
「つて、A M M本当に役に立ったのね・・・。」
「まあ、唯のミサイル迎撃ミサイルじゃないからな・・・。」
「ふうくん、まあそこは深くは聞かないわ。」
「では天城様!そろそろ帰りましょう!」
「ああ、帰るか・・・。」

IN AMAGI, S HOUSE

「ねえ兄さん。」
「どうした?」
「月が綺麗ね・・・。」
「ほう、まあ、唯の石だけだな。」
「な、なかなか斬新な返し方ね・・・。」

「お前は どう返して欲しかったんだ？」

「あら、私は「私もそう思います」とか返してくれても、全然良かったのよっ。」

「・・・からかうな。」

「ふふ・・・。まさか殺し合いをした相手と、こんな会話が出来るとは思わなかったわ。」

「ああ、本当に生きてて良かったよ・・・。」

「貴方、死なないんじゃないか？」

「まあ、その通りだな。」

「全く・・・本当に死ぬかと思ったのはこっちよ。」

「いやちよつと・・・自業自得でしょうに。」

「もう、私は勝つつもりで戦ったのに・・・。」

「まあ、兄貴もそう簡単に負けるわけにもいかんのよ。」

「・・・私が妹だって・・・信じられる？」

「・・・その話はしないようにしようぜ。」

「ん・・・私も、逃げてちゃいけないのにな・・・。」

「でも、《日常》を壊したくないっていう、お前の配慮なんだろう？」

「確かに、それが一番の理由ね・・・。」

「なら俺は、いつまでも待ってやるぞ？」

「うん・・・ありがとう、兄さん！」

その時の笑顔は、年相応の可愛らしいものであった。

「じゃあ、もうそろそろ寝るか・・・。」

「うん・・・ええ、そうしましょうか・・・。」

「いや、口調そのまま良かったろ。」

その声は、届くことは無かった・・・。

朝起きて、横に誰かが居たのは気のせいだ。うん、何も居ない何も見てない・・・。

学校

「はくい、皆さん！この方が、特別講師さんです！」

「この度、特別講師として参上いたしました。」

日本国防軍対魔道師専門部隊・大尉【弧普こふ 蒼真そうま】だ。」

「皆さん、この方は解放術のプロフェッショナルですからねえ。沢山学んでください！」

「一限目は、座学から入る、準備しておけ。」

彼は部屋から出て行く・・・ところで、俺に目で合図した。

(外、出る)

俺は教室の外に出る。

「・・・中庭。」

俺は頷いた。彼も解放術で中庭へ向かった。

「・・・行くか。」

俺も続いた。

「さて、久しぶりだな。」

「ああ、久しぶりだ。」

「・・・ふふ、貴様の前でこんな態度で居る必要は無いか！」

「ふふ、いや相変わらず壮健そうで何よりだぜ、ソーマ。」

「そんな神様みたいな名前じゃないんだがな。シヨ。」

「どっちもどっちだろ。ところで、対専はどうだ？」

「ああ、相変わらず酷い職場だよ。そっちは？」

「こっちはガチホワイト企業だからな。」

「はあ、軍つてのは残業手当でないしな・・・きついんだよ・・・。」

「こっちは軍じゃないし。しかも働きに応じて給料が変わる制度だからな。」

「・・・何でこんな生々しい話になったんだよ・・・。」

「お前が始めたんだろ？自分で悲しい話に発展させやがって・・・。」

「はあ、しかもこんな教員の真似事だなんて・・・。面倒くさい・・・。」

「おいこら、それクラスが聞いたら泣くからな。」

「まあ、精々頑張るさ。」

「おう、今日のことは後で対専の笑い話にしてやるからな！」

「ん・・・？つておーい！！ちよ、まって、それだけはー！！！！」

「んじや、頑張れよ。ソーマ。」

「ジョー！！ジョー！！！！ジョジョー！！！！」

「勝手に人間止めてろ。」

まあ、楽しみにしとくか・・・。

一 限目

「ではまず、実戦的な解放術というものについて学習しよう。」

生徒全員が好奇心に満ち溢れた目で彼を見ている。・・・3人を除いて。

(ふふ、どこまで教える？た・い・い？)

(蒼真さん・・・結構無理してますね・・・)

(・・・写真でも撮っておいてやろうかな？)

「まず、実戦で一番大切なことは、割り振りを工夫すること。」

・・・ではないのだ。」

「なっ!?」「そうなの!?」

(ふうくん、どうせフルバーストの効率的な運用とでも言うんでしょうね？)

「一番大切なことは、フルバーストの効率的な運用だ。」

((ほらね。))

「ちびちび全部のスキルに割り振って、大した効果が得られると思うか？」

教室が静まり返る・・・。

「そうだな・・・防御力を完全に無視した脳筋になる。攻撃力を完全に無

視した風になれ。速さなんて完全に無視した壁になれ。とまあ、そういう極端な強化が大切だ。」

「大尉、質問いいですか？」

「どうぞ。」

清輝美麗が質問をする。

「フルバーストをすると、ノーマルもしくは、他箇所の強化には時間が掛かると存じています。その戦法ならば、即座に攻撃タイプを転換させることが不可能になると思うのですが・・・。」

「あくまでこれは、実戦的な話だ。本物の戦場で魔道師と1対1になつたら、勝てる確実は限りなく0に近い。」

（いや、お前は勝てるだろ）

「戦場では、基本的に2人1組で行動する、防御力をフルバーストした者と、攻撃力をフルバーストした者だ。そのように、役職を固定することで、効率的に立ち回ることが出来るんだ。」

「本物の戦場・・・。」

「お前ら、元寇は習つたろ？戦場では、1対1なんてのは自殺行為なんだよ。」

「集団戦法・・・？」

「その通りだ。これは戦争の基本だぞ。：つてこれはあまり今とは結びつかないな。では今度は、1対1の必勝法を教えてやろう。」

またもや、生徒達の目は好奇心に溢れた。

「まず1対1の基本だが、相手に隙を作らせることだ。えーっと、しよー・・・じゃなかった天城くん！」

「はい？どうされました？」

「相手に右手で殴って、ダメージを与えたい。どうする？」

「はい、左手で殴ります。」

それを聞いた生徒は、笑いに包まれた。

「あ、天城くん、今は右手でダメージを与えるんだよww」

「ふふ・・・先生の話を聞いてたww？」

「はあ、お前らこそ聞いてたのか？今は隙を作る話をしてるんだぜ。」

生徒の笑い声が止まった。

「右手で殴ったら、確実に防がれるだろう？隙を作るには、意識を他のところに向ける・・・ってことが大切なんだ。」

生徒達は、真剣に聞く体制に入っている。

「だから、左手で殴ることによって、意識をそちらに向ける。後は、僅かな時差で右手で敵を打つ。・・・まあ、単純な回答だが、これしか思いつきませんでした。どうでしょう大尉？」

「うむ、及第点だ。意識を他に向けさせるか・・・なかなかいい回答だぞ、少年。」

「ありがとうございます・・・。」

大尉の授業は、素晴らしい物だった。・・・らしいぞ。他から見れば。やはりソーマのあのキャラは滑稽だな。よし、対専の笑い話にしよう・・・。

「2限目は実技だ、遅れないように運動場へ来い。」

1限目は、無事に終了したのであった・・・。

IV・第三話

「実習を始める！お前らのレベルは、新人戦の試合結果を見て大体把握している。流石1年で上級者が集められたクラスだ。上位を独占している。」

(あいつが人のことを褒めるとは・・・)

「しかしだ：。皆、基礎的な動きが身につけていない。なんと言うべきか・頼り切っているんだ、「解放術」に。」

生徒達は皆、あまり理解できていないようだった。

「解放術とは、あくまで自分の持っている能力で割り振りしたり、限界を突破させて強化したりする物だ。だが、運動神経が良くなっただけでは相手に勝てない。大切なのは、強化した身体をどのように効率よく使用するか？ということだ。」

皆、解放術の本質を思い出したようである。

「解放術と魔術の決定的な違いは、基礎的身体能力が深く関わってくるといふことだ。魔術は文章を読めば強大な攻撃が出来る。だが解放術は、強化した身体に剣術や体術、射撃能力等の技術的なものが深く関わってくるんだ。それに加えて、基礎的身体能力が高いほどある箇所から他箇所への移行値も大きくなる。」

実戦経験者の言葉に、誰もが息を呑んだ。

「ではそれを踏まえて、戦う術を教えてやろう。天城、有里美！」

「はい」

「ではまず天城。」

「はい・・・!!」

大尉はいきなり剣を振ってきた。俺はそれを、素手。しかも片手で防いだ。

「まさかいきなり来るとは・・・。」

「ふむ、いい反応速度だ。と、まあこのように・・・ああ、そういえば今何をしたか教えてやれ。」

「はい、今のは唯の体術です。解放術なんかではありません。」

生徒達は、驚きの声を上げた。

「高速の剣撃は腕に相当な負荷が掛かります。それは、地面へ上手く吸収させます。そして素手で掴んでいる点ですが・・・まあこれに関しては、刃に触れなければなんともありません。」

「そうだな。地面への逃がし方をもう少し詳しく。」

「はい。体術の基本は、受け止めることではありません。受け流す事です。衝撃を逃がすことが出来れば、大剣だって余裕で受け止められます。というか最早此処から先は感覚的な問題なので何とも言えません・・・。」

「そうか。このように、体術とは習得すればかなり万能のものになる。特にタンクにとってはかなり使えるものになるだろう。」

生徒達は目の前で見せられた超人的な技術に、感嘆の声を上げていた。

「では次は、有里美！」

「はい」

杏が返事をした瞬間、大尉は銃弾を放ってきた。

「はっ!!」

それに杏は、普通の人では視認出来ないくらいの速さで銃を構え、銃弾を打ち抜いた。

「「「なっ!!」」」

「流石だな、杏。」

「ふふっ！これに関しては、最早誰にも負けるつもりはありませんからー！」

「見事だ。ちなみに今、解放術は？」

「使用しませんでした。基礎的身体能力です。」

「素晴らしいな。これをフルバーストしたら、きっと恐ろしいことになるんだらう？」

「ええ、したことはありませんが・・・。」

「・・・とまあこのように、基礎的身体能力というのは、とても深く関わってくるんだ。」

生徒達は、好奇心に溢れた目で大尉を見ていた。

「まあ、簡潔にまとめると・・・頼るな。」

実践経験者の言葉は、どんな教本よりも、彼らを成長させてくれるのであった・・・。

IV・第四話

「ほう。エンテントが国連に加盟か。」

俺は朝流れてきたニュースを見て、そう呟いた。

エンテントとは、元イラクと元イランの併合国家である。

戦争をして併合したわけではなく、両国同意の下である。

何故戦争をしていた国がそんなことになったか？

それは、India Empire（以下、インド帝国と記させて貰う。）の影響である。

インド帝国は錬金系術式（以下、錬金術と記させて貰う）の開発国家である。

錬金術とは読んで字の如く、卑金属を貴金属に変換する術式のことである。

インド帝国はそれだけに全力を注ぎ、今では石を鉄に変えられるまでである。

インド帝国は錬金術で作った金属を、他国に安く売るということを繰り返していた。

そうすれば、モノカルチャー経済のアフリカ辺りは破産なわけで。

一旦それは置いておこう。そして強力な魔道師・膨大な軍資金を得たインド帝国は、植民地 獲得へと動いた。

（1話辺りで、植民地のこと書いたけど、覚えてますか？）

植民地獲得で、初めに落ちたのが「パキスタン」だった。

これが、『印国西方進軍』と呼ばれている。

また話が逸れてしまうが、インド帝国は鉱石と石油の貿易で Arabia Coalition（以下、アラ ビア連合と記させて貰おう）とこうろを確立していた。条約も。

それが『沙印航路』と、『沙印年間規定量貿易条約』である。

前者は兎も角、後者を説明すると余裕で1万文字を越してしまうため、掻い摘んで話す。

この条約は要するに、貴方の国は1年間でこれくらい私の国に輸出してくださいという条約 である。それに加えて、私の国からしかそ

これは輸入しないでくださいという条件付である。

そちらの国も有り余るほどの産出量なのだから、安定して得られるんだよ？

という条約である。要するに両者が得をする。

語弊があつた。損はしないといった言い方が適切であろう。

おや、だいぶ話が逸れてしまった。

んで、その後予想通り、インドはイランに進軍した。

しかも戦争中なので弱ってるだろう。という考えで、イラクにも進軍した。

パキスタンを一方的に蹂躪したインド帝国に勝てるわけがない。

という経緯で、2国は併合・否、その当時は協力という名目だったが。

当然、その程度の兵力では足りないため、アラビア連合からも援軍を貰った。

え？条約があるって？

気にするな読者様。あくまで条約を結んだのは、サウジアラビア自治区だけだ。

アフガニスタン自治区とかは、完全に条約干渉外だ。

こらそこ！ご都合主義とか言うな!!（まあ、そうだけど）

苦戦を強いられたインド帝国は、自国の領地に帰っていった。

イランとイラクが正式な併合国家になったのは、イラクの王の娘がイランの皇太子と結婚したことにある。併合国家になったのが色恋とは、滑稽である。

おや、随分話が長引いてしまったな。

あえてもう一度言わせて貰おう。

こらそこ！ご都合主義とか言うな（笑）

ちなみにインド帝国はその後、中華民国に宣戦布告なしで奇襲を仕掛けて国連に違法とみなされ、鉱石の国外輸出を制限された。笑える。

要約しよう、エンテントとは、イラクとイランの併合国家である。

「ほう、何があったのかしら?」

隣で朝食を取っていた妹が話しかけてくる。

「どうやら完全な中立国家になる『テヘラン憲法』を発布したことで、国連加盟権利が謙譲されたらしいぞ。」

中立国家になるのは、国民の反対のせいで、全然話が進まなかったらしい。

「ようやく長年の努力が実を結んだのね。」

印国西方進軍が2015年だから・・・おおよそ50年ぐらい掛かったか。

「50年の軌跡・・・泣けてくるな。」

「そんなことより兄さん、そろそろ時間よ。」

気が付けば、結構時間は迫ってきていた。

「そうだな・・・っと、元帥から報告あったぞ。」

「何かしら?」

俺は、昨日伝えられたことを紫苑に伝える。

「エンテントに支部が置かれるらしい。」

「・・・随分タイムリーね。」

中立国家になったことによつて、エンテントから直々に支部設立要請がきたらしい。

「で、それだけ?」

「ああ、それだけだ。悪いな、そろそろいくか。」

俺達は、学校に向かう。

「兄さん、インドの規約違反（中華民国進軍）っていつだっけ?」

「2025年だ。二重の日光だぞ。テストに出るから覚えとけ。」

「うん、ありがと。」

「今回出番ないやん。章タイトル詐欺やん。」↑大尉

IV・第五話

無事、学校には遅れずに着くことができた。

「ふう、間に合ったな。」

僅かばかり、走ってきてたりする。

「間に合わなくなったら解放でもなんでもすればいいのよ。」

堂々と校則違反推奨してくる我が妹。

「おい、それは校則違反だ。」

「兄さん、知らないの？ばれなきや犯罪じゃないのよ？」

「はいはい、そうですか。」

聞かなかったことにして、軽く受け流す。

「はいはい、そうなのよ。」

「あつ、天城様！おはようございますー！」

見慣れた少女、杏と遭遇した。

「おう、おはよう。今日も元気だな。」

「ふふつ、ありがとうございます！でも・・・」

杏は、紫苑の方に視線を向ける。

「やはり貴方が天城様と同棲しているというのは、どうにも気に入りません。」

なんか、毎朝の恒例となったやり取りである。

「同棲だなんて・・・私達は兄弟よ？」

「そ、そんな信憑性もない情報で・・・」

「ほれ、お前ら。そろそろ時間だぞ。」

これはこうやって止めるに限る。長引いても誰も幸せにならない。

「ええ、行きましょう。」

「ちよ・・・ああもう!!」

うん、おとなしくなってくれたようで何よりだ。

「さて、今日は軍用格闘術について行う。」

大尉の久しぶりの出番だ。(メタ乙)

「今回教えるのは、護身術だ。攻撃に使用するものではない。」

護身術か……。実用的だな。

「日本国防軍が採用している護身術は、なるべく少ない力で。ということが意識されている」

合気道の考え方か。

「よって武器なんて使わないし、解放術なんて以ての外だ。」

・・まあ、それだと日本国立高等学校レベルⅢの教育方針に合わない気が。

「なかには解放術の勉強をしないことに対して不満を持つものも居るだろうが……」

だが、全員は好奇心に満ち溢れた目で大尉を見ていた。

「おや、いないのか。流石、勉強に取り組む姿勢が違うな。」

(まあ、あんなに分かりやすい授業をしたんだから、皆期待するだろ。)

「余談だが、俺の苗字を見て気付いたものも居ると思うが、俺は警察庁の家の者だ。」

格闘術は警察庁の専売特許。これだけには自身があるから期待しておいてくれ。」

ますます、生徒の期待度が増した。

「では……朝田君!」

「は、はい!」

おつ、緊張してんな。がんばれ、若人よ。

「君はダガーが得意だったな。」

「は、はい!近接時は屢使用しております!」

かっくかくな敬語だな。まあ、がんばれ。

「では、俺にナイフを当てて見せろ。」

そう言っつて、大尉はナイフを差し出してくる。

「こ……これっつて!」

【スミス&ウエツソン CK5TBS】果物ナイフなんかではない。

ガチの特殊部隊のナイフである。

「た・大尉さん、さすがにそれは!!」

いたんだ、先生。

「ほ・本当によろしいのですか?」

「ああ、問題ない。・お約束じゃないから安心しろ。」

「お約束・?では・行きます。」

朝田が構えを取った。

「ふっ!」

一気にナイフを突く。鋭い突きだ。

・が

「え?」

朝田は、呆けた声を上げた。なぜなら・

「甘い。」

大尉を捕らえていた筈の視線が、一瞬で天井に変わったからである。

それを認識した頃には・

「ぐあっ!」

既に、背中に衝撃が入っていた。

「これが護身術だ。」

「「「」」」」

(大人気ないな。)

(大人気ないわ。)

(大人気ないですね。)

(・なんだろう、俺に3ダメージはといった気がする。)

「いったた・痛・」

「これが護身術だ。皆も習得すれば、ナイフを持った素人ならば、片手で締めれるようになる。」

生徒の皆は、超人的な技術に目を見開いた。

流石だよ、警視庁出身大尉。

IV・第六話

【TATユナイテッドワークス】

さて、それは一体なんなのであろう？

「はあ、いつまでこんな廃れた仕事しなきゃいけないのかしら？」

玉座に座る彼女。随分と聞きなれた声である。

「■■■■には、■■■■生活してたとかかって言っただけど・・・。」

一部、聞き取れないところがある。

「そんな楽な仕事が出来たなら・・・どんなに良かったかしら？」

■■■■を楽とは・・・。彼女は一体どんな生活をしてきたのだろうか？

「ほんと、■■■■には嘘ついてばかりね・・・。」

仕方ないと言えば仕方ないのかもしれないが・・・。

「おやおや、廃れたとは酷いですな。」

やってきたのは、初老の白髪の男性だった。

「本当のことですよ。WN×WRと従業員を比較してみなさい。」

「おっと、そこと比べられては敵いませんな。」

なんとたつて、ディステイニールランドとこの小説の視聴者数を比べるような物だ。

「で？何で私をこんなところまで呼び出したのかしら？寒いだけだ。」

なんとたつて、此処の本部は【スヴァールバル諸島】の奥地にひっそりとあるのだ。

「それに関しましては、大変失礼いたしました。」

「さっさと用件を言いなさい。」

「どうやら、相当面倒くさかったようだ。苛立ちが伺える。」

「では、用件に入らせていただきます。それは、貴方のシヨウ・アマギへの敗北についてです。」

彼女の方が、ピクツと震える。

「こちらとしては、アリベルト・ファイズ殿に次皇帝を務めていただきたかったのであります。幸い、貴方の過去の功績から見て弾劾はありませんが、大変残念な結果となりました。」

「・・そうね。それについては詫びるわ。彼の固有魔術を把握し切れなかった私の失敗よ。」

おとなしく失敗を認める辺り、彼女の本心が伺える。

「ですが、シヨウ・アマギと同居というのは大変良い成果を得られたことと思います。」

「同棲とは言わないのね、貴方は。」

「どちらでも大して意味は変わらないでしょう。それでは、本題へ戻ります。シヨウ・アマギ

との同居生活で得られた情報を小さなことでもいいので、必ず報告するようにしてください。」

「貴方・・あくまで私はこの機関の代表取締役なのよ。それなのになんで命令されなくちゃいけないのかしら。」

「今更ですね。任務を果たせなかった場合、弾劾もありえるのですよ。」

「おお、恐い恐い。」

「まあ、貴女に限ってそれはないでしょうが・・。」

「まあいいわ。任務は果たすわ。報告は毎晩8時には飛ばすわ。」

「了解いたしました。御武運をお祈りしております。」

~~~~~

《TATユニテッドワークス》

T↓Transcendent 【超越者】

A↓Antigovernment 【反政府】

T↓Thrive 【栄える】

ユニテッドワークス↓連合組織

意識↓栄えている反政府の超越者連合組織

現段階では、謎に包まれている組織。どうやら、彼女が代表取締役らしいが……。

## IV・第七話

「さて、実に2日間に及ぶ特別授業はこれにて終了だ。」

特別講師の役目が、後一限程で終わろうとしていた。

「君達にこの2日間で沢山得られたものがあれば、私も嬉しい。」

得られたことならば、沢山あるだろう。対専の現役兵士の講義を直に聞けることなんて、ここに入らなければ経験できないことなのだ。

「さて、では最後は模擬戦で幕を締めようと思う。」

模擬戦か……。この2日間の成果を確かめるのには、最善な方法だと思う。

「ルールは2対2だ。私が教えた【実際の戦場】というのを意識して戦ってみろ。」

たしか、実際の戦場は2人1組で動くんだったな……。

「さて、ではペアを組みたまえ。しっかりと役職を意識するのだぞ。」

瞬間、3人の少女の目が輝いた。……というか鋭くなった。

「天城様！私と組みましょう！きっと私達ならば相性抜群です！」

（何かもう・様付け許可しちやってるけど。いいのか？）

「さて、兄さん。私と組みましょう。この2人なら最早チートレベルよ。」

（だろーうな！地球最後の兵器2人のペアって！）

俺は、何も言わずに彼女らの視線を受け続ける。

……あれ、さっき3人って。

「あ、あの、天城さん！私と一緒にやってみませんか？」

（マジか！何かまた一人増えたぞ!!うむ、最善策が見つからん。）

前回、これが最善策だ！とか思ったら、見事に失敗したしな……。よし！じゃあ、じゃんけんでもして公平に決めようじゃないか！」

「は？」

「あつ、はい。まあ、おとなしくじゃんけんしてくれませんかね？」



「ふふ・・仕方ないわね。」

「天城様のお望みとあらば！」

「では、がんばります！」

3人が、戦闘体勢に入った。うん、争うところ此処じゃないよね、絶対。

「では・・・。」

結果は・・・

「ふふ、予想通りね。」

はい、家の妹が勝利いたしました。

「まあ、じゃんけんなんて相手の筋肉の僅かな動きを抑えてしまえば簡単なのだけれどね。」

なんだ、唯のチーターや。

「な！それはずるいですよ!!」

「お、同じくそれは卑怯だと思えます!!」

当然、こんな意見も出るわけで。

「あら、じゃんけんにそれが違反っていうルールはない筈だけれど？  
寧ろ私にはじゃんけんは運だ！とか言ってる人の気持ちから分からないわね。」

「はいはい、もう終わりな。おとなしく始めようぜ。」

「これが恐らく最善策。」

「むー！仕方ありません、天城様がそう言うなら鏡月様と組むことにしましょう。」

(ん・・ああ、確かに全員に様付けなら怪しまれることはないか・・。)  
「あ、有里美さん。よろしくお願いしますー！」

「はい、絶対にあの女を潰してやりましょう！」

「あ、あはは。平和に行きましよう。平和に。」

(平和なのって鏡月だけだよな。)

「全員、ペアは組み終わったか！では、始めに戦いたいペアは出て来い！！」

「どうやら、大尉が全員相手するらしい。まじか。」

「はい！」

最初に手をあげたのは、宇柔 峰玲と、又柔 峰燐の、宇柔家の本家と分家ペアだった。

「よし分かった。さあ、どこからでも来たまえ。」

戦闘が始まった。

「燐！速・フル。e—d4進行！」

「了解！」

「どうやら、タンクは分家の方らしい。指揮と攻撃を本家が担当するらしい。」

「ふっ！」

大尉の前まで移動していた本家が、彼に剣を振るう。

「ふん」

それを、彼は軽く受け流した。

・・・しかも素手で。

「なっ！」

まさか、剣での渾身の一撃が素手で止められたことに驚いているのだろうか。

「はっ！」

剣を、横に一閃する。

「ふん、当たらんぞ。」

「当てる気はないぞ。燐！」

本家は素早く剣を引き戻し、大きく跳躍して下がった。

「何を・・・なっ！」

本家が元居た場所・・・これからは宇柔と呼ぶ。

宇柔が元居た場所へ、又柔が突っ込んできたのだ。

「はっ！」

大尉へ向かって、強烈な突きを放った。

「ふっ!!」

「え？」

彼は、彼女の手首を掴み、腕を捻ってから後ろへ投げ飛ばした。

「痛っ!!」

「まだまだだ。作戦は良いけどな・・・なっ！」

なんと、彼女が飛ばされた後、上から宇柔が攻撃を放ってきたのだ。

「はあっ!!」

大尉は、それを横に回転して回避した。

「仕方ない！お返しだ!!」

彼は体を捻り、そのまま彼女へ回し蹴りを放った。

「弧普流体術三番・燕喰つほめくろい！」

燕喰：聞いたことがある。速度解放を一瞬だけフルバーストして、強烈な回し蹴りを放つ技だ。

これを大尉が使ったということは、2人は彼に解放術を使わせたことになるのだ。

ちなみに、回し蹴りは彼が剣で受け止めようとしたが、失敗に終わり吹き飛ばされた。

「お見事。良い連携だった。」

彼・彼女の連携を、大尉は褒め称える。

「まさかこの私に解放術を使わせるとは・・・素晴らしい成長だ。」

きつと、授業開始当初であれば、こうはいかなかったであろう。

「戦術的には素晴らしい。君達に足りないのは【気配を消す】ということだな。君（宇柔）の最後の奇襲は完璧だった。後、気配を消せていれば簡単に相手の首は狩れるだろう。」

首を狩るって・・・なかなか凄い表現をするんだな。

「君達のこれからの成長を楽しみにしているぞ。」

「はい!!」

まさに的確なアドバイスだった。

そこから大尉は何組ものペアを倒していき、的確なアドバイスをしていた。

「さて、兄さん行きましょう?」

「ああ、地球最後の兵器2人の力、見せてやるよ。」

さて、ちよつと真剣に行きますか。

## IV・第八話

「さて兄さん、始めましょうか。」

「ああ・・・本気は出すなよ?というかお前、解放術はどの程度使えるんだ?」

彼女の固有魔術は見たことがあるが、解放術を使っているところは、1度も目にしたことが無いのだ。

「大丈夫よ。少なくともあの大尉よりは上手く使えるわ。」

「おお、それは頼もしいな。」

「そこの2人!準備は良いか!!」

「はい(ええ)」

そうして、俺達の試合が始まった。

「さて。兄さん、攻120, 速150, 防30.

順 c | d 4 . . d | e 6 . . g 2 | 3 . . o u t .      t i m e . 1 ,  
5 s」

「了解。」

観客達には、彼女の指示が伝わらないようだ。

「:!!ほう。」

さて、俺は素早く敵左方へ移動する。

「一閃!」

さて、経過0, 375。なかなか計算どおりだ。

彼が攻撃されたことに気がつかないうちに、素早く敵後方へ移動する。

「二刀!」

経過前回+0, 375。完璧である。

この二回の攻撃に掛かっている時間は僅か0, 6秒。相手が気付くわけがない。

さて、俺は素早く敵右方へ移動する。

「三撃!」

経過前回＋0，375。やはり完璧である。

1秒もの間に彼は3回も攻撃されたのだ。即座な対応はかなり難しいだろう。

おっと、とうとう彼は剣を振ってきた。

1秒で気付いて反撃するなんて、流石プロというべきであろうか。

「だが。」

遅い。俺は敵前方へ動いて攻撃し、急いで下がった。

「ぐはっ!!」

1，5秒もの間に4連撃を加えられた彼は怯んだ。

「片手剣解放技・諸行無常の乱剣」

とどめに、後ろから迫ってきた紫苑の解放技が加えられた。

「くっ!!」

彼はそれを防ごうとするも、彼女の剣撃速度にはなす術もなかった。

「終わりよ。対専大尉。」

「ぐはっ!!」

彼は、なす術もなく倒れていくしかなかった。

「まあでも、あの1秒で反撃までもっていったことには素直に感心するわ。」

なんとという上から目線であろう。

「さて、良い指揮だったな。紫苑。」

「あら、ありがとう。私は戦場では指揮役が多いのよ。これが経験つてやつね。」

「ほう、やっぱり実戦経験者は違うな。」

「それは貴方にも言えることでしょうか？あの連撃は凄かったとしかいえないわ。時間も指定した時間に一切のずれが無かったもの。」

「それはそれは。どうも。」

まさに、戦場を駆け回ってきた者達の会話だろう。

「大尉は・・・アドバイスできる状態じゃないわね。」

「仕方ない。医務室まで運んでやるか。」

「じゃあ兄さん、よろしくね。」

「おう！……って俺だけかよ！」

さりげなく仕事を全て押し付けてくる我が妹。恐いわー。

「あ、あの……お手伝いしましょうか？」

「頼む！ぜひ！」

鏡月様、マジで天使。感謝します。

「あらあら、私達の相手が居ませんね。」

どうやら、杏たちの相手をする前に大尉はダウンしてしまったようだ。

「それなら私が潰してあげるわよ。」

「ふーん、いい度胸じゃないですか。」

「ちよ！待って待って。平和にいこう、平和に。」

本当、この2人は目を離すとすぐに喧嘩してる。

「仕方ありません。天城様の命令ならば止めましょう。」

「仕方ないわね。兄さんの命令なら止めましょうか。」

「あの……2人にとつての俺って何なんでしょう？」

「『将来の旦那様』」

「ああ……そうかい。」

もう、どう返していいか分からなくなってきたのよ、うん。

「あの……早く運んであげましょう？」

ああ、天使や天使が居る。

結論・鏡月が居れば何かと解決するんじゃないやね？

## IV・第九話

「さて、この授業どうやって締めましょうか？」

「それはもう・・・知さんにがんばって貰うしか・・・。」

「あ、天城様。凄い責任転嫁ですね。」

「はは、杏。そうするしかないのだから、俺は最善策を選択するのだよ！」

「さて、早く終わらせて帰りましょう?。」

うん。飽きてきてるな、こいつ。

「比木先生、どうしましょう?。」

「は、はい!!そ・・・そうですね!締めてしましましょう!!」

「すみません、お願い致します。」

「はい、責任転嫁完了。ほんとにこればかりは如何していいかわからんからな。」

「み、皆さくん!教室にも、戻ってください!」

え、さつきから気になってるけどなんでそんな声震えてんの?

「まあ、あんな戦いを間近に見たのよ。怖気づくの納得だわ。」

「ふむ・・・よく分からんな。」

「天城様は実戦経験者なので、きっと恐怖心はどうに無くしてしまってるんですよ。」

おいこら杏。俺は感情一部欠落者か。

「まあ、恐怖心が薄れてきているのは確かだな。」

「はあ、もういいじゃない。帰りましょう。飽きたわ。」

「やっぱ飽きてたんかい!知ってたけど!」

「・・・戻るか。」

「そうですね。」

「そうしましょう。」

・・・あれ、鏡月は何処へ?



「ふふ・・なかなか面白い試合を拝見させていただきました。」  
『そうですか。それはそれは。』

1 人校舎裏へ行き、通話する少女。

「あれが■■■■ですか。」

『その通りでございます。』

年端も行かない少女へ、老人は妙に敬ったような返答をする。

「彼女ともなかなか相性の良いことで。」

『ええ、彼女も大変気に入っておられます。』

「まさか、彼女が男性を気に入ることがあるとはね。」

『古来より、雌は強い雄に惚れると聞きますが。』

「まあ、なんにしろ上手くいって嬉しいう限りだわ。」

『その通りでございます。彼女を送ったかいがございました。』

2人は、決して名前を口に出そうとしない。

「では、繁栄と成功を願って。」

『はい。願っています。』

「気が向いたら連絡をよこすわ。」

『了解いたしました。それでは。』

そうして、通話が終了した。

「ははっ！面白くなってきたじゃないか！さて、絶対に君は我々のものにするよ!!」

彼女は、携帯を胸にしまい、行くべき場所へ向かった。

「皆、先刻は無様な姿を晒してしまい、申し訳なかった。」

大尉は、何事もなく復活したようだ。

そりゃそうだ。内乱のときに使った武器だったんだし。

「自画自賛ではないが、全員にそれなりのアドバイスはしたつもりだ。」

生徒達は、それに対し当然のように頷く。

「この短い期間で得られたことを、これからの学校生活に生かしていってくれ。」

その言葉は、特別授業の終わりを知らせるものだった。

「それでは、私はこれで失礼させていただきます。」

教室中は、拍手に包まれた。

その中、大尉は此方を一瞥し・・・

(内緒だからな！対専には!!頼むから!!)

・・・と、視線が物語っていた。

せめて最後までいい格好良く帰っていけばいいのに。

まあ、なんつーかな。

「お疲れ、大尉。またいつかどっかで会おうぜ。」

「できれば、次も平和なところで会いたいですね。」

「それまでにもう少し強くなっていればいいけれど。」

「し、紫苑さん。きつすぎます。」

本当に。

次も、平和なところでこうやって笑い合いたいぜ。

## TATユニテッドワークス V・第一話

反政府組織といっても、公にその存在を現しているわけではない。あくまで、国の選挙に介入したり、内乱や紛争。戦争に有利にことが運ぶように加担するだけだ。もちろん、他にも仕事はあるが。

「全く・・・存在意義を感じない組織ね。」

彼女は自分が属する組織の筈なのに、根本的にそれを否定した。

「なかなか・・・辛辣なお言葉ですな。」

「だって本当のことじゃない。この組織って、ただWN×WRに嫌がらせするだけの組織でしょ?」

「否定は出来ませんな。」

「この組織の行動は、常にWN×WRに事が不利に動くようにしている。」

「ねえ、アルスファント?」

「どうされましたか?」

「もう一人の潜入捜査官はどうなってるの?」

「順調でございます。彼女曰く、あのキャラを演じるのは大変とっておられましたか。」

「そう。キャラ作りに関してはどうでもいいわ。」

せつかく答えたのに、彼女の答えはあっさりしたものだった。

「左様でございますか。」

それを受け止めるこの老人もどうかと思う。

「エンテントに動きは?」

「特にございません。強いて言えば、WN×WRのエンテント支部が設立されました。」

「流石・・・こんな辺鄙な土地に小さい本部しかないこの組織とは違うわね。」

彼女は、相当従業員数の少なさを気にしているようだった。

「世間に公表してはならない組織故・・・ご容赦ください。」

「それに関しては妥協してるわ。」

僅かな沈黙・・・。

「それで、情報部の人員不足はどうなったの？」

「どうしようもありません。」

「救いようが無いわね。この組織。」

TATユナイテッドワークスには、7つの部署がある。

- 1つ目は、戦場へと向かう《実動部》
- 2つ目は、全てをまとめる《総務部》
- 3つ目は、人事を担当する《人事部》
- 4つ目は、潜入捜査をする《潜入捜査部》
- 5つ目は、情報統制・情報収集をする《情報部》
- 6つ目は、財務を担当する《財務部》
- 7つ目は、兵器開発の《開発部》

「相変わらず・・・家の組織は脳筋ばかりで器用なのがないのよね・・・。」

「脳筋とは分かりかねますが・・・情報や財務が少ないのは確かでございます。」

「家には弱い奴つてのがないから、捨て駒つてのも出来ないのよね・・・。」

「作戦の幅が狭まります。」

彼女の言葉に、老人は現実的に返していく。

「・・・貴方と話していても面白くないわね・・・。」

「左様でございますか。」

「まあ良いわ。もう時間ね。報告はこれまでよ。」

「ほとんど雑談でございましたが・・・。」

「硬いことはいいのよ。」

「左様でございますか。次回はもう少し真面目な報告を期待しております。」

「はいはい。じゃあねく。」  
そう言つて、通信は切れる。

「この報告、本当に何の意味があるのでしょうか・・・？  
はあ、もう一人の報告に期待しますか・・・。」

老人・・・彼の名前は【アルスファント・フェンリル】

どうやら、大雑把な王様の世話が大変のようだ・・・。

## V・第二話

「天城くん。君は現在活動中のテロリストを幾つ知っているかね？」

唐突な常識クイズである。そうだな・・・

「中東の組織は【インペル・ミツション】【アローン・オリジン・ター  
ン】【ハーメルン】

NSAの方は、【ホーリー・ラストイン】【ヘル・ボーン】ですね。他にもサイバー系も含めれば、相当な量が存在します。」

「ああ、その通りだ。」

・・・一体なんだったんだ？

「その中でも、一切その存在を世に知らせていないものがある。」

「世に知らせていない・・・？」

「ああ。その名は【TATUナイトッドワークス】」

・・・確かに聴いたことの無い名だ。

「世に知られていないのに、元帥はどこでその情報を？」

「情報部。またまた面白い情報を掴んでくれてね。」

・・・最早優秀を通り越して恐ろしいわ。

「それで、自分にその情報を提供してどうするのですか？」

「どうやらその組織は、相当こちらが不利になるように動いているよ  
うだね。君に被害が及ぶかもしれない。警戒を怠らないようにして  
くれ。」

「了解いたしました。」

「ちなみにこちらは、本部も構成員も規模も一切情報をつかめていな  
い。」

おや、家の情報部でも出来ないことはあったのか。

「名前だけ流れてきたということですか・・・。」

「その通りだね。おっと、もうこんな時間か。では、警戒を怠らないよ  
うにね。」

「はっ！了解いたしました！」

その言葉を最後に、通信は終了した。

「TATユナイテッドワークスか・・・」  
聞いたことも無い名に、警戒を強めることを強いられた。

「あの馬鹿情報部が!!何情報漏らしてんのよ!!」

「申し訳ございません。しかし名前だけです。問題ありません。」

少ししい訳じみている気がする。

「貴方・・・ダムに小さな穴が開いたらどうなると思う?」

「管理人が修理業者を呼ぶことになります。」

「そういうことじゃないのよ!!」

彼の滑稽ともとれるその返答に、彼女はつい大声を出してしまっ  
た。

「冗談でございます。大きな穴になり、決壊致しますね。」

「その通りよ。あの情報部はその僅かな情報から全てを暴き出すの  
よ。」

「もしもの時はこの本部ごと爆破してしまえますか?」

その落ち着いた口調とは裏腹に、恐ろしいことを考える物だ。

「まあ、もしもの時はそうするわ。どこに引越すつもり?」

「本当に実行するのであれば、トリスタンダクーニャに引越しま  
す。」

「・・・ふざけているのかしら?」

「いえいえ、本気でございますよ?」

彼の『いえいえ、本気ですよ』が、煽っているようにしか聞こえな  
い。

「まあ、そうなる頃にはもう終わっていて欲しいわね。」



「それは貴女様の努力次第でございます。」

「人任せなのね。」

「この組織は貴女様のために作られたものですので。」

「そう・・努力はするわ。」

「では、ご健勝をお祈りしております。」

「はいはい。じゃあね。」

「ふうん。TATユニテッドワークスねえ。」

暗い部屋で、1人男は笑う。

「いいよ、潰してあげるよ。そっちは天城くんが欲しいらしいけど・・。こちらにも全力で奪いにいかせてもらうよ。」

彼の手には、1本の注射器が握られていた。

「さて、コイツを使うことはあるかな?・・信用してるよ。天城くん。」

## V・第三話

「さうて、今度は何を始めたんだい？」

「貴方様には関係ありませんな。」

彼らはまるで友達のように会話を進めていく。

「いや、あるでしょうに。ウチの天城くんを如何してそんなに欲しが  
るんだい？」

「詳細については黙秘致します。」

ちなみにこれは通話である。実際に会って会話しているわけでは  
ない。

「ふうん。じゃあ彼女が欲しがったのかな？」

「その通りでございます。内乱に行かせた介がございました。」

「君たちの目的はWN×WRに邪魔をすることなのかな？」

「黙秘致します。貴方にお話すると碌なことになりませんので。」

「おっと、信用されていないね。でも・・・」

彼は声のトーンを僅かばかり落とし、

「こちらに直接喧嘩を売ってきたら、すぐさま潰してあげるからね？」  
「肝に銘じておきます。」

それに対して相手は、一切怖気づく気配も見せない。

「じゃあまたいつか。機会があればお話しようね。」

「迷惑でございます。二度とご遠慮していただければ助かります。」

「じゃあねー！」

相手の言葉に一切耳を貸さず、通信を一方的に切ったのであった。  
「全く・・・変わりませぬね。」

天城達は、絶賛授業中である。

「この世には、『核兵器相当術式』と呼ばれるものがあります。それは、20人以上の魔道師を集め、展開に1時間以上を要するという脅威の術式です。」

核兵器相当術式……。これによって、莫大な費用がかかる核兵器は放棄されたのだ。

「この世には現在、10の核兵器相当術式が存在しています。

【パーマネント・ディサピランス】、【ゼルク・ディストーション】

【ネクサス・ウィザー】、【リバイブ】↑成功例無し。

【クリエーション・ルーイン】、【ゴースト・アーミー】

【キング・マージン】【山紫水明】【森羅万象ノ理ニ叛】〔unknow n〕〕

「先生。unknownとはどういうことでしょう。」

生徒会長妹が明らかにおかしいところに興味を持った。

「はい。それはWN×WRに所有権がある術式で、理論も何もかも公開されていないのです。」

「名前に関してはどういうことなんでしょう?」

「名前に関しても、WN×WRが命名を許さなかったため、『unknown』という形式が取られているのです。」

「そうなのですか。分かりました。」

随分と食いついていったものだ。流石優等生。

「兄さん兄さん。その情報くれない?」

「阿呆か。最高機密だぞ。」

「えへ。そんな硬いこと言わないでよ。」

「それはどういうテンションなんだ……。じゃなくて、絶対に駄目なのは駄目なのだ。」

でもあの情報、金にしたらいくらになるのかな……

多分、16桁はいくな……。

「末恐ろしいな……。」

「何か言った？兄さん？」

「いや、WN×WRの恐ろしさを身にしみて感じただけだ。」

俺、そんな組織に何年も養われてたのか……。

「何なんだろうな……地球最後の兵器って……。」

俺は清清しく晴れた空を見上げ、そう呟いたのであった……。

授業終了後

「なあ紫苑、結局【地球最後の兵器】って何なんだろうな？」

「さあ？私も全ては知らないわ。でも……。」

でも……？

「対素と亜素……両方取得なんて、そんな人間自然に出来ると思う？……ってことよ。」

「た、確かに……。」

「全てを知るの……誰なのかしらね？」

「来るさ。いつかきつと、全てを知る日が……。」

「その真実が、美しいものなら。それはきつと

最高の人生ハッピーエンドなんでしょうね。」

「ハッピーエンドか……。」

それが明かされる日は、未だ遠く……。

## V・第四話

その日、彼女は彼女が最も嫌う人物と話していた。

「貴女！貴女には次期当主としての自覚は無いのですか!!」

母は会話するといつもこうだ。

有里美家は政権を委ねられている家でもあり、他の評価をかなり気にする家なのだ。

しかも、この家の考え方なのか知らないが、飛び道具を使う兵士を酷く嫌うのだ。

そのため、銃しか使えない私は昔から家の恥として扱われていた。

「私は次期当主になることを承認したつもりは毛頭ありません。追い出したいのならば、家から追い出してください。貴女方の口癖だったでしょう?」

そんな家が、私に対する態度を変えたのはWN×WRに入団したのが原因だった。

7歳の頃に、政権分割家の間で会議が開かれたのだ。(と言っても唯のお茶会)

その時になんと、WN×WR元帥が出席していたのだ。

もうそうなったら、全ての家は自らの家を認めさせようと躍起になった。

しかし、元帥は「考えておきます」の一点張り。

時間も経ち、やっと忌々しい会議が終わると思った…。その時：

元帥が、私の前に居たんだ。

「また減らず口を！貴女はもう昔とは立場が違うのですよ!!」

回想に入るのも許されない。

「確かに。現在はWN×WR支部長(しかし休止中)です。それがどう

かされましたか？」

「今、有里美家で他に誇れるのは貴女しかいないのです!!どこへ行こうが貴女は家のもの。逃げるのは許されません!」

昔は『貴女なんて有里美家の恥です!』としか言われなかったのに。「申し訳ございません。支部長の仕事がございますので(嘘だけど)。」

「貴女には沢山やることがあるのですよ!!結婚相手だつて」

「そうですか。私より強ければ誰でも。」

その話になったら、私はすぐに電話を切る。

天城様のことも話せないし、どう答えてよいのか分からないのだ。

天城様は様付けで、元帥のことを様付けしないことに関しては、目を瞑って欲しい。

また私は、救われた日のことを思い出す。

私のところに来ていた元帥は、私にこう言ったんだ。

「君・・・全力を出したことはあるかい?」

謎の質問だった。全力・・・それ以前に、まともに戦った試しすらない。

「・・・ありま、せん。」

人と話させてもらったことも無いので、返答にも一苦労だ。

「そうか。よし、天城くん。」

そう言うと彼は、知らない男の人の名前を呼んだ。

虚無から出てきたのは、私と同じくらいの男の子だった。

男の子って呼ぶ理由は、天城様がこの頃は私より背が低かったから。

「・・・誰?」

「天城くん、この子と戦ってみてくれ。」

「了解しました、全力は出してはいけませんよね?」

「ああ。全力は止めておけ。」

その会話に、私は若干の苛立ちを感じた。

腐っても有里美家の血を引いている者だ。こんな男の子に負けるわけが無い。

「君は、銃が得意だな。」

「な・・分かった、の?」

「ああ、見れば分かる。ではこれを使うんだ。」

そう言っただけが差し出してきたものは【デザートイーグル】だった。・・まあ、その当時は銃なんだろうなく程度にしか分からなかったが。

「銃・・ほんもの?」

「ああ、本物だ。」

なぜかそれをもった瞬間、使い方が完全に分かった。私はリロードを済ませる。

「やはり・・彼女の血が。」

「かの、じよ?」

「元帥、もう開始しても?」

やはりこの男の子はどこか冷静だ。

「では、始めるぞ。」

こんな男の子に負ける筈がない!!そう思って臨んだんだ。

「始め!!」

私は始まった瞬間、彼に標準を合わせた。そしてすかさず打つ!!

しかし、彼は軽く避けてしまったのだ。彼の武器はナイフ一本。

彼にぎりぎりまで接近を許してしまう。

「ふっ!」

彼がナイフを一閃したのを、なぜか私は避けられたのだ。体が勝手に動いていた。

「はっ!」

そこからは、自分の体が自分のものではないようだった。

狙いを避けている最中に彼にあわせ、ためらわずに放ったのだ。

なんと、銃弾が彼の肩を打ち抜いた。

「え・・。」

私は動けなくなった。人を傷つけたのは初めてだったからだ。  
男の子も驚いたような顔をしていた。

私は動けなかったが、彼は打たれたのにもかかわらず既に動いていた。

首に感じた、冷たい感触。

「終了!!」

「はあ、はあ・・・。」

「まさか、傷を負うとは思いませんでした。生まれて初めてです。彼女は一体?」

「有里美さん・・・だよね?」

「はい・・・。」

私はその苗字で呼ばれるのが好きではないのだが・・・。

「彼のことを教えてあげようか?」

私は、すぐに頷いた。

「彼はな、世界最強の存在だ。詳しいことは教えられないが。」

「世界最強・・・?」

「ああ、その通りだ。」

そんな人に傷を負わせたと思うと、自らの強さを錯覚しそうになった。

「そんな人が・・・なんで?」

「そうだな。君、WN×WRに入らないかい?というか入って(切実)」

「え・・・?」

WN×WRの噂は聞いていた。なにやら凄い組織で、絶対に入るこ  
とが出来ない組織だとか。

「なんで・・・私が・・・?」

「君には大切な役割があるんだ。君が、世界の中心となるんだ。」

その頃の私には意味が分からなかった。

「ようするに、私達と一緒に世界を見ませんか?頂点で。」

「ちよう、てん?」

こんな酷い環境で育った私にはなじみ無い単語だった。



「私達に・・・力を貸してください。アン・アリミ。」

「な、なんでわたしのなまえを・・・？」

「貴女のかばん。しっかりと書いていますよ？」

そう言っつて、彼は微笑んだ。

この子の笑っているところを見たのは、これが初めてだ。

「わた、し・・・。」

初めて触れたやさしさに、私の頬を涙が伝った。

しかし、私の支配者がそれを許さなかった。

「杏!!何をしているのですか!!早く帰りますよ!!」

怒気を孕んだ女王の声が鳴り響いた。

「え、ご、ごめんなさいー」

「全く、よりにもよってWN×WRの元帥殿に迷惑を掛けるなんて!」

まただ。また、私は命令されるがまただ。

出来ることなら・・・

救って欲しかったなあ。

「お待ちを。アン・アリミ。」

私の中の、英雄が生まれたんだ。

「WN×WRは、目の前の優秀な人材は引き入れるまで逃がさないのですよ?」

「え・・・？」

彼は少し強引に私の手を引いてきた。

「杏！何をしているのですか！！早くしなさい！！」

「え・・・え・・・??」

私は、ただ困惑するしかありませんでした。

「アン・アリミ！私達と来てはくれませんか！！」

「杏！！」

「アン・アリミ！！」

私は、困惑し決断を迫られた。無意識に掴んだ手は・・・

「私を・・・助けてください！！！」

それは、私の渾身の叫びだった。

同時に、鳥籠は壊された。

「有里美家当主。アン・アリミは現時点を持って、WN×WRの支部長とします。」

「な!?!」

「文句があるならば・・・全力で奪いに行くまでです。」

当然、相手側に文句なんてあるわけが無い。WN×WRに入れるのだから。

「え、ええ！もちろんよ!!許可するわ・・・だけど、なんでこの子なのかしら?。」

「それは当然・・・」

「世界最強が望んだからですよ。」

「世界・・・最強・・・?。」

「おっと、話しすぎてしまいました。では私はこれで。」  
「いきましよう、アン・アリミ。」

私は、男の子に手をつかまれ、新たな世界へと踏み出した。

これが、私と英雄の物語だ。

英雄だからさ・・・

「おう、おはよう。杏。」

失いたくないんだ。

「はい！おはようございます、天城様！」

鳥籠を壊してくれた彼を・・・

## V・第五話

6月10日 午前3時

「天城外務総統。エンテントへの支部設置の件ですが。」

彼は現在、本来の職【外務総統】の仕事をしている。

杏は最高兵士様！と呼んでいるが、実際本当に最高の兵士なのだ（地位的な意味で）

「了解した……ふむ。問題がいくつかあるんだな。明日までに解決させて送る。」

「はっ！ありがとうございます。ご多忙のなか、申し訳ございません。」

やはり、幼い少年に成人男性が遜っているのは、見ていて違和感を感じるものだ。

「大丈夫だ。任務には差し支えない。」

それは、彼の授業態度を見ていれば当然であろう。

彼らは淡々と業務の話を済ませた後、形式的に通話を終了した。

このように仕事の話をしているときの彼の姿は、いつもの彼とは違いなかなか大人っぽく、別の魅力を感じられる。……と、どこかの元支部長が語っていた。

「ああく。眠い……。はあ、もう3時回ってるじゃん。」

明日も学校あるのに、今まで溜めてきた分の仕事が襲ってきたようだ。

同日 午前5時30分

「つて、また電話かよ。ん……日本支部から？」

そういえば、新しい支部長になったんだった。（IV・第一話参照）

「おっはよー。翔、久しぶり〜！」

「おお、朝から元気だな。……もう朝なのか。」

気付けば時刻は、朝の5時30分を示していた。

「徹夜かよ……。まあ、慣れてるからいいけどさ。」

「ん？どうしたのー？翔、暗い顔してるよ？」

この無邪気さが、徹夜の疲れを吹き飛ばしてくれるようである。

「翔と杏ちゃん、全然あいさつにきてくれないからさー！」

「あ、うん。忘れもじやないじやない。時間が無くてな。」

「時間無かったのー？うん！翔は偉い人だもんね！仕方ない！」

彼女の優しさが、嘘の穢れを浄化していつてくれるようだ。

「でも翔、いつか遊びに来てねー！」

「おう、時間が出来たらお邪魔させて貰う。」

彼女とは形式的ではなく、友達と会話するかのように通話を終了した。

「さて、学校に行く準備するかな・・・。」

彼女の優しさに癒された後は、おとなしく現実を目を向けるのであった。

6月5日 午前3時

「では次は、開発部の新兵器作成についてのございます。」

彼女は、その頭痛を催すほどの文字列が並んだ資料を、次々と読み進めていく。

「了解したわ。疑問点。矛盾点が僅かに見えるわ。明日までには返信するわ。」

「ありがとうございます。それでは次の資料ですが・・・。」

これで処理したのはいくつめだろう。今日は兄も徹夜のようにだ。

「はあ、頭が痛くなってきたわ。」

「今日まで溜めてきた貴女様の責任にございます。」

当然のことだが、彼は辛辣な言葉を投げかけてくる。

「はあ、明日の学校は休もうかしら。」

いや、よくない。あのクビ支部長は何をしてくるか分からない。

「では、次の資料ですが・・・。」

「普通に仕事の話に戻すのね、はあ……。」  
やはり、重要な役についている彼女は寝る暇も与えられないのであった。

午前5時30分

「ふああ……。終わった……。」

「お疲れ様でした。これからも資料のチェックは、こまめによろしくお願い致します。」

彼は声のトーンも一切変えず、疲れている様子も一切見せることは無かった。

「貴方……。もしや機械なのかもしれないわね。」

「褒め言葉と受け取ってよろしいのでしょうか？」

「当然よ。疲れを感じないのかしら。」

「たった1日の徹夜で疲れるほど緩い鍛え方はしておりません。」

「どこことなく彼女への当て付けな気がしなくも無いが……。」

「はあ、すこしだけ寝ようかしら……。」

「30分ですが……。」

「気にしなくていいわ。じゃあ、おやすみ……。」

「はい、お疲れ様でした。」

彼の声音が最後に少しだけやさしくなったのは、きっと気のせいだろう。

疲労を溜め込んだ彼女は、その意識を手放した……。

結局、起きられずに午後から登校したのは、また別の話である……。

## V・第六話

「フェンリル、TATユナイテッドワークスの情報はどこまで漏れま  
したか？」

「確認出来ている分では、構成は最早すべて明かされております。重  
役は未だ。」

割と深刻化していたようだ。さすが世界最高機関というわけか。

「全く…。相手はかなりのペースで把握しているのに、こちらは相手  
側の情報を一切つかめていない。本当に、情報部の雑魚さ加減が伺え  
るわね。」

彼女の辛辣な愚痴…。そしてその事実は、淡々と告げられていった。

「全体的に小規模な上に、実動部などに力を入れております故。ご容  
赦を、潜入捜査部長。」

「私が容赦してこの機関が成功するならそうするわ。」

彼女の言葉は辛辣で…。そして、どこか本当に心配の念がこもって  
いた。

「辛辣…。でございますね。と返すのは、恐らく今は相応しくないと  
しよう。私めの失言を訂正致します。」

「まあ、私はこの組織が成功してくればそれだけで満足だわ。この  
組織は沢山の願い・想いが募って出来ている組織なのよ。だから…  
それを踏みにじるようなことはしないで頂戴。」

彼女は、自らの家族を思うような声でそう告げる。その言葉は、  
とても温かくて。

「…ふふっ。最善の結果を残せるよう、祈り、そして捧げましょう。」

「期待しているわ。【天城 紫苑】代表取締役。そして、フェンリル。」

彼の微笑に驚きを隠しつつ、期待の意を伝えた。

「容認体《ブリード》・解析72%か。」

彼は全てを知っている。しかし、前例が今回も繰り返されるとは限らない。解析というものは怠ることが許されないのだ。

「まったく・残しすぎだよ、研究成果を。どうせなら【亜素】も最後までやれば良かったのに。彼の悪いところはあきやすいところ・かな。」

ぶつぶつと独り言を呟きながら、淡々と作業を進めいく。

「【亜素】も【容認体】も放棄して……。いや、放棄はしてないか。ふざけた組織も作って。」

君は一体……。何が欲しいんだい?」

当然、その暗闇に答えが返ってくることなど無い。

「まあ、もし本当に勝てると思ってるなら……。鼻で笑ってこういつてやる

は!!」  
『おや?この長い間、研究でもサボってたかい?』ってな。はっはっ

「元帥、響いているのでおやめください。」

……しばしの沈黙。そして、

「何で防音じゃないんだよ!!」



かっこよく決めていた筈が。部屋の欠陥によって台無しになってしまった。

「ゴホン！まあ、攻めてくることは無いでしょうけど・・・。」

僅かばかり小声になったのは、恐らく気のせいだろう。

「これを使ってしまえば・・・崩壊するね、精神まで。」

「君の魔王を、我らの天使が喰らうぞ。覚悟しておけよ、フェンリル。」

## V・第七話

2002年、11月8日

そこは僅かに薄暗い研究所。人影が2つに、会話は無く。何かを書き記す音、試験管からする特有のガラス音。近代化を感じさせない、大量の紙媒体。

「ふあく。疲れた。ねえ、こんなことをして何になると思う？」

1人の方は作業を中断し、欠伸1つもう1人に問いかけた。

「目的があるわけではございません。ただ・・・」

「ん？ただ？」

「尻尾が見えれば、胴体も顔も見てみたくなる。それだけでございませぬ。」

遠まわしな表現。彼は見えない空を見上げた。

「ふくん。要するに唯の好奇心と。」

「科学者の動機にそれ以外ございますか？」

問いかけた方の彼は、心底満足そうな顔で、こう言う。

「ふふ、その通りだねえ。」

薄暗い空間に、緊迫した警報が鳴り響いた。

【unknown Occurrence!! unknown Occurrence!!】

「な・・・なんだ？観測計の方から？」

「何も無い・・・訳無い筈ですが。何も見えません。」

観測計の中を見ても、何も見えない。

「一応・・・この空気をそのまま取っておこうか。」

「そうしましょう。」

その後、観測計の中と普通の空気と比較して実験をした。

「目視では・・・差異なし。」

目視では、確認することが出来なかった。

「放電・・・差異無し。」

電気を流しても、反応する訳が無い。(どうやったかは聞くな。)

「ふむ・・・いろいろやったが。無理だな。差異無し」

「ひよつとすれば・・・。」

陽気な彼より落ち着いた男は、何か心当たりが在るような反応をした。

「どうしたんだい？」

「現在の目視できない状態を、変化しないと捉えるのではなく、逆にこれから何にでも変わると仮定すれば・・・。例えば、現在の状態を「未反応体a」としましょう。全ての物質に、aが宿っていると仮定します。aはそれぞれ、異なった形質を持っている。では、未反応体を奇数体と考えてみましょう。3aや5aがそれに該当します。では、偶数体を反応体と考えてみましょう。3a+5a||8aとなります。5a-3a||2aとなります。この未知の力を数式化して考えてみれば、簡単に分かります。」

「なるほど簡単だねえ。でも、未反応体が反応体になると、何かの變化が生じる筈だ。全てのものに宿っていると考えるならば、今何もしなかったのに變化が起きたのはおかしんじゃない？」

必死に記憶を呼び起こしているが、何もした記憶は無い。

「恐らくこの未反応体は、化学薬品などで反応するものではないでしょう。未反応体を反応させられるのは、恐らく人間。人間の体内にも、この未反応体があるはずです。」

「だ〜か〜ら！何にもした記憶は無いの！何で反応したのかねえ。」

流石のこの質問には、お手上げだった。

「これも調べなくては……。ふっふ……。これだから研究は止められない!!」

彼のテンションが上がったのは、あの薬を作ったとき以来だ。

「うん、その調子で前回も研究止めなくて……。」

「年を早さが二分の一になりましたね。」

これは、世界を変えた2人の研究者。

【アルファレム・オーデイン】

【アルスファント・フェンリ

ル】

彼らが受けた名声と……

苦痛と別れと。

## V・特別設定回（八話）

2003年、6月5日

【未反応体（仮称・亜素）の融合と有用性について。】

「ついに・・・遂に出来たぞ!!」

発見は2002年。1年掛からずに、亜素の規則性についての結果がまとまっていた。

「貴方との研究は・・・やはり楽しいものですね。こんな神の力に手を出せるとは。」

「誤った使い方をすれば、1時間で人類を滅亡させられるしね」

あくまでデータとして出ているだけで、いざやってみれば出来るかはわからない。

「2年後に、しっかり理論が確立させられたら、この【亜素】の存在を提唱いたしましょう。」

「じゃあこれからは、これの応用に入っていこうか。」

「ええ、そうでございますね。」

### I・亜素

【①亜素について】

視認することは出来ず。無害・無臭など、我々には感じ取ることの出来ない、大気中に存在している未反応体のことである。原子・分子・イオン等とは異なるため、電気を流しても熱を通しても一切の変化は見られない。これには、重量という概念が存在せず、密度と言う概念も等しく存在しない。特殊な方法で、大気中の亜素の割合を計測した結果、地点によって大きな変化は見られなかった。しかし、墓地や寺院は変化が見られたため、霊・魔的概念物質ではないかと考える。未反応体が反応を起こすのは、他の未反応体と融合したときである。もしくは、A地点からB地点への移動で、特殊な反応を起こす場合もある。

【②亜素の融合について】

亜素はそのままだと未反応体である。数式化して考えると、未反応体を奇数体。反応体を偶数体として表すことができる。未反応体の亜素は幾つもある種類があり、完全になくなることはないと言えるだろう。数式化して考えるというのは、亜素をaとすることだ。そうすると未反応体は $3a + 5a \parallel 8a$ となる。奇数同士を足せば、必ず偶数になるという考えた方を利用したものである。そして偶数体に変わると、事象変化が起こる。例えるならば、

8 a  $\parallel$  振動・大地【1—】

4 2 a  $\parallel$  風向変化【1—right】

※強弱は【1—, 1+, 2—, 2+, 3—, 3+】の六段階で表す。

ベクトル操作の場合、強弱の後『変則方向』を記す。

亜素の融合で変化するのは、環境・熱量・電力 e t c . . . など、変化の8割は、この融合によって行われる。

【③亜素の移動による変化について】

亜素は移動によっても、事象変化が起こる。人間の体内にも当然【亜素】は存在している。体内にある亜素を外に放出・もしくは物質に対し移動させることで、反応を起こさせることが出来る。体内にある亜素を、外に移動させ、外の亜素と融合させるのは外の亜素同士を融合させるのと一切変わらないため、この方法に関しては触れないこととする。もう1つの体内の亜素を、物質へ移動させることについてである。これは強度変化や材質変更をすることが出来る（今、某アニメの投影を思い出した方は、きっと私の同志です）。メインは強度の変更で、材質の変更は、本当に限られた範囲内で行うことが出来る。いい。

【④例外の亜素の融合について】

亜素の融合には、例外も存在している。亜素の融合により、身体強化することも出来る。これは外の亜素には干渉しない。体内の亜素

を使用し、移動して融合させ、その部分の肉体を強化するのだ。

## II・亜素反応の簡略化について

### 【①亜素反応の簡略化について】

3aや5aなど、亜素に番号を振り分けられるのは、あくまで紙面の上のみだ。我々の眼では亜素の種類を見分けることはできない。それ以前に、視認もできない。ならば、反応させるにはどうすれば良いのか。そこで利用するのが【展開式】である。展開式を詠唱し、反応を起こす。その反応を【魔術】と称し、その工程を【展開】と称する。

### 【②反応簡略・魔術の定義】

#### ・汎用魔術（公用魔術）

詠唱の特徴は、同じ単語を数回繰り返すところにある。一般的な、大気中の亜素を融合させ、反応を起こすときに使用する展開式。

例・【スパークル・スパークル・ザ・ライト・インバイト・トウ・スリープ】

【バーン・バーン・バーン・ファイア・トウ・インバイト・トウ・スリープ】

#### ・例外

体内の亜素を物質に移動させる場合、詠唱は必要としない。

他にも、例外はあり。展開式については、今だ不明点が多い。

※魔術の正式名称は、亜素反応。

展開式の正式名称は、亜素反応簡略式。

## V・設定補足回（第九話）

①

Q・亜素の割合が墓地や寺院などの霊・魔的概念に近い場所が多いけれど、他の場所では目立った変化が無い。…このように解釈すると、人間そのものが持つ亜素の量は全員均一化されてしまうのでは？

A・人間そのものが持つ、亜素の量が均一化される。その通りです。この作品において魔術とは、自分から火を出せたりとかそういうのではないんです。あくまで、外の亜素を操作し、風を起こしたりとか、地形を変更したりとかそういうのです。要するに、キャパシティが魔術そのものに関わってくるわけではないのです。魔術の優劣は、ほとんどが「亜素の操作」に依存するといっても過言ではありません。では問題の、体内の亜素に優劣が依存する筋力操作についてです。この作品において、亜素の量は、全員均一です。それを踏まえ、V・八話の『強弱は「1―, 1+, 2―, 2+, 3―, 3+」の六段階で表す。』に注目してください。そして先程の、「亜素の操作」に依存するという文章を思い出してください。筋力強化で3+にするためには、高位の亜素を融合させなければなりません・・と、ここまででは理解できませんでしたね。人間は全て、同じ量の亜素を所有している。付け加えます。『だが、それを扱えるかどうか、魔道師としての実力の差として表れる』ということですよ。全員は同じ量の亜素を所有している。しかし、それを扱えるかどうかは、個人によって異なるというわけです。この理屈でいけば、全員が同じ量も亜素を所有していることの証明となります。

②

Q・そして霊・魔的概念がある場所で割合の観測がされたという事は、その霊・魔的概念が存在する事になります。

場所、または地脈に関連する場所ではなく、そこらへんに建てられた墓地や寺院の場所にピンポイントで反応が表れたという事は、地球



の地軸や磁場などの自然による現象が亜素と関係はしない。ということは、墓地や寺院と関係のある何かが必要となってくる。

結局は墓地も寺院もこう言っちゃ悪いですが、ただの建造物です。そこに必要な存在・・・幽霊と仮定するならば、その存在を肯定する事になります。なにせ亜素の割合が変化する為のナニかがそこに存在しているのですから。

もしそれが幽霊、悪魔、魔そのもの、それら二次元にしか存在しなかった空想上の概念だとしたら、それは本当に存在しているという事で良いですか？

A：。作品には、「変化が見られたため」と書いています。地球の環境と一切関わっていないため、そこからこれは完全に【原子・分子・イオン】とは異なる類のものと証明できますね。では、何故寺院等だけ変化が見られたのか？亜素は霊・魔的概念物質であるのか？というところです。亜素は霊・魔的概念物質であるといえます。地球の環境に一切関係しない時点で、この物質はこの地球上で完全に独立している物質です。環境で変化しない＋未反応である。このことから、いわば【存在していない】状態といえます。亜素の融合とは、亜素を【存在している】状態へと変化させ、事象に変化を起こす行為です。

では寺院では、常に存在している状態を保っているのか？それは地球上等しく否です。では何でそこだけ変化しているのか？この変化というのは、量が増えているというわけではありません。そこにしかない特有の振り分け番号の亜素があったということです。寺院や墓地は、他のどこよりも【吊い】に縁のある場所です。吊いとは死者と最も深く関わる行為。よって、【蘇生】や【霊】を操作可能にする亜素は、寺院等にしか存在していません。このことから、寺院で亜素の変化が見られ、霊的概念に関われる＋地球で唯一独立した物質ということから、霊・魔的概念物質であると証明したのです。決して、本作では幽霊などのカルト的なものは存在すると扱いませんね。

③

Q・亜素を反応させるのに、何故言葉（展開式）が必要なのでしょうか？

A・この展開式は【亜素】に向けての式ではない、というところをまず始めに理解せねばなりません。では何に向けてか？それは自らの脳です。中二病臭く言いますと、脳は体全体を支配していますね。亜素の操作というのも、脳で処理を行います。この展開式というのは、言わば脳への伝令です。亜素の操作の処理は、大脳で行われます。大脳に展開式で伝令を送り、後はそこから外の亜素に干渉し、融合。これが亜素処理の一連の流れです。展開式は、言わばショートカットのようなものです。亜素の融合というのは、展開式無しでもいけません。ですがその場合、脳への負担が大きく、時間も掛かってしまいます。展開式の正式名称を思い出してください。【亜素反応簡略式】そう、これは簡略式なのです。亜素の融合で大脳の処理を早くするため、我々の馴染み深い【言語】という形態をとった。

④

Q・亜素を観測出来る方法をもう少し詳しく教えて下さい。

A・未反応体の状態は「存在していない」状態といえるのです。では観測のためには、存在している状態にしなければなりません。さて、その手段ですが、Ⅱ・第四話を思い出してください。あの時さらつと【感知術昌】というものが出てきましたよね。亜素の融合と移動を感知し、反応するというあの機械です。存在させるために一番手っ取り早いのは、移動させることです。そこで、最新話の1つ前の回。その時に、観測計というものが出てきました。あれは、機械の中で純空気以外のものが確認された瞬間、反応するという機械です。その中で亜素の移動が起きて、機械が反応した。ちなみに機械が反応したのは、亜素の自然移動です。少し話がずれますが、亜素は感知されないだけで、独立しているとはいえ、移動を繰り返しているのです。風が起きたりとか、そういう反応を起こす亜素は、絶対に自然融合を起こすことはありません。しかし、亜素は自然移動の段階で、他の亜素と

融合してしまうことがあります。ですが、人の手によらない自然融合は、何も起こらずに消滅してしまいます。ちなみに、反応を起こす亜素が融合しない理由は、亜素の起こす反応が「拒絶」が本質だからです。・と、ここでは省かせていただきますね。質問してくださいれば、いくらでもお答えします。では観測方法の話に戻ります。観測方法は、その自然融合を利用しています。研究者2人が各地を回り始めたのは「振り分け番号」が提唱された後ですので、既に反応が起こることを知っています。それを踏まえ考えると、反応が起こるかどうかを調べられるのは、異物に反応する観測機。反応自体を調べるのは、研究者自ら亜素を操作して調べていました。まとめると、「自然移動・融合」を踏まえ、研究者は「亜素」の存在を確信した。その後、振り分け番号の仕組みを利用し、自ら反応を起こして亜素の割合を観測・といった流れです。

質問以外の、説明補足。

亜素の反応というのは、基本的に「拒絶」が本質です。1 a + 3 a などと書きましたが、実際は反応して事象に変化をきたす融合は、拒絶が本質となっています。言わば磁石です。磁石のように、+同士を近づけると、そこに抵抗する力が生まれます。亜素の融合で事象に変化をきたすのは、その抵抗の力を利用しています。例外も存在しますが、亜素と亜素がくっついて、なんかヤヴァイものになるって訳ではないため、ご理解ください。

(磁石は例えて、実際に+極とかがあるわけではありません。)

## V・第十話

「ここ・・・は・・・?」

どうも形容できない。表すとすれば、この世の『無』を全て詰め込んだような空間だった。

「でもこの景色・・・どこかで。」

俺は一度、この景色を見たことがある。確か、大規模内乱での紫苑との戦闘。その時にこの空間を使用した。この空間で、『天使の武装』を使用した記憶が微かに。

「いやまさか、寝ている状態で此処に来るとは思わなかった。」

俺には『天使の武装』・・・というかこの言葉を何故知っているのかもわからない。当然、あの時何故使用できたかも分からない。もう一度使えといわれれば、恐らくすぐには使えない。

「天使の武装・・・ちよつと待てなんだそれ。駄目だ・・・記憶に霧が掛かってて。」

最早記憶も曖昧なこの武装は、かつて紫苑を玉砕した・・・らしい。

「しかもこれ夢だよな・・・。何でこんなに現実味があるんだ?」

嗅覚のそれも、触覚のそれも。全てが現実に近い。まるで夢ということのを忘れそうだ。

もちろん、そんな夢が当然平凡なまま終わるわけも無く。

目前に、白銀の光に包まれた、なんとも美しい一つの伝説が顕現した。

「己身滅時 剣天切裂 主神力与」か・・・。」

『Ich denke: Name: language...』

何故か、その暗号じみた言葉が、俺には理解できた。

今は、『自分でもその名前は長いと思う。』と言っている。

「いや、でも他の呼び方もないし。」

『B i t t e : A n r u f . . . E n g e l E i n e S c h a u

ke1』

「天使の一振り・・・やけに格好悪くなったねえ。」

天使の一振りと呼んで欲しいと言っている。勿論従うが、正直センスは無い気がする。

「まさかこんな下らない話じゃないだろう。本題に入ってくれ。」

此処からは、日本語訳で記す。

『では本題に入る。貴様が【天使の武装】と呼んだものがあるだろう。あれは実は、2回限りのハイリスク・ハイリターン技だ。あれを2回使えば、貴様の脳の大脳下垂素・対素処理器官の両方が破壊される。もうその時点で、魔道師としても、解放術師としても再起は不可能だ。これが貴様に伝えたかったこと。簡潔にまとめると、あの大技はあと2回しか使えない。よく覚えておくようにということだ。』

長い説明だったが、最期に簡潔にまとめてくれたため、俺でも理解できた。

「質問だ。下垂素・対素処理器官が破壊されたらどうなる?」

『簡単なこと。恐らく1週間・5日間も生きられないだろうな。なにせ、地球最後の兵器としての処理機能を完全に失うのだから。力のバランスがとれなくなる。だから気をつけな。』

「・・・了解した。肝に銘じておく。」

『あと、1つ忠告だ。貴様の敵は・・・全員身近に潜んでいるぞ。』

唐突で、頭が追いついていかなかった。

「ちよ、ちよつと、あ、まって!!」

『では。またいつか。』

視界がぼやけて、俺はその世界から離れた。

「くっ・・・はあっ!!はあ・・・はあ・・・」

なかなか悪い目覚めである。疑問を抱えたまま目覚めるというのは、どうしてこんなに気持ちが悪いのだろうか。

「仕方ない、もう一度寝て!」

「なーに、阿呆なこと言ってるの？時計を見なさい、時計を。」

「だ！な・・・なれだ!!」

「逆よ逆。というかい加減起きて。後5分でたくして頂戴。」

時計を見ると7:50。校門閉鎖が8:00。なんとも絶望的である。

「いや、こういうときは逆に落ち着くのが・・・」

「頁壹拾参「銃撃術式・壹番」

「ふむ・・・っておい!!殺傷力考えろ!!」

まさか部屋で銃を放つとは。恐るべし。

「はいはい分かりました。じゃあ準備しますよ。」

俺は重い足取りで、ゆつたりのつたりドアに歩いていった。

(敵は身近にいる・・・)

夢の記憶がフィードバックする。

(いやいや・・・まさかな。)

「兄さん?・・・早く準備しなさい!!」

内乱のこともある。しかも俺は、まだ彼女の正体を知らない。何故教えてくれない?何故隠そうとする?

彼女は、いくら問いただしても教えてくれなかった。

(しかも、TATユナイテッドワークスはどうなったんだ?)

「いい加減に・・・!!」

(まさか彼女がそれに関わってるのか・・・)

「準備しなさい!!」

(一度元帥と詳しくはなs)

「I am the born of my sword...」

「ちよ!!著作権!!タグないよ、fa○eタグつけてないから!!」  
「何回無視してるの!!いい加減準備しなさい!!」  
妹の叱責を受け、いい加減に準備を始める。

それから1日中、俺の疑問が晴れることは無かった。

この疑問が真実に近づくのか否か。

この疑問が彼女の正体を暴くのか。

この疑問が全てを終わらせるのか。

終わらせる?何を?

それすらも、今の俺には分からない。

あの剣が、余計に混乱の材料となった。

俺は思う。こんな混乱、紐を解いてしまえばきつと簡単だと。  
なのに俺は、一端も知らない。

じゃあ、知らなきゃいけない。

あの剣のお陰だ。ようやく真面目に問題にかかれる。

紫苑の笑顔を見てると、なんだか逃げたくなってくる。

というか、実際今まで逃げていた。知りたくなかったんだ。

ようやく気付いた。俺は唯の甘えに満ちた阿呆だった。

真実を知ること誰が救われるかなんて、俺にはわからない。

でも、知らなきゃいけない。

そんな気がした。

だから、ようやく行動を開始する。

いるかいらないのかも分からない

あてがあるかないかも分からない  
救済か災厄かも分からない  
分かることは一つ。  
俺は知らないやいけない。

地球最後の兵器として。

彼女の兄として。



真実へ

## VI・第一話

人は何か行動を起こそうとしたとき、えてして何か事件が起こるものだ。

「外務総統、大変です!!」

就寝の準備に取り掛かった頃、切羽詰まった様子で、幹部が電話を掛けてきた。

「どうしたー!こんな遅くに!!」

「WN×WRの支部5つが・・・」

どうやら本当に深刻、それでいて緊急の報告だったようだ。

俺は覚悟を決める・・・何を言われても冷静に対処する覚悟を。

「TATユナイテッドワークスにより、襲撃・制圧されました!!」

・・・は?!

言葉の意味が理解できない。

支部が・・・? WN×WRの・・・? ありえない。

自分の所属先を自慢するつもりは無いが、WN×WRの強大さには、俺は誇りを持っている。

「詳しく教えろ!! 時間・場所・人数・被害・漏洩情報・etc 全てだ!!」

「落ち着いてください! 存命支部に、これより元帥より一斉報告があ

ります！」

落ち着いた筈だったのに・・・逆に落ち着かされてしまった。

「すまない。君に当たっても仕様が無いな。想定外の事態で驚いた。」

「では、元帥に繋がります。」

まさか・・・まさか。想定外の範囲を超えていた。

「皆、聞こえているな。では説明する。今回襲撃されたのは

【アフガニスタン自治区支部】【ハルツーム支部】【スーダン支部】

【ロシア帝国西部支部（モスクワ支部）】【エンテント支部】・・・」

何故か、5つと言ったのに、元帥は4つしか言わない。

あれ、そういえばチャブンのすがたg・・・

【「インド帝国支部」だ。】

な!?インド帝国の支部は、確かチャブンが担当していた筈。

「支部長ランクの中でも特に優秀な6人。そのうちの1人【チャブン・マハラシユトラ】

が担当していたインド帝国支部が、敵の手に落ちてしまった。襲撃された支部の支部長は、全員殉職した。当然・・・含めてな。」

僅かに言葉を濁したのは、元帥の優しさなのかどうなのか。

でも、まさか・・・!!

チャブンが負ける・・・?殉職・・・!?

「げ・・・元帥!!」

「質問は許していない!!口を慎め!!天城翔!!」

「はっ・申し訳ありません!」

此処であえて強く叱責したのも、元帥の優しさということも俺には理解できた。

此処で自由な質問を許してしまつては、きっと誰も冷静ではいられなくなる。

「我々は早急に対応へ向かう!!オーダーはすぐに送る。それぞれ指定された箇所へ行くように!!くれぐれも、安全第一!パートナーとの連

携をとり、全員無事帰還するように!!我々の目的は、襲撃された支部より、敵を駆逐すること。WN×WRの支部長の力、とくと見せ付けろ!!」

『はっ!!』

彼らは、憎しみと怒りに燃えていた。

訳が無い。

彼らはとても冷静な目をしている。

それは狩猟民族。幾度の戦場を駆けた、本物の戦士だ。ならば『総統』の俺が、刃を鈍らせてはならない。

《オーダー》

作戦名・[Re:friedlich]

【アフガニスタン自治区】

◎ザーフ・スノードロップ

・第一実動体

・第八実動体

【ハルツーム支部】

◎アズイーズ・ラフマーン・サワード

・第三実動体

・第五実動体

【モスクワ支部】

◎ジョシユア・モールドフィツジ

・第九実動体

・第十三実動体

【エンテント支部】

◎有里美 杏

- ・第十四実動体
- ・第十八実動体

【インド帝国支部】

◎天城翔

- ・番外実動体

二十の実動体の内、八の実動体を対処に向かわせる。

残りの十の実動体を、支部長のかけた支部に向かわせる。

残りの二と他支部長は、NSA本部の警護。

番外実動体は、実動体に属さない成績優秀者を集めている。

インド帝国支部・まさか此処に当てられるとは。

「チャブン・我々の勝利を、君への手向けとする。だから・

安心して待つてくれ。」

微かに涙でぬれた頬を拭い、ドアを開け放つ。

「さて、始めよう。始まるのは、唯の殺戮だ。単純明快。」

静かな怒りを抱いて、なおかつ冷静に。

俺は確かに感じていた。

これを行く先に、真実があると。

「兄さん・行ったわね。はい、ご苦労様。あつちも有力な支部長を失った負担は大きいでしょう。やっぱり最大戦力投下して、殺しといて良かったわね。」

「その通りでございます。それと、転移先の設置が終わりました。いつでもどうぞ。」

「了解。じゃあ行くわ、さて・・・」

兄さんはどんな顔を見せてくれるのかしらねえ。」

彼女のその顔は、期待と無邪気さに溢れていた。  
最も、そんな可愛い・生ぬるいものではないが。

「わざわざあの子も投下したんだからねえ。期待してるわよ、兄さん？」

「それを私に言われましても。お楽しみのように何よりです。」

「貴方も本気出せて楽しかったでしょうに、っと……。転移・開始!!」  
床に現れた魔法陣が、眩い光を放ち、彼女はそこから消え去った。

「全く・実動部じゃないのに。まあ、彼の顔が見ればそれはそれでいいけどね!!ははっ!楽しみだ・楽しみだよ!!んん」

あ、あの、天城さん!私、待ってますから。

なんてね。はっはっは!!愉快だ、実に愉快だ!!」

崩落したインド支部を眺め、嘲笑う彼女の笑い声は、途切れることが無かった。

## VI・第二話

行き先は、日本支部。どうやら、そこでへりに乗りインドへ向かうらしい。

WN×WRの支部襲撃事件は、既にニュースで大々的に放送されている。

こんな事をされてしまったては、俺の正体が学校で流れるのも目に見える。

「ふう．．．っと、ファリンは何処か。へりの場所も聞かなきやな。」

日本支部長、杏の代わりに務めている【李 花琳（リ・ファリン）】。

俺のことを、唯一名前で呼ぶ珍しい支部長だ。

「翔！やつと来た!!」

「これでも急いだ。早急に案内してくれ！」

お互い、焦りが一切隠れていない口調だった。

俺も、冷静とは言え焦っていたのもまた事実。

「そういうわけにもいかないの。今各々出発させてしまったら、時差の関係で統率が取れなくなるの！だから、それぞれ移動時間が決められてるの!!だから待って、翔!!」

「そうか．．．よく考えればその通りだな。分かった、では待機させて貰おう。」

やはり、冷静さを欠いてしまうと、当たり前前のことも考えられなくなってしまう。

自分では冷静になったと思っけていても、やはり無意識に焦っている。

「杏ももう来てる、中で休んでて！」

では、お言葉に甘えて休ませて貰う。

今の状況では、まず心を落ち着かせることが先決だ。

「あ、天城様！」

「杏、大丈夫だったか？なかなか辛い事件だったが．．．」

事件そのものは驚いたし、なによりチャブンの死は、大変辛いものだった。

加えて、杏とチャブンはかなり仲が良かった気がする。

記憶では、数少ない女性として、杏は所属した頃から仲が良かった筈。

「俺も焦ったが・・・何とか落ち着けたさ。」

「天城様・・・！」

こうして、素直に抱きつかれるのも久しぶりだ。

(やはり、か。流石に・・・)

「…ん…うつ…ひつく…！」

慰めの言葉も、この場では全てが安っぽく聞こえてしまう。

そう確信した俺は、ただただ優しく頭を撫でた。最善かは不明だが。

10分ほど経つと、彼女も泣き止んでくれた。

「もう安心したか？」

「はい・・・ありがとうございます。でも・・・」

まだ何か至らぬことがあつたらうか？

「天城様も、焦りが見えますよ?」

「なに!?やはり・・・」

自分では分からないが、無意識にということか。

「よしよし、天城様、大丈夫ですよ。」

「おい!はあ・・・まあなに、元気になってくれてよかった。」

この場を和ませる能力も、彼女特有の力であると考える。

「あら、天城様も落ち着きましたか?」

「お前のお陰でな。」

皮肉と本心が混じりあつた感謝を、彼女に誠心誠意伝える。

僅かに本心が強かったかも、ということは今は内緒に。

「翔、移動時間が発表されたよ!」

「よし、ようやく来たか。」

現在12時、回復には十分な時間を貰った。

「翔は、これから2時間後に出発。杏は、これより1時間後に出発だよ！」

《出発時間》

【アフガニスタン自治区】

これより0時間後

【ハルツーム支部】

これより4時間後

【モスクワ支部】

これより3時間後

【エンテント支部】

これより1時間後

【インド帝国支部】

これより2時間後

「2時間・・・!!いや駄目だ。せつかく冷静になったのに。」

「そうだよ、翔！落ち着いて、冷静に。」

女の子2人に宥められる俺って・・・。

「その間に最後の準備をしましょう、天城様！」

「ああ！チャブンの敵を・・・な。」

怒りを抱き、なおかつ慎重に。

俺はそこで、何があっても驚かない決心をした。

ようやく、決心が出来た。

筈なのに・・・

あんなものは・・・

きつと嘘だ。



「あら、ようやく来たわね、兄さん」  
「あ、天城さん、来てくれたんですね！…なんてな！はっはっは！！実に愉快だ！！」

俺はその日、『日常』に否定され、  
『最高の人生』ハッピーエンドを否定した。

## VI・第三話

「では、天城様。行って来ます。」

「ああ、くれぐれも安全には気をつけて。それと、冷静さを欠かないように。」

「ええ、天城様も落ち着いて。」

2人とも、ある程度の休憩時間のお陰で、ようやく冷静さを取り戻したようだ。

「杏。お前の力は、まだ分かってないことが多い。本気を出すなどは言わないし、寧ろ本気で戦って欲しい。でも・・気をつけてくれ。」  
「ええ、分かっています。天城様のその力も、同じくまだ分からないのですから、人の心配だけでなく、自分の心配もしてくださいね。」  
まったく、その通りだ。

今回の戦いは、相手のことも自らのこともよく分かっている。今まで経験してきた戦いとは、比べ物にならないほどの辛さだろう。

「では。」

「ああ、武運を。」

杏を乗せたへりは、支部を離れて戦場へと向かっていった。

杏が行ってから、1時間が経過した。

「翔！そろそろ時間だよ！」

「ああ。既に準備は出来てる。」

行き先は「インド帝国支部」。チャブンが殺されたところだ。

「作戦開始は、UTCで朝6時。WN×WRに直接声明が届いて、【我々は待とう】とか何とか言っていたらしいから、万全の準備で行こう・・・と元帥が。」

「了解。要するに敵は、本格的にこちらと戦う気だな。」

「うん・・生きて帰ってきてね。」

そう呟いた彼女の顔には、僅かな不安が見られた。

「ああ、大丈夫だ！なんたつて、WN×WRだぞ？たかが反政府組織には劣らないさ！」

「うん．．うん！そうだよね！がんばって、翔！」

「ああ、日本支部は任せたぞ。」

確かに、俺も不安はある。

でも、その不安に屈してはならない。チャブンのためにも、自分のためにも。

俺を乗せたへりは、天高く上り、西へと向かっていった。

《インド帝国 インディラ・ガンディー国際空港》

「外務総統！番外実動体、全員集結いたしました。」

「了解、作戦決行は6時だったな。それまで休んでいてくれ。」

いろいろな方向から人を集めたせいで、なかなか個性的な集団になっっている。

「．．．装備は？」

「鎧なんぞ甘えです。」

こんな脳筋ばかりである。

まあ、でも全員頼れる奴だ。

さて．．俺も精神統一でもするか。

「外務総統、時間でございます。」

始まるぞ、決戦が。

「外務総統、出陣前に元帥より通信が届きました。」

まさか、全員ではなく俺個人ということ。

「はい、元帥」

『体調は万全かね。』

「ええ、それはもう」

半日にも及ぶ休憩時間のお陰で、体調は万全だ。

「それで、用件をお願いします。」

『いや、一つ忠告があるんだ。』

忠告・・・覚悟は出来ているつもりだが。

『何を見ても驚くな。冷静さを欠くな。』

「勿論。覚悟は既に出来ております。」

『そうか・・・なら、見せて貰おう。君の覚悟を・・・。』

元帥はまだ何か言いたそうにしていたが、時間のため通信を切らざるを得なかった。

『では・・・もう一度言うぞ、絶対に冷静さを欠くな!!』

「はい。では、行って参ります。」

元帥が何故そこまで強く言ったのか、俺には分かる筈も無かった。

「到着しました。此処から先は徒歩で。」

「了解した、全員に伝えろ、作戦通りの陣形を取れと。」

「ええ、了解しました。」

陣形を取った俺たちは、インド支部へ向かった。

「では、此処から先は分かれる。分隊aは、右回り。分隊bは、左回り。そして、俺たち本隊は、正面から向かう。」

『了解!!』

「驚くな・・・って、まさかこの崩落した支部のことでは・・・ないな。」

この程度で冷静さを欠くほど、戦場に不慣れではない。

「じゃあ元帥はなんで・・・?」

その瞬間、瓦礫が崩壊する音が聞こえた。

「・・・敵か!」

俺はすかさず、剣を抜いた。

しかし、誰も現れない。

「まだ姿は見せないか。」

好都合だ。こちらとしても、まだ探索はしておきたい。

「よし、いくぞ。お前ら。」

俺は、後ろを振り向いてそう伝えようと思ったんだ・・・。

しかし・・・

「ん・・・? 1人足りなくないか・・・?」

「隊長、確かに1人足りません!!」

「おい! 隣の奴はどうした!?!」

気付けば、後列にいたはずの1人がいなくなっていた。

「わ! 分かりません!! きゅ、急に・・・というか、いなくなったことにも  
気付けませんでした!!」

なに・・・? 不審だ。

報告をしている彼ではなく、この事態そのものに・・・だ。

「全員! これからは、隣の奴に、十分注意して進め!!」  
『了解!!』

俺も、十分に警戒して進む。

「・・・っ!!」

また、瓦礫の崩壊した音が聞こえた。

これは、攫いの合図だと考えたほうが良い。

「大丈夫か!!誰か減っていないか・・・?」

隣の人を警戒・・・というのはあまり意味を成さない。

なぜなら・・・

2人同時に攫われてしまつては、誰も気付かないから。

「4人・・・だと!?!」

恐らく俺は、敵の混乱を招く作戦に、まんまとのせられている。

「くそっ・・・!!」

「外務総統!気配がまだ消えていません!!」

要するに、敵はようやく姿を表す気になつたということだ。

「[テンプラチャー・テンプラチャー・テンプラチャー・ディスクリミネーション・オール・マテリアル]」

かなり高度の詠唱だ。

サーモグラフィーの効果を利用し、不可視化している人間さえ見分けられる。

「いた・・・はっ!」

俺は、足元にナイフを投擲した。

どうやら、解放術を使って強化した速さのナイフは、避けられなかったようだ。

『くっ!』

敵は、瓦礫の山から落ち、行動を停止した。

「さあ、なかなか面倒くさい作戦を取ってくれたじゃないか。」

敵は観念したように、コートフードをゆつくりと下ろした。

「も、もう！酷いじゃないですか、天城さん！」

・・・は？

フードを取った敵は、俺と大変親しみのある少女だった。  
「な・・・なんで？」

彼女が、何故ここにいるのか、皆目見当もつかない。

「な、何でといわれると・・・」

彼女は、この世界に関係ないと思っていた。

彼女の夢は【WN×WR】に入ることだといっていた。

「私が・・・」

嘘だと信じたかった。

まるで、日常を否定された気分だった。

「TATユニテッドワークスの人だからですね♪」

何故？  
何故だ．．!!

「鏡月．．．里柁．．．!!」

「ふ．．．はっはっは!!予想通りの反応だ!!あ、しゃちよーに送ってやる。」

「何で!!何でだ!!」

「いや、さつき言ったじゃん。1回で理解してよ、ディザスターさん。」  
最早、言葉を紡ぐことさえ出来ない。

「うーん、もっと驚かせたいよね。うん、呼んでおくね。」

「外務総統!」

俺は、横から迫ってきていた魔術の光に対応できなかった。

「がはっ!」

鮮血が散る。まだ生暖かい。

この生暖かさが、命が散ったことを俺の心に刻み込ませた。  
(対応．．出来なかった．．?)

「ははっ!油断してたらディザスターさんも唯の人間だねえ!!」

「き．．貴様っ!!」

「ほら、冷静さを欠くなって。」



彼女が腕を振り上げた瞬間・

俺の右腕が、地面に横たわっていた。

「な・・なっ!？」

「ほら、興奮してるから僅かな変化に気付けないんだよ？」

よく見れば、設置型の術式が展開されていた。

彼女は、俺が驚くことを前提にしてこの作戦を立てていたのだ。

ならば、外務総統として、その作戦にこれ以上乗るわけにはいかない。  
い。

「己の身が滅する時、剣は天を切り裂き、主に神の力を与える」  
通常ならばこれで終わりだが、念のため強化しておく必要がある。

「神の力は神威を纏 その剣は玲瓏なりて その命は贄となりて  
我此処に在りて 人域たる地に神を降ろさん」

この力を使うのは初めてだが、不思議と失敗する不安は無い。

「己身滅時 剣天切裂 主神力与」  
オーバーゲート  
「過剰展開」

本来白銀の剣が、赤黒く輝く。

「いいねえ・・!!いいねえ!!張り合いが無くちや困るよ!ディザスター  
!!」

では行こう。全ての仇討ちだ。

「フアンセブ・エグゾアラット」

まずは「ファンセブ・ジ―アラッド」の進化技で、相手の距離を詰める。

「おっと！では行こう！」

彼女はしゃがみ込んでいた姿勢を止め、瓦礫の山を駆け出した。

「速度解放130%つと！」

解放術。当然だ、もともと対素がある以上、魔術は使えない筈だ。

「はっ！」

彼女に至り、一閃。

しかし・・・否、当然というべきか。彼女は裂け、瓦礫の山は砕けた。

「おお、恐い恐い。いやでも当たりたくないねえ。ほっ！」

彼女は、先程から槍・剣・細剣を投擲してくる。

「いやあ、武器が豊富でいいねえ!!」

「ふむ・・・なかなか興味深い技を。」

先程から彼女は、武器に触れただけでその武器を複製している。

「ふふ・・・どうだい？この国の錬金術は!!」

やはり・・・というべきか。

「錬金術を利用し、武器の材質を記憶・複製をいったところか。こちらの技術もまんまと漏れてしまったな。」

もともと、インド帝国の技術を応用したそれは、我々WN×WRの技術である。

「だがな・・・そう易々と敵の業を使うもんじゃないぞ。」

こちらが開発した技術だ。

弱点も知っていて当然だろう。

「ほうーじゃあ・・・」

彼女は、無数の夜空煌く剣・槍・細剣・大剣を顕現させた。

「これなら・・・どうだ!!」

「アタミゼイシヤン・アタミゼイシヤン・タイ・アート・アラウンド・ミー」

自分の周りの魔術を一定時間無効化する、初歩魔術だ。

「ふんーそんな初歩魔術で・・・こんな次世代の技術が破れるとでも!!」

数多の剣が空を舞い、風を裂く。

輝きと煌きが、万物を照らすようで。

「はっーやったわね。」

その輝きは・・・

瞬間にして、無に還る。

「当然のことだろう・・・?」

無数の剣撃を受けた筈の男の声が、高らかに響く。

「な・・・!?そんな筈は!!」

「複製したのは魔術。ならばその無数の剣の本質は【魔術】である。ならば、どんなに弱くても魔術無効化さえしてしまえば、全て消える。」  
俺は、一歩ずつ彼女に近づく。

「何故、自らの剣で戦場にたたない・・・?」

「ひっ!」

最早、彼女に余裕は消えていた。

「問おう、人殺しは楽しいか・・・?」

始めは攫ったのは彼女か疑っていたが、彼女のしゃがんでいた場所に人の首が転がっていたことから、最早間違いはない。

「それ・・・なりに・・・?」

どうやら強がっているらしいが、無駄に決まっている。

「ほら・・・貴様の剣で戦え、そして殺してみろ。」

どうやら、その挑発が随分と彼女には効いた様で。

「くっ・・・そがっ!!」

彼女は細剣を構え、その一步を踏み出した。

しかし・・・

『「ほら、興奮してるから僅かな変化に気付けないんだよ?」とでもいっておこうか?」

「ぎゃっ!」

最早見慣れた、人の血だ。

「どうだ・・・効くだろう?どうせなら仕返ししてやろうと思ってな

！」

残念なのは、飛んだのが左手のこと。

どうせなら、右手が飛んでくれた方が楽だった。

「あ・・・ああ・・・あっ!!」

「おや、肢体の1つが飛ぶ痛みはまだ味わったことがなかったか。」

「や・・・やめっ!!」

俺は、その時周りが見えなくなっていた。

ただなんと言うか・・・高揚感と言うかなんと言うか。

「すまん、戦友の為だ。」

散れ、鏡月里祢。」

『あえてもう一度、ほら、興奮してるから僅かな変化に気付けないんだよ?』

俺は確かに、鏡月に剣を振り下ろそうとした。

なのに何故・・・?

剣ごと右手が散っている・・・？

「ふっ・・・はっはっは!!グットタイミングすぎるぜ!!フェンリル!!」  
先程まで恐怖に慄いていた彼女が、急に高らかに笑う。

「一体・・・!!」

「おやおや、これは始めまして。私、【アルスファント・フェンリル】と申します。」

「だれ・・・だ!!」

「TATユナイテッドワークスの代表取締役補佐をしているものです。」

代表取締役補佐・・・？

聞くだけだと、なかなか中途半端な職に聞こえる。

「んで、私が潜入捜査部部長の、【鏡月里柝】です♪」

潜入捜査部・・・部長？

WN×WRで考えれば、重役の内の一つである。

「リーダーは・・・どこだ!!」

「おや、代表取締役ですか？居りますよ。」

「あーはいはい。出て行くつもりだったわよ。」

その声は随分と聞きなれて・・・。

「ま、さか・・・？」

俺が戦場でであった、穢れなき白銀の髪で。

「右手が無いなんて・・・痛そうねー。」

もう1人の、地球最後の兵器・・・。

そして・・・

「良かったら治療でもしてあげるわよ？」

兄さん？」

自称、俺の妹を語る人物。

【天城紫苑】その人であった。

「紫苑も・・・鏡月も・・・何で!!何でだよ!!」

俺はその日、『日常』に否定され、

『ハッピーエンド最高の人生』を否定した。

## VI・第四話

さて、この感覚はいつ以来か。

絶対的な力の前に、抗えず。そして虐げられる。

私はその瞬間、完全な、完成されたその力に屈し、自分の力を否定された。

「全く・・・慣れない力に縋ろうとしても・・・無理に決まってるじゃない!!」

彼女は、嘲笑うかのような言葉を放ち、私に無数のアンデッドを仕向ける。

「くっ!どうか・・・どうかあの力を使えば!!」

私は、確かにあの得体の知れない力に縋ろうとしていた。

実際、あまり記憶には残っていないのだが、前に彼女を圧倒したのは覚えている。

「それに・・・!何で!!なんで貴女がそっち側なのよ!!」

「何故と言われてもねえ・・・?」

彼女は、妖艶な笑みを浮かべる。

「それは、私がこの子達のリーダーだからに決まってるじゃない。」

「リーダー・・・ですって!!」

では、私たちのことを騙して接触していたことになる。

その事実が何よりも・・・否。

「天城様を・・・騙していたと?」

「ええ。人聞きは悪いけど、残念ながらそういうことになるわね。」



天城様を騙していたという事実が、何よりも許すことが出来なかった。

「そうですね…」

最早、これ以上聞くことは無い。

彼女が、何故そちら側についているのか？

何故、騙してまで私達との接触を図ったのか？

何故・・・？何故・・・？

疑問は尽きないが。彼女は、天城様を騙していた。

何より、不誠実な行いをした。

ならば・・・

「その事実だけで・・・十分だ。」

「うん？何か言ったかしら？」

ようやく理解した。私のトリガーはこれだ。

【天城翔に、人為的に絶対的な傷害が発覚した瞬間】

亜素とか、そういうものの研究をしている者達に話したら、馬鹿馬鹿しいと言われるだろう。そんな理由で、亜素研究の根底を覆されたら、堪ったものではない。

「感謝しよう、天城紫苑。ようやく、この力の使い方が分かってきたぞ。」

「あら、そう。それは残念。口調も変わっちゃって、どうやら相当な慢心状態らしいわね。」

「慢心ではない。歓喜・・・と言えば正しいぞ？」

私は、興奮状態の真っ只中にいる。

私についてきた兵士は、皆死んだ。

恐らく、コイツは私を倒したら天城様のところへ行く。

ならば・・・

止めるしかなかるう？

「では、行くぞ。【地球最後の兵器】」

「ふくん。まあ精々頑張んなさい。」

私は、二丁の愛銃を手放す。

ああ、何故だろう。今なら分かる。

この力はどう使うのか。どう詠唱するのか。

ああ・・・自分の中に無限の力が流れ込んでくる感覚が。

そう、それはまるで・・・

地球の心臓と繋がっているような。

では行こう。

「容認体・・・認証。多重展開術式・・・過剰展開《オーバーゲート》」

「オーバーゲートねえ。」

オーバーゲート。それは、普通の詠唱に一説足すことで、威力を格段に上げる技だ。

「I will kill you no matter how  
much you resist.

【抗おうと、狩ろう。】

Even if the world is going to  
end,

the storm of massacre will not  
stop.

【世界が終わろうとも、虐殺の嵐は止まらない。】

Death is the reach of mankind.

【死は我が手の届くところに有。】

Your heart is already in my hands.

【貴方の心臓は、既に私の手に。】

Let's get started, it's the beginning of the end.

【さあ、終わりの始まりだ。】

いつか見た詠唱を、全く同じように。  
しかし、威力は格段に上がっていて。

「It was released, this time now!!!」

【今、放たれた!!!】

威力も剣の数も莫大。

加えて、対無効化結界。魔術を無効化する結界も、貫通させてしま  
う。

「終わり・・・ダー!」

「まさか・・・」

対策してないとも思った?」

彼女は、慣れた手つきで本を呼び出す。

やはりその本は、酷い赤色をしていて。  
だが・・

前見たときとは、妙に薄い気がした。

「【外典・我道照照 冥香命裂 僅灯与与】」

外典!?!まさか、まだ隠し玉があったとは。

「頁四【降臨術式・神至位】」

神至位?聞いたことの無いなまえ・・だ・・。

思わず、言葉を失う。

その門の巨大さには。

「ナニ・・?」

「どう・・!?!どうよ!!この素晴らしさは!!」

剣は、なぜかその全てが反れて、門に吸い込まれていった。

剣が吸い込まれる・・。

そんな規模じゃなかった。

「随分ト・・視界ガ、良クナツタナ。」

門が開いた瞬間、瓦礫が全て消え去り、その周辺が一気に荒野になっただけから。

「ふふ。そうでしょう。」

あの門は・・・異常だ・・・。

「だって・・・」

この術式は、一瞬だけブラックホールを発生させる術式なのですから。」

ブラックホールだと・・・？

今の衝撃に耐えたせいで、大分体力を持っているのかれた。

「It was released, this time now.  
w。」

もう一度、剣を放つ。

「流石に何度も使うわけには・・・いかないわね!!」

どうやら、例のブラックホールは、何度も連続では使えないようだ。その面においては、こちらの方が勝っている。

「還元術式・神至位」

今度は、彼女は突き進んでくる。

しかも、彼女に当たった剣は、全て霧散している。

「ふう・・・もう、この外典作るのに、相当な時間掛かったのよ。決して人が至ることの出来ない次元の魔術【神至位】。それだけを集めているの。」

解説は挟むが、彼女は一切臆することなく向かってくる。

「つ!! It was released, this time now!  
It was released, this time now!  
ow!!」

何度も、狂ったかのように剣を打ち続ける。

しかし、彼女に当たった剣は、その全てが墮ちる。

「ナンで・・・なんで!!」

力の乱用により、そろそろ限界が近づいてきているのが分かる。  
ならば・・・剣を持って、そのまま突き進むべきだ。

「ははっ!!はははっ!!楽しいわ!!」

「行かせない!!行かせない!!絶対に、天城様のもとへは!!」

私は、顕現させた剣を持ち、大きく振りかぶる。

「全く・・・見てなかったの・・・?」

彼女は、思ったとおりに剣を霧散させてきた。

当然、想定内だ。

「本命は・・・」

私は、剣の柄から手を離し、そこから勢いを殺さずに手を腰へ持つてくる。

そのまま、腰を捻り・・・

剣があつたはずの場所に収まっていた、マグナムを間髪いれずに放つた。

その時間、本当に一瞬。

ならば、いくら最強と言えど対応は出来ない筈で。

見事、彼女の右目は飛んだ。

「ふくん・・・なかなか・・・面白い、じゃない。」

「右目・・・ねえ。右脳を狙ったんだけど。」

まあ、当たればよいだろう。

「でも残念。貴女、もう時間切れよ？」  
「・・・え？」

私は、満身創痍で何も感じていなかった。

「まあ、そんな状態じゃまともな判断は出来ないでしょう。」

私は、自らの視界が点滅していくのを感じた。

そう、それは白くなったり、忌々しい敵の顔が見えたり。

「大丈夫。貴女は交渉材料。死なせないわ。」

その言葉と同時に放たれた銃弾を、私は避けることができなかつた。

もう・・・まともな判断なんて出来ない。

打たれた場所だけが冷静に分かるなんて、なんと嫌な話なのか。

「ふふ!!あはは!!お返しよお返し!!5発で十分よねえ!!」

左目と・・・左肺・・・右手に、左足の太股・・・そして下腹部だろうか。

さて、この感覚はいつ以来か。

絶対的な力の前に、抗えず。そして虐げられる。

私はその瞬間、完全な、完成されたその力に屈し、自分の力を否定された。

「天城・・・さま・・・。」

私は、頬を伝う僅かな温かみ。

そして、腐りきった痛覚が反応する僅かな痛みを感じながら・・・

敗北を認めた。



## VI・第五話

杏が敗北した同刻。他の制圧隊は・・・。

「こちらジョシユア。敵を殲滅し、無事制圧が完了。」

想像以上の敵の弱さに、私は驚いていた。

WN×WRの支部を一つ乗っ取ったんだ。こんなに弱いわけは無い。  
い。

(ということは・・・主力は他に?)

「了解。エンテント支部からの連絡が途絶えた。状況確認のため、すぐに向かってくれ。」

エンテント支部……。確か杏のところだった筈。

「杏が苦戦ねえ・・・主力はそっちか!」

当然、この程度の簡単な仕事で終わるとは思っていなかった。

だが、あの内乱での戦闘を見るに、本気になった杏を止めるのは困難な筈だ。

「くっ・・・よし、早く行くぞ、お前ら!!」

私達の制圧隊は、なんと僅か1人も欠けていない状況だった。

そう、それほどまでに敵が弱かったのだ。

それは、雪のように脆く、花のように散りうる容易い軟弱たる敵であつた。

このような者達が、WN×WRの陣地を掌握したかと思うと、逆に自らの組織に怒りを感じた。

「油断大敵・・・か。」

「支部長!参りましょう!」

「ああ、分かった。じゃあ行こうかねえ。」

私は何を見てもうろたえることは無いが、あの2人は・・・。

あの2人とは、当然ディザ殿と杏のこと。

「まだ・・・子供なんだよなあ。」

僅かな不安を胸に、支部を目指した。

そして同刻。

「こちらザーフ。制圧は至極簡単に終了しましたが・・・」

奥歯に物が挟まったような言い方である。

「こちらCHS。どうされましたか。」

「いえ・・・敵の中に日本人がいたもので。加えて、彼らは恐らく高校生だと思われれます。そのため、日本国立高等学校の生徒ではないかと。写真もあります。情報部のほうに回して、調査をしていただければと。」

反政府組織なんぞに、高校生がいるはずも無い。

加えて、刃を交えたから分かる。彼らはなかなかの上級者だ。

彼らと言うのは、男子1人、女子1人であったからだ。

「ザーフ様、エンテント支部へ向かえとの報告が。」

代弁は、実動体では珍しい女性の兵士だった。

「苦戦でもしているのですか?」

「はい。杏様が。そのため、ジヨシユア様と共に向かえと。」

「了解です。」

こちらは、僅かに負傷者が出たものの、殉職者はいない。

敵には僅かに苦戦はしたが、あまり卓越した強さは見られなかった。

「このような者達が私達の陣地を蹂躪したと考えると・・・」

「些か・・・不思議でなりませんね。」

「・・・どうされました。」

「いえ、何でもありません。参りましょう。遅れるわけには行きません。」

僅かな疑問と不信感を抱えつつ、支部へと向かった。

おおよそ30分が経過した。

「ザーフ様、こちらを。」

先程の彼女が、大変近未来的な自動計算機を見せてきた。

・・・俗世には、パソコンとして出回っている。

「情報部。もう既に判明しましたか。」

先程情報部に調べさせた、日本人の正体が判明したらしい。

「ふむ、名前は・・・」

清輝 壬と、清美 魅宇・・・？」

## VI・第六話

「ごほっ、ごほっ！大丈夫かい、魅宇？」

瓦礫の中から顔を出した少年は、同志の存命を確認した。

「ええ・大丈夫です。あちらに私達の情報が回ってしまいましたが大丈夫なのですか。」

「いや寧ろ、回ってくれた方が好都合だ。」

彼女の心配に対し、不安どころか寧ろ、望んだ通りと言わんばかりの返答だった。

「好都合・・・とは？」

やはり、彼女もその言葉には余り納得がいかないようだ。

「天城翔に僕達2人が関与していることがばれた方が良かったことさ。彼は恐らく、潜入捜査部部长との会合を果たしている筈さ。ならば、それなりの混乱状態にあるはず。加えて、代表取締役の登場さ。混乱は最高潮に入っている筈だ。そこに更に、学校関係者の登場で追い討ちをかける。これで、彼には易々と冷静な判断は出来なくなる筈さ。」

要約すると、混乱の連続に最後に会長が入れば、最早冷静な判断なんて出来なくなるだろうということだ。

「ふむ。理解しました、会長。」

「いやあ、でも。流石に支部長クラスの一撃は痛いねえ。」

逆に、支部長クラスの一撃を受けて生きていられる彼らは、素直に賞賛に値する。

「受身だけ訓練し続けた甲斐がありました。」

「はあ・・・でも結局、僕達って捨て駒なんだよなあ。」

そう、彼らは卓越した地位には就いておらず、こんかいも捨て駒として用意されたのだ。

「井の中の蛙でした。」

「まったく・・・辛辣だけどその通りだねえ。」

溜息をつきつつ、彼らはWN×WRの残兵に見つからないよう、ゆっくりとその場を離れた。

「で？治療は必要かしら、兄さん？」

彼の混乱を他所に、先程から皮肉ばかりを吐いてくる。

加えると、勿論剣の力があるため、治療なんてする必要は無い。

「代表取締役。多分、そのまま行ってもあんたの兄は答えちゃくれな  
いぜ？」

潜入捜査部部长を一瞥すると。

「知っているわ。唯の皮肉よ、無駄な口は慎みなさい。というか、もう  
帰りなさい。」

「ええ・・・せっかく来てやったのに。」

舌打ちをする彼女には、学校での面影などはどこにもなく。

「鏡月も・・・なんでだよ。」

これ以上混乱を煽られるのも癪だろうか、彼は僅かばかり声のトーンを落として問いかけた。

「ああ？もう、さつきから質問してばっかじゃねえか。まあ、仕方ない  
けどな。」

その口調にも、元の彼女をはめようにもはめられない。

「いや、貴女がその組織なのは理解した。何故、わざわざ学校にまで来て俺に接触しようとしたんだ？こんな事をしたということは、貴女は敵と言う認識で間違いはない筈。接触の中で、俺を殺せばよかっただけの話じゃないのか。」

思えば愚かだが、彼は確かに彼女に全幅の信頼を置いていた。

その油断は、彼女にも分かった筈なのだから、その際に殺してしまえばよかった。

「んま、そう考えるよな。ふっ―は。なに、目的は殺すことじゃないって事さ。」

目的は別にあるということだろうか。

「ならば・・・目的は。」

「ああ、それはな」

「待ちなさい。」

そこで、静止の声がかかった。

向くと、痺れを切らし、社長が怒りの形相で睨んでいた。

「それ以上は私が喋ることよ。勝手に喋らないで頂戴。」

「はいはい。悪かったねえ、出番を奪っちゃまって。」

彼女は、しぶしぶ控えた。

「目的はね、私が教えてあげるわ。」

社長様が、兄の方へ向き、繕いの笑顔を投げた。

「殺すことではない、と?」

「ええ。そうね、簡潔に説明すると・・・」

生け捕り。かしらね。」

生け捕りとは。なんとも動物的扱い。

「ほう。何だ、捕虜にでもするつもりか?」

「別に、戦争じゃないんだから。そんな捕虜だなんて。」

「どうやら、劣悪な条件ではないようだ。」

「じゃあ何だ? バイトか? 清掃員か?」

「何でそうなるのよ・・・。簡単よ、貴方は唯居てくれるだけでいい。いえ、違うわね。私達のものであるだけでいいのよ。」

・・・少し意味が分からない。私達のものであるだけでいい?」

「T A T ユナイテッドワークスには、地球最後の兵器が両者揃うことが必要なのよ。あ、別にW N × W R への牽制とかそういうのじゃなくて。」

「要するに・・・俺にW N × W R を裏切れと?」

素直に返答すると考えての発言ならば、大変滑稽である。

「無論ね。」

「滑稽だ。」

そう返すのも当然であろう。相手に攻めの一手があれば別だが。  
「はあ……。やっぱりね。もう、残念ね。大好きな彼に裏切られちゃったわよ?」

「なに……。?」

自らの懐に目をやりながら吐くその台詞は、どうにも不審だ。

「もう……。仕事も失って。大好きな人に振られて。貴女も散々ねえ。」  
貴女……。? 一体誰だと言うのか。

「どんな表情をしてるか……。見てみたいわねえ!

有里美……。杏?」

杏……。!?確かに言った。今、杏と。

「おい……。どういうことだ?」

「あら、つい言っちゃったわ。でもいいわ、出てきて頂戴。」  
虚より穴が開き、そこに見えたのは。

「あ、杏……。!!」

見慣れた腰まで届く黒髪。幼さを残したその顔に……。  
刺さった5つの刃。

当然、彼は駆け、彼女の元へ向かうが。

「あら、駄目よ。それ以上近づいちゃ。」

社長様が彼女の首に剣をあてがうため、近づくことが出来ない。  
「くっ……。!」

「あら、焦りが見えてるわよ?ほーら、おとなしく組織を裏切る決断を  
しないで――。」

もう、この先は言わなくても分かるわよね?」

当然、杏を殺すということだろう。

「くっ……。」

どうするべきか。

「ほーら、早くー!」

自意識過剰なわけではないが、WN×WRが彼を失ったら、大変な損失になるだろう。

「もーうー遅い!」

とうとう、彼女は剣を振り下ろそうとする。

「・・・分かった。俺が組織を出よう。」

そういつた瞬間、敵の3人は満面の笑みを浮かべた。

「いやあ、兄さんならそう言ってくれると思ってたわ!」

「お!やっぱりな。社長は策士だねえ。」

「シヨウ・アマギ。貴方の英断、感謝致します。」

やはり、それだけ彼の奪取が必要だったのだろうか。

聞いた瞬間、杏という人質を蹴り飛ばし、魔術の鎖で彼を縛った。

「逃げられると困るわ。まあ、そんなことは無いでしょうけど。」

当然、抵抗することは無い。

彼は、彼女らがまだ警戒して、杏へ攻撃する体勢にあることは知っているから。

「ほら、行くなら早く連れて行け。この鎖だって、切ろうと思えば今すぐに切れるんだぞ。」

「杏様を捨てれば・・・でございますね。」

長らく口を閉じていた執事的風貌の男性が、ようやく口を開いた。

捨てる・・・というのは、殺すということと相違ないだろう。

「はっは!論破できないなあ!」

それに乗る、すっかり口調に違和感を感じなくなってきた、優しかった筈の少女。

「あなたたち、いい加減黙りなさい。」

ようやく本当に連れて行く気になったのだろうか。手錠に力が加わる。

【外典・我道照照 冥香命裂 僅灯与与】

頁三【転移術式・神至位】

突如として、地面に大きな魔法陣が現れた。



「これは・・・」

「ふふ、凄いでしょ。無制限に転移できて、しかも人数も無制限。素晴らしいでしょう?」

聞いたことはある。

あの、核兵器相当術式の1つ【山紫水明】だ。

まさか、たった一人。しかもものの10秒で完成させてくるとは。

「では、行きましょう? 貴女、そして私で、このセカイの頂点に立つの。」

「頂点・・・?」

「なーに、気にすることは無いさ! 唯あんたはついて来ればいい!」

「・・・分かった。」

彼は、眩い光の中に包まれていった。

最後に、この言葉を残して・・・。

「待つてろよ・・・杏・・・。」

一枚の紙を手放しながら・・・。

## VI・第七話

「はいはいー！兄さん、ここで待機しててね」

もつと監獄のような場所に入れられるかと思っただが、どうやら良い待遇だそうだ。

なかなか、清潔感が漂う普通の部屋だった。

「待機…まさか一年も待たせるつもりじゃないだろうな」

「まさか。何事も起こらなければ、1ヶ月位でいいのよ」

1ヶ月位…：…なかなかの待遇とはいえ、ここにそんなにいたら気がおかしくなりそうだ。

「この事態はどこに向かってんだよ」

「どこ…：…でしようね。だけど、まさかここまで私達の思惑通りに行くとは思わなかったわ」

手のひらの上で踊らされていたというのは、なかなか癪に障る。

「一体、お前達はどこを目指してんだ」

「あなたが知る必要は無い…：…というか、近いうちに知ることになるわ」

ほう、なかなか説明になってない。

俺は、去る際に手紙を残してきた。

そこには「敵の情報持ち、帰らん」と短く書いてある。

ようするに、相手に妥協して捕まって、情報を内部から得て帰るという事だ。

「そういうえば兄さん…」

「ん、どうした」

思い出すような仕草をした後、悪い笑みを浮かべた。

そして、顔を耳元に近づけてきて…

「お、おいー」

「ばれてないとも…：…思った？」

…は？

一瞬、思考が停止した。

「いや、手紙の事よ。ばれないようにしてたみただけど、誤魔化そうなんていかないわ」

そう彼女は言っつて、懐に手を入れた。

そして、1枚の紙切れのようなものを取り出した。

「ま、まさかー！」

「ふふふ…ウチの捨て駒がお手柄でねえ」

彼女の手には、杏に向けて落とされた筈の手紙が握られていた。

まるで、身の毛もよだつ感覚だった。

「生憎、面倒くさいことになるところだったわ」

最早、最後に蒔いた種すら、彼女に摘まれていた。

俺は、口を開くことさえ出来なかった。

「大丈夫よ、兄さん。これからは私達が、あんな組織のことなんて忘れさせてあげるわ」

彼女は妖艶な笑みを浮かべつつ、悪魔の誘惑を囁いた。

俺はただ、やせ我慢で強気に答えるしかなかった。

「はっ！やれるもんなら…やってみろよ」

「ええ。好きにさせてもらおうわ。あなたの精神が崩壊しても…」

ちよーつと記憶がなくなってもね」

どうやら、あちらは本格的に洗脳工作をしてくるらしい。ならば、WN×WRの救援を待ち、耐えるしかなかろう。

「あ、兄さん。今、救援を待つとか思ったわよね？」

「なっ!？」

心まで読まれているというのか。

なんだか、この先やっていけないような気がしてきた。

いや、駄目だな。弱気になつては。

「いや、伝えておくべきことは分からないのだけれどね。救援なんて、多分なかなか来ないわよ。だって、あちらもかなり慎重になる筈だもの」

「慎重に…?」

どうにも、彼女が言う根拠が見つからない。

「なんで私達が『杏』だけ残してきたと思う?」

「なんで…か。そもそも回収対象だったのかさえ把握してないんだが」

あちらの目的が分からない以上、そんな質問答えられるわけが無い。

「ああ、ごめんなさいね。彼女も回収対象だったのよ。でもあえて残した理由」

「あえて。ふむ…全面戦争の回避、か?」

あくまで、予想の中の最有力候補だ。

しかし、彼女の反応から察するに、正解だったのだろう。

「多分、かなりの戦力を俺と杏に投入したんだろ。何故って、支部長全員に対応できるほどの人材が居なかったから。そんな戦力に差がある状態で、地球最後の兵器に…容認体はよく分からんが、多分重要なんだろ、回収対象なんだし。そこで2人を同時に攫ってしまうと、全面戦争まったなしだ。地球最後の兵器を2人も使うなんて、きつと恐ろしく、想像するのも難しい位の、大事をやらかそうとしてるんだろ。でも、TATUユニテッドワークスにその準備が整っていない。だから、2人も攫う必要が無かった…それ以前に、攫ってはいけなかった。準備が整っても居ない状態で、戦争が始まってしまつて、壊滅待ったなしだ。あくまで全部想像で、証拠の一つもない。そして、何故このタイミングだったか? 大方、情報でも漏れたんだろう? 内部構成とか、な? だから、1人を攫つて牽制しておくのが得策だと考えたのか」

とりあえず、思いつく限りの説明を試してみた。

多分、50点程度貰えるだろう回答だと思う。

「流石…最近、頭の出来を疑ってたけど、ある程度聡明なのね」  
うわ酷え。口が悪いぜ、妹さんよ。

「満点回答ってことでいいの？」

「まあ、よくやった方なんじゃない？」

一番腹の立つ答えだった。

結局、どの程度当たっているのか。

「あと、容認体の需要を理解できれば、満点回答に近づくわ」

「結局そこじゃねえか。…まあ、情報を得ようとしてるのがバレてんのなら仕方ねえ、精々足掻かせてもらおうぜ」

「ここで待機って言ってるでしょ」

だが残念。昔と違って、おとなしく監禁されておく性質でもない。

まあ、目処はまだ立っていないのだが。

「ちなみに、貴方の予想したとおり、私達は貴方と杏にだけ大半の戦力を投下したわ」

「やはり、な。全ての支部長を圧倒できるなら、直接本部に攻めてきた方が頭がいい」

もし仮に、その力を持っていたとしたら、ここまで世間にバレなかったのが凄い。

何故そこまで隠れようとするのか、意図も見えないが。

「じゃ、私はもう行くわね。そうね…」

彼女は、またしても悪い笑みを浮かべた。

もう、本当にやめて欲しい。こいつの将来が心配だ。

「暇つぶしに、ウチの捨て駒2人を送ってあげるわ。良い暇つぶしになると思うわよ…」

さつきから…捨て駒って何なんだ。

というか、この施設の人知らないし。

知らない人と密室で2人きりとか…男でも女でも嫌だな…

「じゃあね、兄さん…」

必ず、あんな組織のことなんて忘れさせてあげるわ」

「はっ！そう簡単にいくと思うなよっ！」

正直言つて、全くプランは立っていないが、今はそう言うしかない。

まあでも…

次の来訪者があいつらなんて、その頃は知る由も無かつたんだが。

## VI・第八話

WN×WRで、最も厳かな雰囲気醸し出すその部屋【元帥室】その部屋に入ることが出来るのは、組織内の重役のみだ。

そんな部屋に、木の扉を叩く音が3回ほど響いた。

「元帥、失礼致します」

その声は、まだ若い男性のものだった。

その者の名は、ザーフ・スノードロップ。

「ええ、どうぞ」

聞こえてきた声は、元帥その人ではなく、若い女の声であった。

どうやら、扉が開けられたのはランズの仕業だったようだ。

補足説明として。ランズ・アプロディーテは、元帥の秘書も勤めている。

「…珍しいですね。まさかこの部屋にいらつしやるとは」

「いや、あの部屋は防音設備が整っていないくてね。今は大事だから、元帥としてここに居ないとね。それに、天城及び杏から連絡が途絶えたのが気になってね」

支部長全員を招集しているわけではないため、比較的柔らかな口調だった。

今回の報告の内容が、また険しい内容のため、深刻な雰囲気になるのは容易に予想できる。

「大体想像できるけど…2人から報告が途絶えたことについて…:…だよね」

「ええ、その通りです」

そう聞いた途端、元帥の顔色が変わった。

「では改めて…報告を、ザーフ」

「了解しました。まず、天城外務総統ですが、TATユニテッドワークス本部に連れ去られたものと思われます」

事実を淡々と告げるが、それに元帥は驚きを隠せずにいた。

「外務総統…が？」

「ええ。どうやら杏支部長を人質にとられ、やむを得ず連行されたそうです」

その報告にも、元帥は引つかかるところがあるようで。

「人質に…？ということは、杏はTATユニテッドワークスに圧倒されたと？」

ザーフは、俯き気味に淡々と告げる。

「その通りです。同時に、天城氏も圧倒されたようで、杏支部長を救出して撤退するということが出来なかったようです」

WN×WRが圧倒された事実を、包み隠さずに告げる。

オブラートに包まず、都合の悪いことを淡々と告げるということ、そこまで簡単なことではない。

「調査隊によると、TATユニテッドワークスの隊員は既に全員撤退。杏支部長は五箇所を刀で切り裂かれる重傷を負っていました。止血は既に済んでおりましたが」

天城が着いてきたら、杏に治療を施す。そして、WN×WRに返す。

大方、そんな契約だったんだろうと、思いを巡らせる。

「元帥、質問なのですが…」

「なんだ、言ってみろ」

考え込むような姿勢を解き、聞き入る姿勢に入った。

「妙なのです。天城氏と杏支部長は、あんなにも苦戦したのに、私達は一切苦戦を強いられなかったのです。あんな者達にやられるとは、流石に考えにくいのですが…」

確かに…と、元帥はまた考え込む姿勢に入る。

そして幾秒経ったか、何かを思いついたように、淡々と話し始める。「恐らく…いや勝手な想像に過ぎないが、他の支部は力を分散させるための囮だったのではないか？これも勝手な想像に過ぎないが、恐らく敵は杏と天城にほとんどの戦力を投下したんだろう」

そこで、元帥を制止する声がかかった。ザーフである。

「元帥！お言葉ながら、流石に私もそこまで考えは及びました！」



ならば何を…と、元帥は投げかけようとする。が、それより先に彼の言葉は紡がれた。

「杏支部長を、天城氏に全戦力を投下した…ならば敵は、2人が奪還に向かう先を知っていた即ち、こちらの情報が完全に漏れていたことになりませう！」

…確かに。

いや！本当にその通りだ！

2人が向かった先に、丁度敵の本隊がいた。そして、それ以外は囿。有象無象ばかりであった。

ということは、敵は完全にこちらの動きを知っていたということになる。

偶然なんかじゃない。出来すぎている…！

「ザーフ！杏と天城が向かった先に、調査隊は送ったか!？」

「ええ、既に。そして元帥、冷静に」

焦りが見える元帥を、ザーフが咎める。

「おっと、すまない…。ランズ、至急情報部へ連絡を回し、ハックの形跡が無いか探れ。ザーフは、情報が入り次第、すぐに回すように」  
『了解！』

2人は、ドアを壊す勢いで出て行った。

(まだ準備段階……想像以上に早い……まあ、

既にこちらは準備が出来ている。精々足掻けよ？T A Tだかなんだか。

(唯の有象無象が足掻く様、楽しませて貰おうか!!)